江戸武士の柳生新陰流
柳生厳周伝の研究（二）
――「燕飛」「九箇の太刀」「天狗抄」

赤羽根　龍夫

一

現代人が新陰流を学ぶことにどんな意味があるであろうか。「日本的身体の復権」いう視点から柳生新陰流を論じてみたい。

日本の剣術、特に柳生新陰流の身体操作の特徴は「風帆の位」と「浮沈の位」の二つである。この二つは古来から培われて来た日本人の身体遣いを元にしている。

「風帆の位」とは、風をはらんだ帆かけ舟が水の上を滑るように、踵を地に着け、足を上げないでする〳〵と歩む運歩の仕方であり、

「浮沈の位」とは、身体の軸を前後左右にぶらさずに、足腰を垂直に沈ませ、また反対に、伸ばすことである。

以上の二つが江戸時代の武士が遣っていた柳生厳周伝の身体遣いの特徴である。この二つの身体遣いから生じた新陰流刀法の特徴として、膝を弛めて足腰を垂直に下げる、いわゆる「膝をえまして」両手をもじって打つ「くねり打ち」、足腰の力で相手の太刀を打ち落す「十文字勝ち」、古伝の「一刀両段」、尾張柳生独特の「合打」があるが、これらの刀法も「風帆の位」と「浮沈の位」によらなければ厳密な意味では成り立たない。

現代、新陰流を名乗る流儀は多くあるが、どれもが江戸武士が受け継いで来たこれらの身体操作を厳密な意味で行っておらず、明治以来ヨーロッパから輸入され近代的身体操作を元にしており、したがって武士の新陰流と呼べるものは柳生厳周伝だけである。厳周と、その高弟・下條小三郎なき後、「一刀両断」の尾張使いである「合打」が厳密な意味で出来たのは、厳周伝を受け継いだ神戸金七だけだったと言われる。

「風帆の位」、「浮沈の位」の二つの身体操作が日本人のもともとの身体遣いとなったのは、狭い農地で多くの収穫をあげなければならないという日本的な農作業の結果によるもの思われる。

日本人の農業は細やかな手作業と長い農作業の時間を必要とした。そのため、疲労を出来るだけ少なくして手作業が出来るための身体操作が自然と身についたと思われる。田植えや草取り、稲刈りなど、全てが中腰での作業である。中腰は腰を曲げるのではなく腰を落とす。腰を曲げるとすぐ腰が痛くなり、長い作業は出来ない。そこで腰を垂直に落とすのである。農作業に限らず日本人は腰を落として膝をゆるめることを身体遣いの基本としてきた。このことを新陰流では「膝をえます」と表現する。

身体を折り曲げずに垂直に身を沈める上下の身体操作――ここから身体の中心軸の感覚が生まれた。→「浮沈の位」

手足を捻って身体を動かすのではなく、腰と肩を同方向に動かす身体操作—ここから左右の軸の感覚が生まれた。→「風帆の位」

この身体の三軸の動きを基本として日本人は身体操作を行ってきた。

明治になってなぜ日本的な身体操作が失われて行く道をたどったのであろうか。

明治の日本は国を富ませることを最大の目標とした。それには機械化された工場と強力な軍隊を必要とする。この二つのためには国民が号令のもとに統制の取れた動きをすることが必要であった。そこで受け入れたのがヨーロッパ近代の軍隊養成の体育であった。集団の統制を計るには、全体の動きが外からはっきりと見えなければならない。そのためには背筋をのばして胸を張り、手足を大きく振る動きが必要とされる。

こうして行進のための歩き方や整列の仕方、号令をかけて一斉に行う体育が小学校教育を通じて日本全国、津々浦々に普及していったのである。教育自体は、江戸時代から藩校や寺子屋を通じて全国的に普及していた。しかし国家の意志によって画一的に動ける「国民」を作ることが明治時代の学校教育にとっての急務であった。

その結果、明治中期以降、日本人の身体の動きは江戸時代までの日本人の身体操作と大きく異なってしまっている。腰を垂直に落とすことが日本人の身体の使い方の基本であったが、ヨーロッパ軍隊の身体操作は腰と膝を伸ばし胸を張ることを基本として成り立っている。その結果、股関節と肩甲骨の連動性ではなく、体を捻ったり飛び跳ねたりする筋肉の力を利用した身体操作中心となってしまっている。

現在、日本で普及している剣道も、江戸時代までの剣術とは大きく異なって、近代的身体遣いによって成り立っている。その間の事情は前著「柳生厳周伝の研究（一）」に詳説したので繰り返さないが、その影響は江戸時代以来の武術を伝えていると言われる古武術にも及んでいる。江戸時代以来の技を伝えていると言いながら、手足のバネを使って飛びはねるなどの近代的身体操作を平気で行なう場合が多く見られる。

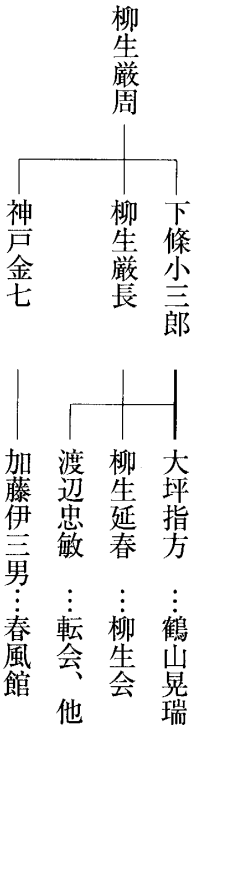
宮本武蔵の『五輪書』には「足の運びようのこと、常に歩むがごとし」、「踵を踏め」とあり、柳生宗矩の『兵法家伝書』には「歩みのこと、いつものごとくする〳〵と歩むがよきなり」とある。江戸時代の武士の身体操作は、少なくとも踵を踏み、足を上げずにする〳〵と歩むことであったに違いない。それは伝統的足運びを特に意識して守っている能の動きを見ても確かであろう。なかでも柳生新陰流の場合、能の金春流の足遣いの秘伝と技術交流をしたという言い伝えもあり、踵を着け、つま先を上げ「すり足」で歩む足運びを特に重視する。

この足運び——踵を着けつま先を上げる——を守っている古武術の流派は少なくなっている。特に新陰流を称する流儀の場合に顕著である。

それはいかなる理由によるものであろうか。

明治以降、現在まで行なわれている柳生新陰流をたどっていくと、幕末期、徳川御三家の尾張藩の柳生新陰流剣術師範であった尾張柳生十代・柳生厳周（としちか・げんしゅう）に行き着く。

現在、各地で行なわれている柳生新陰流の主な系統は次の通りである。



このうち柳生厳周の第一の高弟と言われたのが下條小三郎である。

下條は心形刀流の免許を若くして受け、当時新宿の若松町にあった柳生道場に他流試合に乗り込み、厳周に破れるや、直ちに入門し、後に高弟となった。また海軍兵学校も勤めた海軍中佐で、「明治年間の印可受得者中最高の地位の人」（杉田定一『新版・柳生の里』）である。竹下勇海軍大将や浅野中将と同期であるが、上官を殴ったために出世できなかったと言われている。しかし武術においては先輩格であった。

大正十一年、柳生厳周が息子の厳長に宗家を相伝して隠居すると、下條は厳長の後見役を自負したが、厳長とは意見が合わず絶縁した。

昭和五年、厳周が老齢のために厳長共々名古屋に帰ると、翌、大正六年に、下條は新宿に櫟山館道場を設立した。

幼くして厳周に学び、後に下條の弟子となった大坪指方は当時の模様を次のように伝える。（鶴山晃瑞『図解コーチ合気道』）

師（下条小三郎柳生新陰流印可）が、われわれのために庭内に建てて下さった櫟山館道場へ、竹下勇、浅野正恭などの、下条師海軍当時の級友達が通って来て、新陰を学ぶかたわら、大東流をはじめたものである。武田惣角先生が来られたのも、この頃であろう。そのうち、若松町植芝道場も出来、下条師のおともで、著者も植芝道場へ通い、・・・・

ここで重要な点は、新宿にあった下條の道場では、新陰流以外に大東流を稽古しており、武田惣角が顔を出していることである。

私は現在の厳周伝をそのまま受け継ぐ神戸金七系統以外の新陰流が、江戸時代の刀法から大きく隔たってしまった原因は、下條に遡るのではないかと思っている。そのことを見てみよう。

昭和六年当時の、以下の論に関係があると思われる人たちの年齢を挙げてみたい。

柳生厳周	八十七歳（翌年没）
武田惣角	七十一歳
下條小三郎	六十六歳
神戸金七	三十八歳
柳生厳長	四十　歳（昭和四年、近衛師団師範）
大坪指方	二十六歳
植芝盛平	四十八歳（この年、若松町に道場新築）

大東流の武田惣角は若い頃から剣術に並外れた才能を示したが、廃刀令により「剣の時代は終わった」という認識のもと、会津藩家老西郷頼母から受け継いだ大東流柔術の普及を使命とし、全国を渡り歩いた。

植芝盛平は大正四年に始めて惣角から大東流の指導を受けており、惣角は大正十一年、綾部の植芝盛平の植芝塾で浅野中将以下海軍士官たちを五ヶ月間指導している。

昭和二年、竹下勇の招きで上京した盛平は政界財界官僚軍人などの名士に合気柔術を教えるが、この頃の稽古後の集合写真には竹下勇、盛平と並んで白く長いヒゲをはやした下條の三人が中央に並んで写っているものが数点ある。大東流など日本の柔術は剣術を母体としているので、心形刀流や新陰流などの武術に長けた下條は、大東流を習う以前から体術の極意にも達していたのであろう。以前から惣角と交流があったかもしれない。

下條は昭和六年に出来た植芝道場に行き、盛平に新陰流を教えている。この頃の盛平はしきりに剣の体捌きを研究していたと言われる。私は、植芝合気道の成立には下條の影響も大きいのではないかという仮説を持っており、現在、研究中である。

前著で引用したように昭和十年古希(七〇歳)に達した下條は、眼も不自由になっていたにもかかわらず、大坪指方などの若い弟子たちが木刀で四方から打ち込んでくるのを素手で投げ飛ばしている。浅野海軍中将の弟で、植芝盛平と同様、大本教の幹部であった浅野和三郎が、この時の模様を記した文章を前著で紹介したが、その一部を再録してみよう。

下條さんはあいかわらずとぼけた姿で微笑しながら、俺の肉眼はどうせ何も見えはしないのだ、背後からでも横からでも何所からでも勝手に打ち込んで見ろよ、そう言ってそっぽを向いている。青年活気の門下生達は口惜しがってあちらからもこちらからも熾(さかん)に打ちこむが、しょぼしょぼ眼の下條さんの体には何やら別製不思議な眼、心眼がついている。太刀風三寸どころか一寸ぐらいの差で、ひらりと太刀をかわしてしまうばかりでなく、必ず相手を倒すかひねるかして致命傷をあたえないではおかない。

それから又下條さんは木剣を執りて構えの姿勢をとる。相手も同じく木剣を執りて構える。やがて機熟して相手が鋭く切り込んで来る。が、カチッと太刀が合った瞬間に、相手の太刀は左か右かへ流れ、下條さんの太刀はそのままスーッと相手の頭の真ん中に臨んでいる。三度五度幾度繰りかえしても同様である。つまり切り込んだが最後、相手はこのまま頭部を間二つに割られて居るのである。

晩年の植芝盛平を髣髴(ほうふつ)とさせる振舞いであるが、この時、下條は七十歳、盛平は四十四歳で、下條が植芝に学んだとは思えない。同年に行なわれた第一回日本古武道振興会演武大会では、竹下勇海軍大将は大東流を演武しているが、浅野正恭海軍中将と下條小三郎は新陰流を演武している。この時、下條の弟子の大坪指方も小南英一郎と新陰流を演武している。

前列中央・左から下條小三郎、植芝盛平、竹下勇

下條伝を受け継いだのは大坪指方である。大坪は幼年のころから厳周に学び、下條が厳長の元を去った時は下條に従っているが、後に厳長から控宗家の免許を受けている。大坪は弟子を取らなかったが、昭和六十年に日本伝合気柔術免許皆伝の鶴山晃瑞に柳生新陰流の師範印可を与えた。

私は鶴山から日本伝合気柔術と大坪伝の柳生新陰流を学び、鶴山が六十歳で急死した後は、鶴山が免許を受けた際に一緒に大坪から新陰流を伝授された稲益豊氏と新陰流の稽古を続けている。

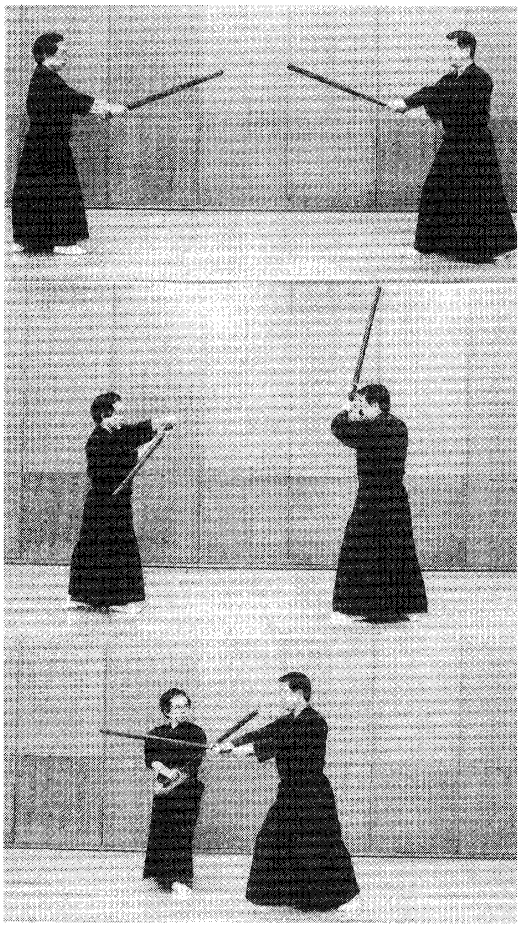
大坪伝新陰流の足捌きは大東流に酷似している。敵の刃の下に身を晒し攻撃を受ける瞬間、太刀と共に身を転じて敵を切る。これは新陰流本来の刀法というより、入身・転身を使った素早い体捌きで相手の攻撃を避けることを重視する。「新陰流は体捌きである」というのが大坪の口癖であった。「三学円の太刀」の二本目の「斬釘截鉄」を例にとってみよう。

大坪伝では、打太刀が左拳を切ってくるのを、使太刀は太刀を右肩の斜め後ろに廻しながら打太刀の打ちを抜き、左足を踏み込んで打太刀の右手を切る。と同時に右足を後ろに引く。直ちに剣先で打太刀の喉を攻めて、打太刀が撥草に退くところを、素早く打太刀の左に転身して二の太刀で打太刀の左の鬢を切る。（下記左　打太刀　稲益豊、使太刀　著者）

新陰流本来の刀法としては厳周伝（九九頁）のように前に出た右足で真直ぐに踏み込んで切らなければ刀で切る力が弱く、大坪伝のように後ろの左足で踏み込むと隙が生じやすい。大坪伝は相手の攻撃をまず体捌きで避ける合気柔術の術理と同じである。事実、竹下勇大将が書いたと言われる『女子護身術』にはこれとよく似た絵が載せられている。（下記右）

左足で踏み込んで切ると同時に右足を引くのは厳長伝も同じである。

先に、体を垂直に沈めて膝をえます「くねり打ち」は厳周伝の特徴であると言ったが、厳長伝にも「くねり打ち」はある。



（「新陰流を哲学する」）

厳長伝では、体を極端に前傾させて太刀を相手の太刀の柄中に放り込む。体が前傾する勢いで左足に重心がかかり片足でケンケンをするような足遣いとなる（「天狗抄」花車）。父・厳周は「金治の〇踊りは真似をするな」と言っていたようであるが、膝を垂直にえまさないで太刀を剣先から落とそうとすれば当然そのようにならざるを得ないであろう。

「秘伝」第3号　1990年

厳長が父・厳周の新陰流を変えたのは下條の影響が大きかったのではないかと私は推測している。厳周が厳長に宗家を譲った後、下條が厳長の後見役を自負したのもそのためではなかったか。

しかし昭和四年に近衛師団の剣術師範となった厳長は新陰流を使っての実践的な軍刀操作も研究・指導しており、下條ほどには体捌きを重視しなかったと思われる。それに当時は剣道界も盛んであり、厳長は合気柔術や合気道ではなく剣道家と結びついて家伝の新陰流の興隆を図ったために、近代剣道に合うように刀法を研究したのではないだろうか。

昭和十六年の宮内省済寧館道場での「武道大会剣道試合」には斎村五郎、持田盛二、橋本統陽、中山博通、笹森順造など、当時の一流の剣道家が演武している。なおこの時の新陰流演武は「三学円之太刀、九箇の太刀、天狗抄ノ内」として「打太刀　柳生厳長、使太刀　神戸金七」、「燕　飛」として「打太刀　柳生厳長、使太刀　成田雄三」となっている。

ここに春風館道場に掲げてある神戸先生が並べた尾張柳生の古い門人札を掲げておきたい。

徳川義親	先師　柳生忠三	長岡万太郎	杉山保次郎
徳川義知	柳生金治	萩尾孝之	佐藤政五郎
波多野太郎	柳生包治	槍術師範	神戸金七
八代六郎	下條小三郎	稲富鎗遊	（21名　略）
鈴木景滋	奥田正吉	山本正身	
柳生六助	林健太郎	碓氷重房	・・・
柳生房義	石黒大介	広瀬貞則	
柳生一義	中澤保三	天野八郎	吉田重成
先師　柳生三五郎	成田雄三	半田小太郎	伊予田哲郎

下條の次に尾張柳生を代表する人物は神戸金七である。

神戸金七は明治二十七年の生まれであり、八歳のときから厳周に師事し、新陰流の剣術と槍術を学び、若くして厳周の高弟になっている。厳長よりは二歳年下であるが、厳長が父に反発して、時代に合うように新陰流を改革しようと独自の道を歩んだのとは対照的に、厳周の教えを忠実に護り、厳周が伝えた江戸時代の新陰流をそのまま後世に伝えることを生涯の使命とした。その考え方は春風館の加藤館長にもそのまま引き継がれている。

江戸柳生と尾張柳生との関係においても、厳周は江戸柳生が本家、尾張柳生は分家であるという立場を護り、江戸柳生と尾張柳生は仲が良かったと考えた。しかし厳長は、幕末期の混乱で江戸柳生が衰退したのを機会に、尾張柳生こそが柳生新陰流の本流であるという考え方を主張し、江戸柳生と尾張柳生は江戸時代を通じて不和であったという説を喧伝した。

神戸金七（八十七才）

神戸金七は厳周の教えを素直に受けて、江戸と尾張にはそれほど刀法の違いはなく、江戸を本伝として、若干の違いは「江戸遣い」「尾張遣い」として両方とも伝えている。

現在、尾張柳生宗家は厳長の息子の延春氏が継がれているが、厳長が古流剣術を近代剣術に変えたように、延春氏は近代剣術を現代剣道風に変えたと私は考えている。少なくとも足を高くあげて大きく踏み込み、手首を使って打ち込む刀法は江戸時代までの柳生新陰流には存在しなかったのではないか。しかしそれが悪いと言っているわけではなく、時代に合うように改革した結果であるに違いない。ただ私は江戸時代の武士の新陰流とは何かという視点で論じたいのである。

また江戸柳生を標榜しているグループがあり、その多くが大坪伝を受け継いでいると言っているようであるが、前著で詳説したように、大坪伝の元は下條小三郎であり合気柔術系の新陰流である。大坪先生は江戸柳生の刀法を伝えたわけではなく、武道講話において江戸柳生と尾張柳生の違いを「江戸は心法中心、尾張は刀法中心」と分け、将軍家の兵法指南であった柳生宗矩の事跡を語っていただけであり、それ以外に心法については具体的な内容は語られたことはない。

現代において柳生新陰流を学ぶ意義は、ヨーロッパ近代から輸入された近代的身体操作が日本人の身体に合わないのではないかという反省がなされている現在、日本人に合った身体操作を築くために、江戸時代の剣術に蓄積されてきた日本人の叡智を学ぶことではないだろうか。そのためには伝えられた伝統の技を出来るだけ忠実に学ぶことが肝要であると思われる。

新陰流を学ぶ多くのグループが、伝書や絵目録を元に新陰流の古伝の型を復元して、それを本伝であると称しているが、自らの近代的身体操作を問題にすることなしの作業は研究にとどめておくべきであり、本伝であるとして後世に伝えることは慎むべきであろう。

特に新陰流の祖・上泉伊勢守の影目録、柳生新陰流を完成した柳生石舟斎の絵目録に描かれた図を復元して、それを石舟斎の頃の勢法を伝える遺い方であると称するケースが多いが、影目録、絵目録の、型を演じているように見える図は、身体の動きを忠実に描いているわけではなく、実は勢いを示しているものであり、それを型としてしまうのは誤解だと思われる。

神戸先生は「絵目録」について次のように言う。

元来此の種のものは昔より絵空ごとと言い、今の写真などとちがい、これになづむときは大いなるあやまちを犯すことになる。例を以て示せば、宝山寺蔵とある石舟斎筆と伝えらるゝ絵目録である。三学九箇は太刀の持ち方もわるく、足のさばき方などは長袴により隠くされて居る。天狗抄にしても、花車、明身、善待、手引、二具足、打もの、乱剣、二人相、等の名を秘して、高林坊、風眼房、太郎房、栄意坊、智羅天、火乱房、修徳房、金比羅房、として居る。しかも其の足さばきは反対の形として顕わしておる。この形では天狗抄は使われない。この様式は外の伝書にも数多くある。しかし尾張伝書にはない。

また別の箇所で次のようにも言う。

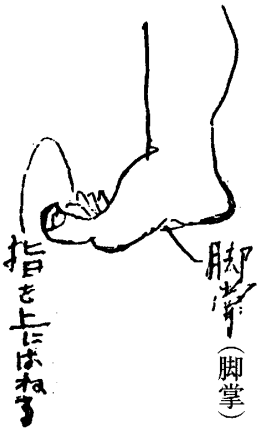
各流とも口伝を重く用い、書伝のはなはだしきは反対を述べしものもある。当流の先師長岡桃嶺子も古人の言を引用して、書ことごとく信ぜ

岩波文庫『兵法家伝書』より

ば書なきにしかずと断言している。現在昔より伝来の江戸柳生伝書にしても、真偽混同して述べてあり、また術伝口伝なくしてこれを読むとも、誤り多くしてその真諦を知ることは困難である。（「月の抄と尾張柳生」）

柳生厳周伝には江戸時代の身体操作が、術伝・口伝と共にほとんどそのまま遺されている。これを正確に学び、そこから日本人の叡智を導き出し、さらに後世にそのまま伝えることを私の使命としたい。

ここで厳周伝の足遣いについて補足しておきたい。前に、踵を地に付けてすらすらと歩む「風帆の位」が厳周伝の特徴であると言ったが、踵を付けるだけでは真の厳周伝の歩み方とはならず、つま先を上げなければ踵が浮いてしまうのである。神戸先生は常にそのことの重要性を強調し、『柳生の芸能』には自筆の絵を載せている。春風館道場の加藤館長は、新陰流がますます本流を離れているのに危機感を持たれ、この道場だけでも本当の新陰流の足運びを護っていきたいと語られ、弟子たちにも厳しく指導されている。



（脚掌）

しかし新陰流の「刀法」は「心法」と一つになって始めて実践的なものとなる。反対に、「心法」は新陰流本来の「刀法」なしには成り立たない。ここでごく簡単に「心法」についても言及しておきたい。

戦いの法である剣術にとって一番大切なことは何か。柳生宗厳の『没茲味手段口伝書』冒頭には「勇の事」が、『極秘口伝』の開巻一番には次の歌が載せられている。

斬り結ぶ刀の下ぞ地獄なれ　ただ斬り込めよ神妙の剣

このように「心法」の第一は「勇」であるが、しかし戦いにおいて「勇」の心を持つには、それに見合っただけの「刀法」を身につけていなければならない。それが新陰流「刀法」の極意である「転（まろばし）」である。

「三学円の太刀」は「待（たい）の太刀」である。斬られるぎり〳〵まで待つには相手の太刀の下に身を晒（さら）す覚悟が絶対条件である。その前に動いたら相手もそれに対応して太刀筋を変えてくる。相手の重心が前に移動して体勢を変えられなくなるぎり〳〵まで待って「転」で相手を制することが新陰流の極意である。古伝（江戸遣い）の「一刀両段」（九八頁）がその典型であるが、それ以外に次の二つの仕方がある。

①相手の太刀筋を中心点として左右に転身する。これによって相手の太刀を受け止めた太刀が、そのまま相手を切る太刀となる。

②相手の太刀筋を見定めて、「合打（がっし）」で真直ぐに太刀を打ち落とす。

しかし相手が喜んで打ってくるように、我が身を餌（えさ）にして待つこと—これを「迎え」というが—は非常に難しい。ここに「勇」を第一とする「心法」の領域—「水月」「神妙剣」「西江水」等—が広がっている。

その究極が「無心」「空」というのであろうが、「空」がゼロの空ではなく、心も体も「待（たい）」でありながら、攻め（懸（けん））の気で飽和状態に高まった、周りの風の音、水の音が聞こえる「空」と言える。しかしその境地に近づくことは、約束事で使太刀が勝つと決まった型稽古だけでは難しい。

一方、剣道は試合稽古中心であるが、長い竹刀で遠い間合いから飛び込んで打ち合い、スポーツ競技化しているので、生死を賭けた戦いのなかで生まれた剣術とは「刀法」も「心法」も異なる。宮本武蔵の『五輪書』や『兵法家伝書』を口にする剣道家が多いが、剣術にとって最も重要な足運

びを変えない限りは観念的な精神論に留まるしかない。

柳生十兵衛は『月の抄』で「習いを知りて、しろうと（素人・新陰流を知らない人）と試合して稽古とすべし」と言い、神戸先生は型稽古で「勝負の定理を知り、これにて身体を習わし、これにて因敵転化（敵に従って転化する）の道を心悟」した後は試合によって新陰流の極意である「無形」を体得するべきであるとして次のように言う。

形一通り修行鍛錬の上は、試合により勝負の道を究め、自流はもとより、他流の人々とも試合し、打って打たれ、その敗れたる原因をよく会得し、以て切磋琢磨の功を積み、形を忘れ形を使い、始めて生きた勢を心悟しなければならぬ。（「柳生の芸能」）

春風館の加藤館長は神戸先生の供養を兼ねた今年の武道初めで、厳周伝を護り伝える決意を新たにされた後、今年から試合稽古を積極的に取り入れていくと新年の抱負を語られた。

私は春風館で学んで厳周伝は試合に使えるという確信を持ち、半年前から名古屋の伊藤繁吉商店と横須賀の一本堂の協力の下に、剣術で使える防具を考案・試作している。

ただ防具を頼りにして打ち合うのではなく、術理を吟味するために技を出し合い、そこで怪我が生じないように防具を使用するという前提である。剣道の防具を参考にしているが、現代剣道は防具優先で打ち合いのルールが決まっている。面の横垂れが長いので雷刀や撥草には構えにくく、小さく振りかぶって真直ぐに打つことが優先されている。しかし元来は真直ぐ打つ業は少なかったのではないか。戦いでは兜を被（かぶ）るから頭は打たないで斜めから袈裟に切る。ところが剣道では面防具があるから安心して面を打つ。さらに面打ちは技がのびのびとするので他の技より重視されるようになる。小手を打つ場合も、面を打つ太刀筋を下に降ろしただけの小手打が正しいとされ、現在の小手打ちが生まれた。しかし本来は指や裏小手を切るほうが多かった。桜田門外の変の後、現場には指がバラバラと落ちていたと言われる。

裏小手・拳・肩・首・足と自在な技が使われた剣術と、小手・面・胴、特に面重視の直線的の技を重視し、しかも引いて切るのでなく手を伸ばして飛び込む剣道は、術理的にも心法的にも大きく隔たってしまっている。

新陰流に限らず本来の剣術の型は真剣勝負が前提で作られている。

真剣勝負では、たとえば右肩前の一重身（ひとえみ）となれば心臓が敵から遠くなるように、身体を正面に向けず半身となることが、敵から見て切ろうとする目標が少なくなる。また深く切り込めば敵に身体を晒すことになるので、敵の体の自分に近い部分を切っていくほうが安全である。相手が半身の場合は肩が近いので、頭を切るより肩の方が切りやすい。そこで肩を浅く切る刀法が多く見られる。一方、切り込まれた相手は、最初に自分に迫る拳を打つ型が多く使われる。しかし、防具を着け、竹刀で打つ場合、恐怖心が少なくなるので、思い切り頭を打っていくことが出来る。したがってどうしても面の攻め合いとなってしまう。古流剣術で試合稽古ををするためには、肩や肘、内小手をカバーした防具が必要である。

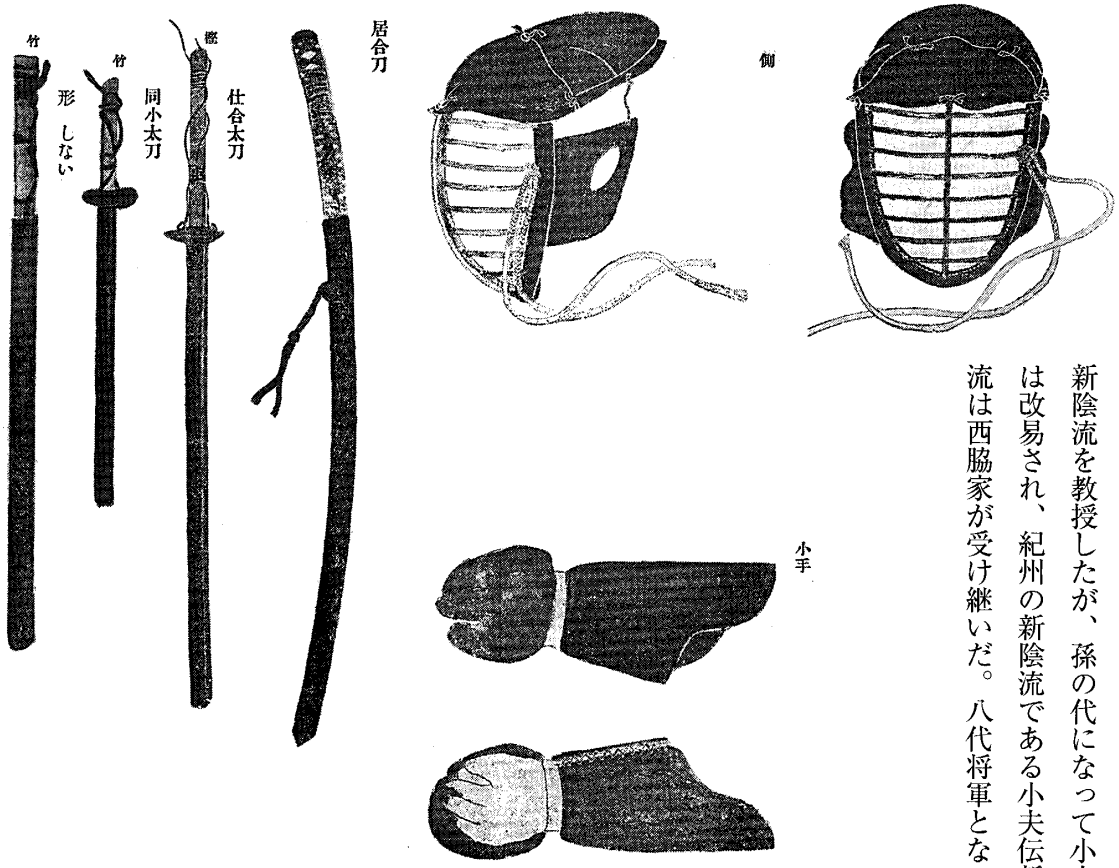
ただ試合といっても、あくまで術理研究のためのものであって、剣道のように競技化することは慎しまなければならない。三年、五年と勢法の鍛錬を積んだ者同士が、たとえ「砕（くだ）き」（変化技）であっても術理を説明できる技を使うべきであって、試合稽古中心になってはならない。

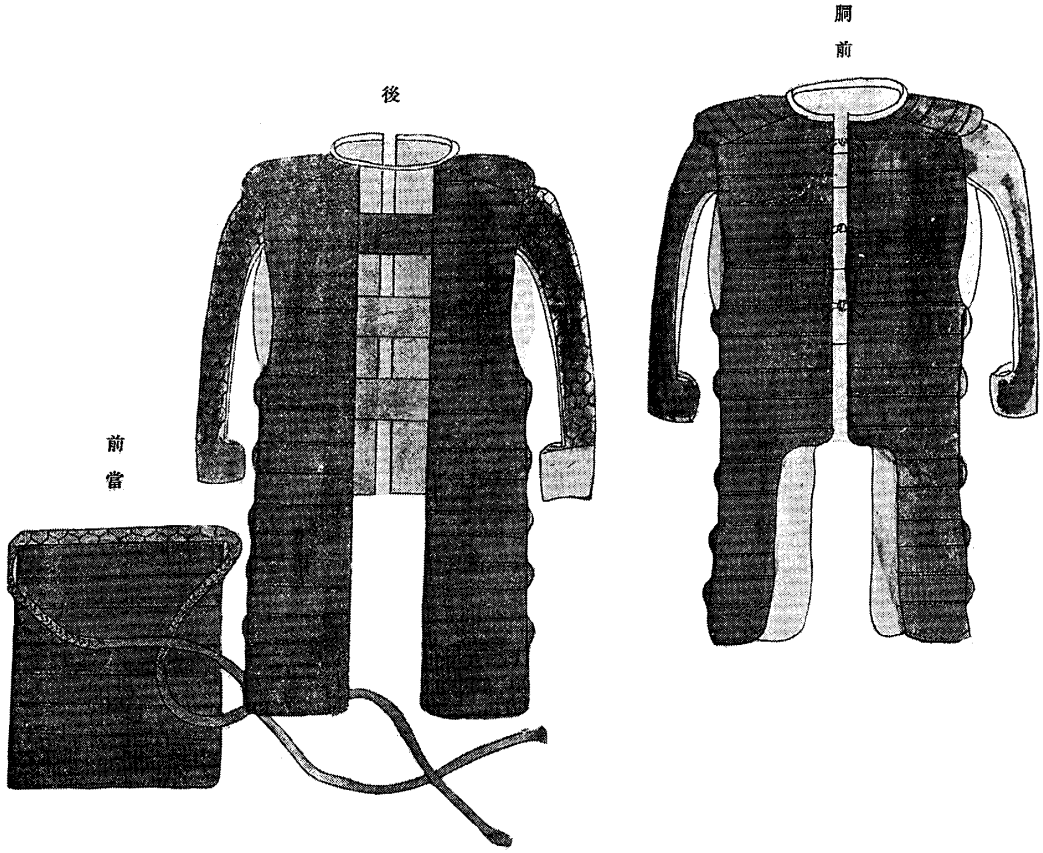
また型稽古だけでは十分でないということではない。型を覚えるのは入り口であって、「勢法」といわれるように、勢いのなかで使えるようになれば本物と言える。そのためには十年、二十年の鍛錬が必要である。

新陰流防具（『南紀徳川史』）

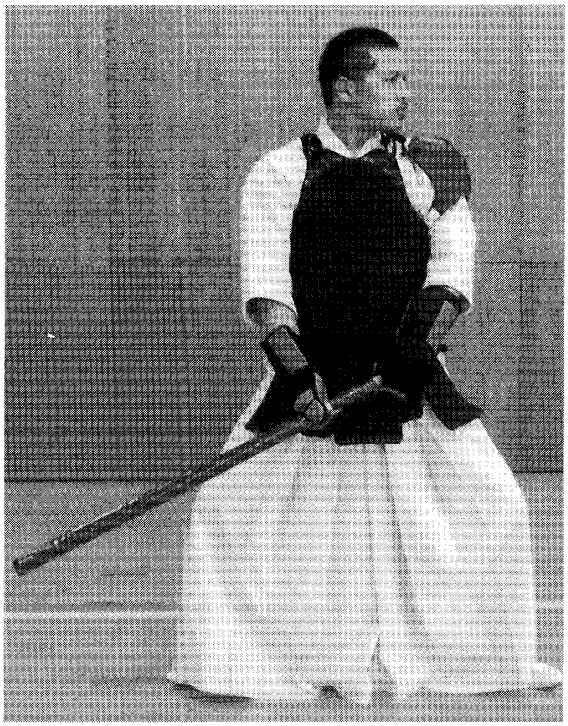
紀州藩に伝わる新陰流は西脇流であり、その元は柳生宗矩と縁続きで宗矩・十兵衛より新陰流の極意を相伝した小夫助永である。小夫は元禄三年より四百石で紀州家に仕え、三代藩主綱教に新陰流を教授したが、孫の代になって小夫家は改易され、紀州の新陰流である小夫伝新陰流は西脇家が受け継いだ。八代将軍となった吉宗は将軍になる前は西脇流を学んだ。

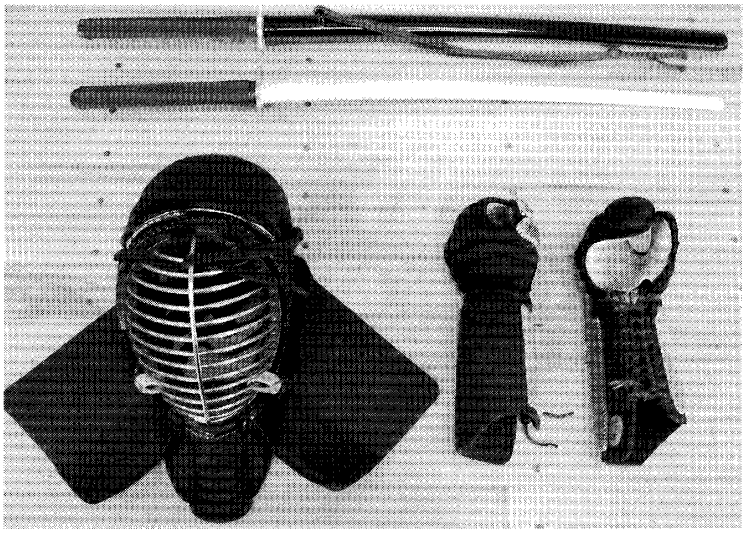
西脇流がいつから防具を着けて試合を行なったかは不明であるが、吉宗の孫の松平定信は西脇流の木村佐左衛門に新陰流を学んでおり、試合を好んだとあるので、西脇流は古い時代から防具を着けた試合稽古をしていたと思われる。これらの点については拙著『徳川将軍と柳生新陰流』（南窓社）に詳説してある。





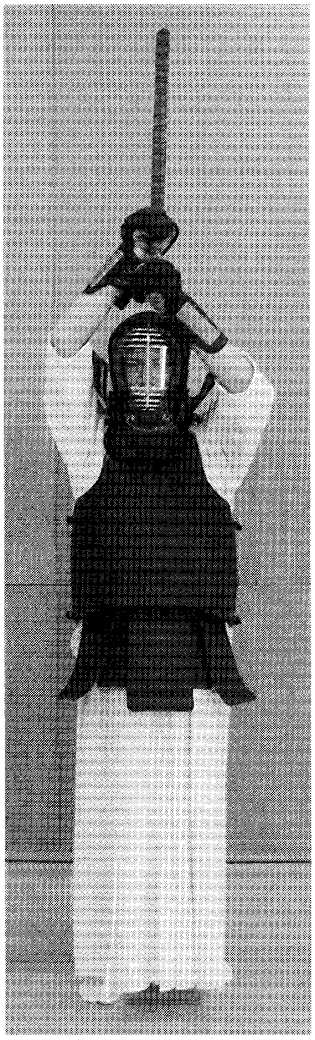
著者試作による古流剣術試合稽古用防具





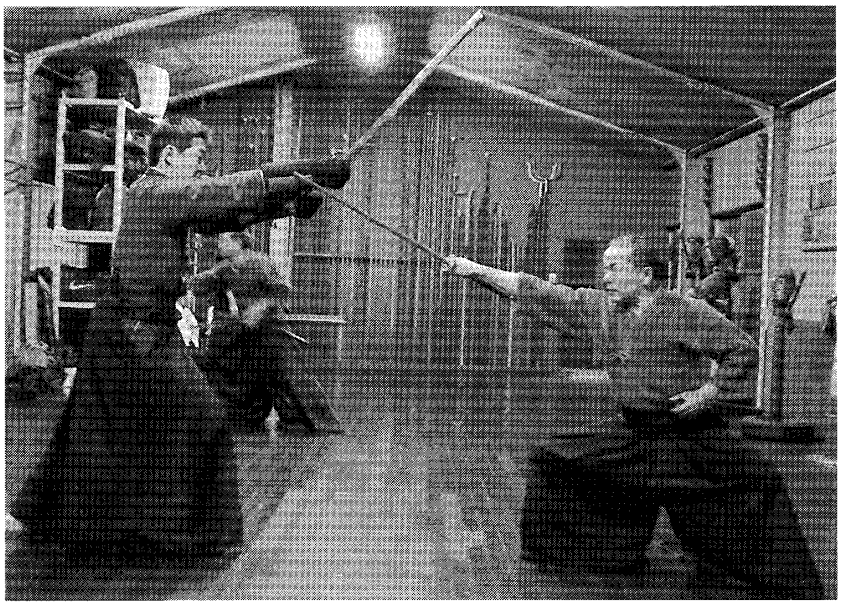
（上図）居合刀は打刀拵えとした。但し鍔は皮つばを、刀身は樫より柔らかな江戸柳生のびわの木刀を使用した。小手は内小手もカバーし、牛の生皮を張り、衝撃を少なくした。面も厚いクッションを張り、本当の合打の練習が出来るようにした。

（下図）試作した居合刀による試合稽古。面を打って来た打太刀に柳生流抜刀勢法（厳周伝）で一瞬にして小手を決める。



（上図）胴と垂れは面布団と同じ素材で三分刺しにしてみた。肩当と肘当は改良中である。

（右図）面は雷刀に取り上げられるように耳の下の部分で折れるようにした。また剣道の面になじまない人のために前方が見えやすいようにし、突き垂れは槍の面用のものを使用した。



製作協力　横須賀「一本堂」名古屋「伊藤繁吉商店」
居合刀製作　木樽銀冶氏

二

前回の「柳生厳周伝の研究（一）」では「三学円の太刀」の「江戸遣い」「尾張遣い」「古伝」を扱ったので、今回は「燕飛」「九箇の太刀」「天狗抄」を取り上げる。

永禄八年（一五六五）、上泉伊勢守は柳生石舟斉宗厳に新陰流の免許皆伝を与え、宗厳は新陰流の第二世となった。その印可状は「それがし幼少より兵法兵術に志有るによって、諸流の奥源を極め、日夜工夫鍛錬致すによって、尊天の感応を蒙り新陰流を号す」と始まり、伊勢守は宗厳に「一流一通りの位、心持一つも残さず相伝申し候」と言い、熱心に学ぶ者には「九箇まで」は教えてよいが、それ以上は「真実の人」にだけ伝授するようにと念を押している。

次の年、再び柳生の里を訪れた伊勢守は柳生宗厳にいわゆる「影目録」四巻、「第一　燕飛」「第二　七太刀」「第三　三学」「第四　九箇」を与えた。その冒頭で新陰流の極意は「懸待表裏（裡）」と「転」であると言う。

「第一　燕飛」は、愛洲移香斎の創始した陰流の太刀の真髄を上泉伊勢守が組み直して新陰流の太刀としたものである。

「第二　七太刀」については今回は触れないでおく。

「第三　三学」は「柳生厳周伝の研究（一）」で詳説した。

「第四　九箇」について影目録は「目付け所、秘事なり」として技については九個の太刀名が記されているだけである。現在残されている「九箇の太刀」は、諸流の奥義を極めた伊勢守が、それを九個の太刀にまとめたものを、柳生宗厳が改変して柳生新陰流の表太刀としたものでる。

「天狗抄」は「影目録」には載せられていない。宗厳への印可状に「真実の人」だけに伝授するようにとある新陰流の極意を表わした太刀である。

柳生十兵衛は『月の抄』で次のように言う。

「三学円の太刀」五本については、

老父（柳生宗矩）云う。この五つは構えをしてたもつを専らとするなり。待ちの心持なり。

また「九箇の太刀」については、

構えをしている者に、また構えをして先を仕掛け、打損じて二つめを勝つ稽古、残心の習いなり。これ老父の教えなり。

「天狗抄」については、

老父曰く、この太刀は構えを習いとして、これより切り掛け、序のうちにて表裏をもととして用いる太刀これなり。是より敵の転変に随う心持なり。

結局、柳生新陰流は、

「燕　飛」六本
「七太刀」七本
「三学円の太刀」五本
「九箇の太刀」九本
「天狗抄」八本
「極意の太刀」　六本

以上、四十一本の型によって成立していることになる。「七太刀」は一般には失伝したと言われているが、春風館道場には「秘伝」として伝わり、限られた高弟達の間で稽古されている。

燕飛の太刀

柳生石舟斎に与えた『影目録』の第一巻「燕飛」の冒頭に上泉伊勢守は次のように記す。

燕飛（「燕飛の太刀」一本目）は懸待表裡の行、五箇の旨趣を以て簡要となす。いわゆる五箇とは眼・意・身・手・足なり。猿廻（「燕飛」の太刀の二本目）は敵に従って動揺（動くこと）して、弱をもって強に勝ち、柔をもって剛を制するもの・・・

また尾張柳生の長岡房成によると、

この六本は昔の表太刀なり。当流の始祖菱州日向守移香、昼夜肝膽を砕き工夫せられし時、夢に鵜戸権現、猿の形を示し伝えたまわると見て、心悟して撰みしと言う。・・・

以上のように、燕飛の太刀は愛洲移香斎が創始した陰流の太刀であり、上泉伊勢守は燕飛によって剣術の極意を悟り、自らの工夫を加えて新陰流を創始したといわれる。

それでは燕飛とはいかなる太刀なのであろうか。

この形は懸待表裏・循環無端・円転流利して刀路の自然に従がわしめ、眼意身手足をこなすものなり。

燕飛には六本あるが、特に二本目の「猿廻」が重要である。

上泉子は天の橋立切れ渡しの文殊に参籠し、猿回にて必勝の術を悟り天下無双の剣となりしと伝えらる。

それでは猿廻でいかなる術理を手にしたのであろうか。上泉伊勢守は陰流より「燕飛」「九箇の太刀」「天狗抄」を継承・改変しており、独自に創始した技は「三学円の太刀」と「七太刀」（新当流の「七太刀」との関係は不明）及び「殺人刀・活人剣・転（まろばし）」である。その中でも「三学円の太刀」が新陰流の極意である。私見によれば特に五本のうち、最初の二本「一刀両段」と「斬釘截鉄」に「三学円の太刀」五本のエッセンスが凝集されている。そしてその二本がまさしく猿廻の技から導き出されているというのが私の考えである。それを理解していただくために、その二本を前著「柳生厳周伝の研究（一）」から「資料編二」に転載しておいたので、比べて頂きたい。

「猿廻」本書一八頁一、二図　→　「一刀両段」九十八頁

○体の左軸に重心が移動する。打太刀・使太刀とも、左足前の車の構えから足を踏み変えずに足腰を回して打ち合う。打太刀が肩を打ってくるのに応じて使太刀は左拳を打つ。

（但し木刀の場合は、拳を打たずに防ぎ打ちで応じる）

「猿廻」一八頁　三図　→　「斬釘截鉄」九十九、百頁

○体の右軸に重心が移動する。互いに右膝通りで拳を切る。いわゆる「斬釘の線」を低くした「極意の線」で打つ。

両方とも腕の力ではなく重心の移動を伴う足腰を使った身体操作によって成り立っている。この一刀両段と斬釘の打ちを猿廻から抽出して極意としたというのが私の考えである。しかしこれらは「燕飛の太刀」「三学円の太刀」ともに「厳周伝新陰流」でなければ成り立たない。「一刀両段」「斬釘截鉄」の術理については「柳生厳周伝の研究（一）」に詳説してある。

「燕飛」は、普通は袋竹刀ではなく木刀を使い、しかも六本を一度に演ずる続け使いであり、陰流からの新陰流の誕生を今日まで伝えている興味深い勢法である。

次のイラストは、右が打太刀、左は使太刀であり、打太刀の左後ろ斜め三〇度の位置に視点が置かれている。（正面から見た図は六十六頁以降を参照）作者は前号に引き続いて佐藤真紀子氏である。

燕　飛

打太刀　青岸に構えて攻め進む。

十分に間合いを取る。

使太刀　正中段に構えて待つ。

中心線（始めの位置）

間境で左足を前にし、太刀を頭の上で左から右に廻しながら右足で右斜め（45度）に間を越して、

◎「燕飛」は始めはゆっくり（序）、次第に速く「序・破・急の位」で遣う。

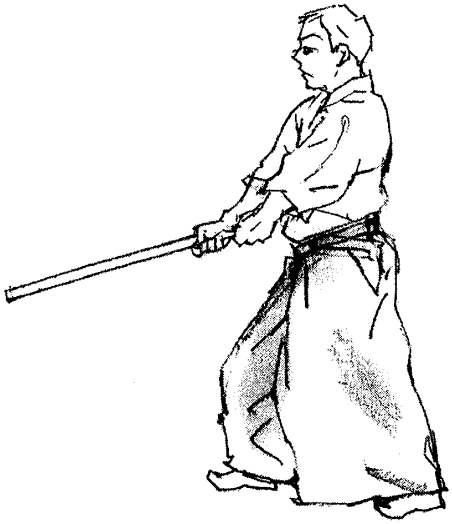
使太刀

（後）拳に当たる直前に右足を右斜め後ろ（45度）に引き、太刀を右肩に斜めに上げて拳への打ちを抜く（左肘を体に密着させる）。刃は下向き柄中は耳の高さ。

（先）左拳をゆっくり打っていく。

45度の線

膝をエマして右斜め（45度）に下がっていく。

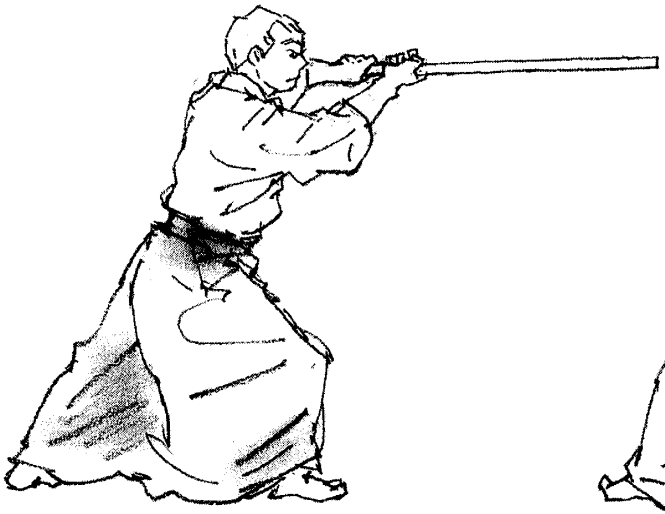


（後）太刀を上げながら右斜めに退がっていき、

（先）太刀を中段に戻しながら、剣先を打太刀の顔を目指して突き出していき、

○剣先の攻めぎ合いがある。

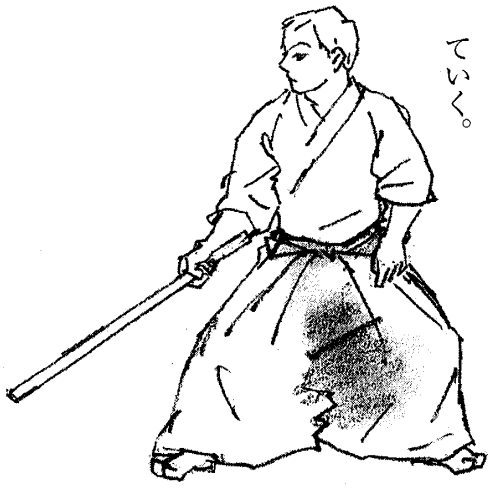
（後）撥草（はっそう）に構える。



（先）打太刀の太刀と交わると同時に刃を上に向けながら右目を突いていく。

○太刀筋は変えないで、体を太刀の左から右へ移す。

機を見て両足を踏み替えて使太刀の左拳を片手で打っていく。



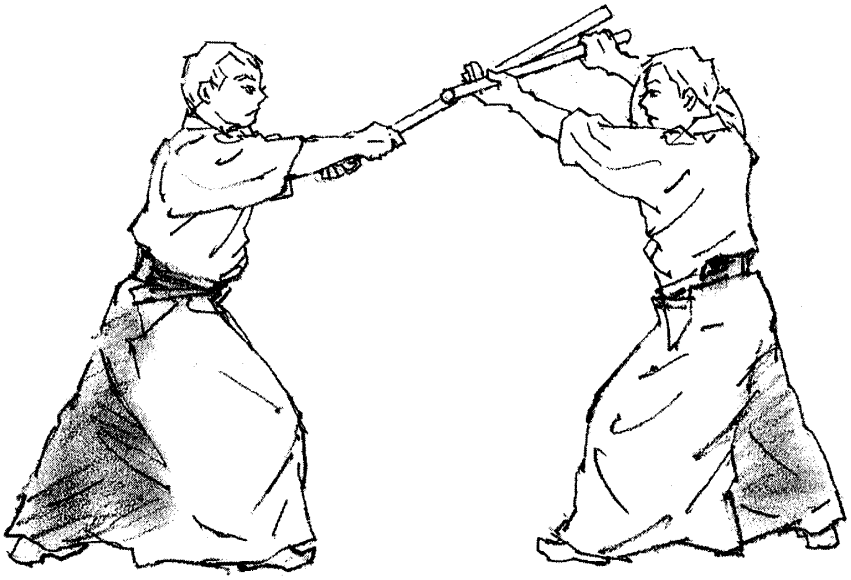
共に「ハー」と発声

足を踏み替え両手をもじって膝をエマし、太刀の左峰で打太刀の太刀を叩き落とす。
○剣先を上げないで、膝をエマし腰を落とす力で叩き落とす。
○完全に踏み替わり、腰だけ同じ位置で落ちている。

（後）太刀を左脇に構え、左手を峰に添える。

（先）膝をエマしたまま退がっていき、退がりきってから太刀を雷刀に上げる。

（後）刀棒に構えて使太刀の打ちを刃で受ける。直ちに左手を滑らせて四指で使太刀の太刀を峰から抑えんとする。



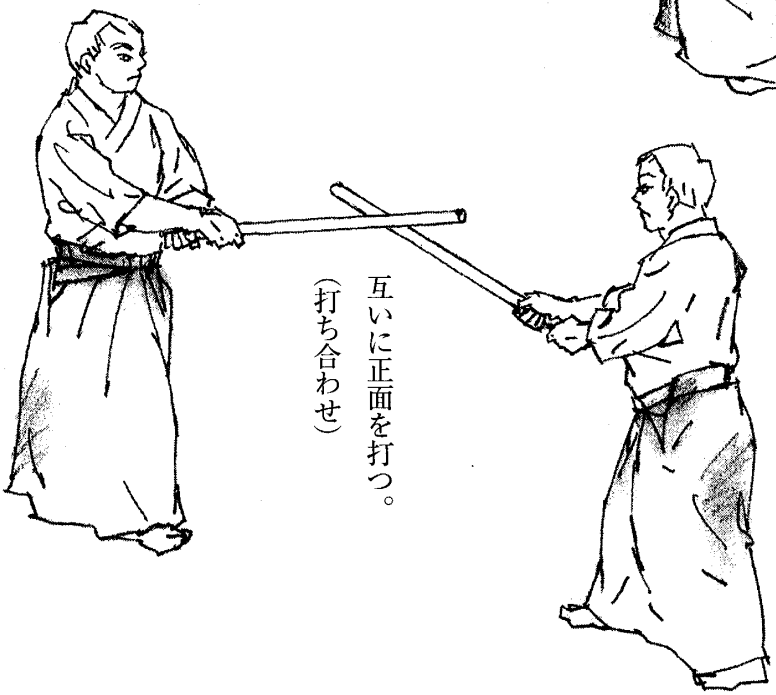
（先）打太刀の空いた頭を攻め進んで打っていく。

（先）すかさず膝をエマしながら手をもじり、打太刀の四指をピュンときり上げて（刃は上を向く）、そのまま膝をエマして退っていく。

（後）刀棒に上げた太刀を、下がりながら右脇、胸の高さに構える。

同時に太刀を左から右に廻しながら中心線に戻り、雷刀に構える。

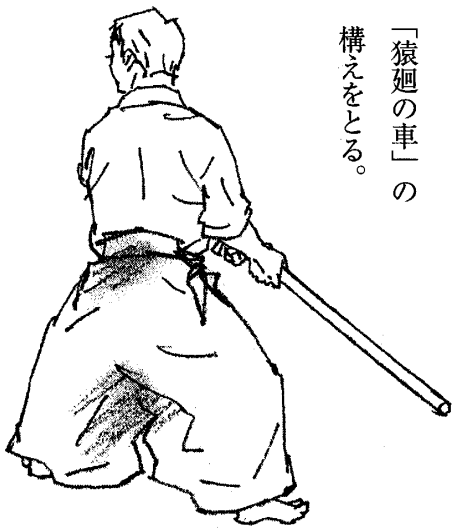
太刀を頭の上で左から右に廻しながら中心線に戻り、雷刀に構える。



互いに正面を打つ。（打ち合わせ）

猿　廻

「猿廻の車」の構えをとる。



「猿廻の車」
足を踏み替え右足を少し引き一重身となり、太刀をもじり45度右後ろ、45度右下に開く。柄中は体の中心となる。

同時に「猿廻の車」に構える。

前の左足をやや右前に出して、使太刀の肩を打っていく。

体をやや左に移動させながら、太刀を左脇に立てて打太刀の打ち止め、（実戦では左拳を打つ）
○そのまま太刀を起こすだけで、左拳を上げない。止めるだけで打たない。**（重心は左軸）**

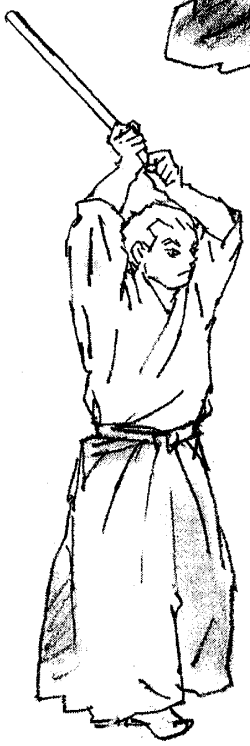
体をやや左に移動させながら太刀を振り上げ、極意の線で打太刀の右拳を打っていく。

同時に、体を右に移動させながら、極意の線で使太刀の右拳に打ち勝つ。**（重心は右軸）**
○極意の線＝斬釘の線が腰の位置まで下った線。

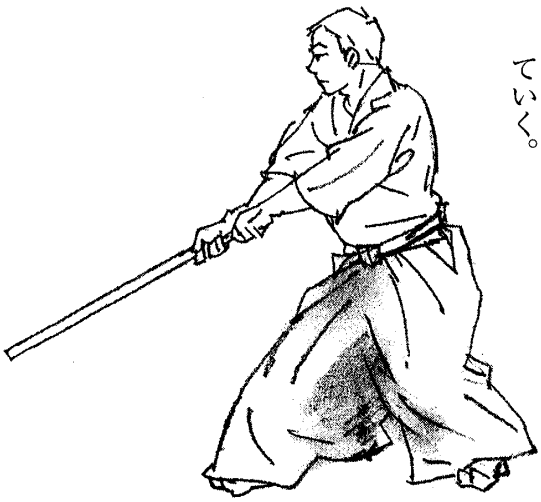
山　陰

（後）攻められて撥草に取りながら、右斜め後ろに退がり、

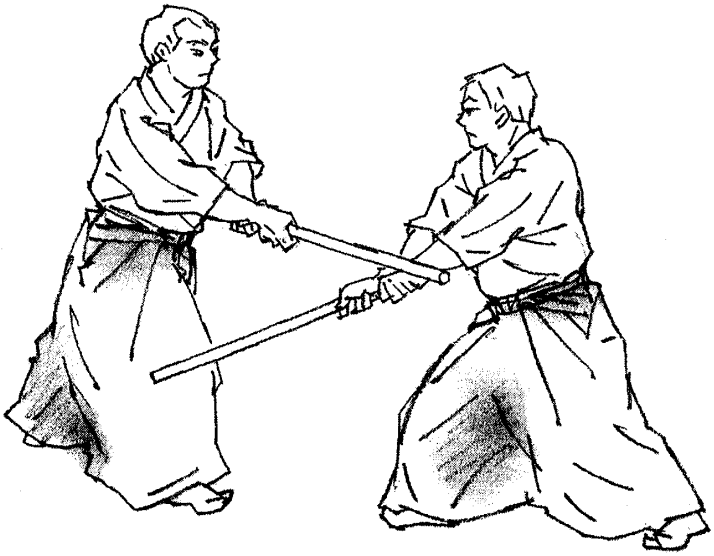
（先）左足を進めながら真直ぐ身をかがめ、手をもじり切先を返し、太刀で左膝を防ぎつつ打太刀の左脇の下を切り上げんとする。



太刀を左脇から横雷刀に廻しながら左足を左斜め後ろに引いて打ちを外し、



使太刀の前に出た左膝を打っていく。



正面に戻りながら打太刀の諸手（もろて）を打つ。

月影

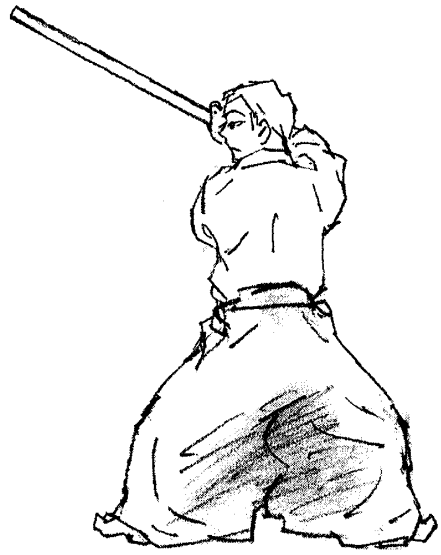
（後）後ろに退がる使太刀の体の中心を片手太刀を廻して攻める。

（先）打太刀の諸手を押さえると同時に、横雷刀に取りながら後ろに一歩さっと退がり、打太刀が片手太刀を廻して体の中心を攻めるに応じて、さらに一歩さっと退がる（右足前はそのまま、左足から二歩退がる）。

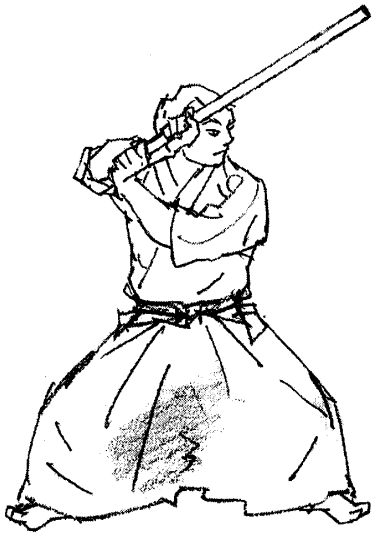
横雷刀に上げた右脇を狙って、下から折甲（せっこう）で切り上げていく。
○刃は上向き。

切り上げてくる打太刀の太刀を横雷刀をそのまま下ろしながら右鎬で押さえる（防ぎ打ち）。
○実戦では右拳を切る。

と同時に足を踏み替えて正面から打太刀の太刀中をすばやく打つ。
○実戦では左拳を切る。



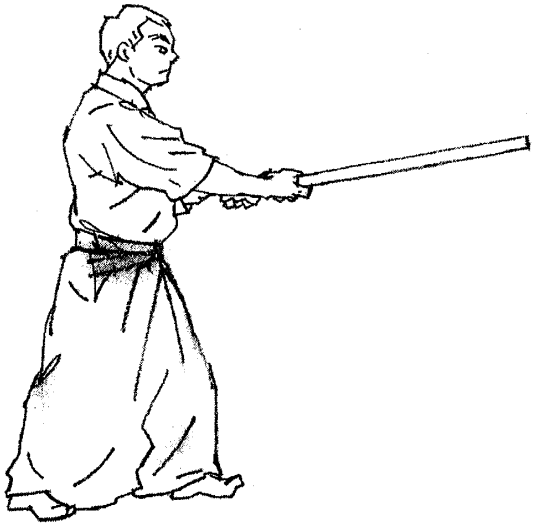
互いに刀を右斜め上に構えながら右斜め後ろに退がっていく。（刃は上を向く）



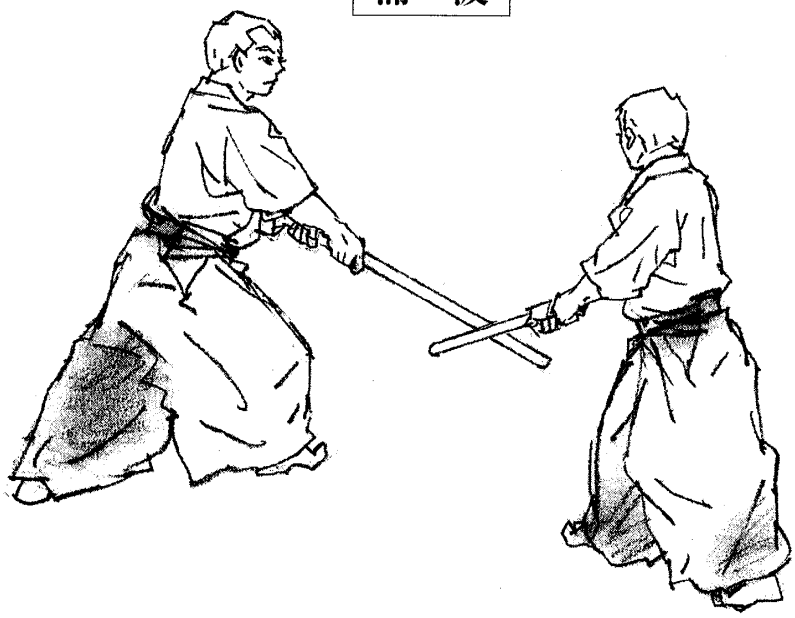
ここから急の位を遣う。

撥草に構え、使太刀の左脇または左肘を攻める勢いを示す。

応じて前の左足からグイと攻めながら太刀を返して剣先を左肘に付ける。刃は左斜め横を向く。



浦　波



左拳を打っていく。

右足を打太刀の右斜め前に大きく踏み出しながら、太刀を返して打太刀の太刀を打ち落とし、

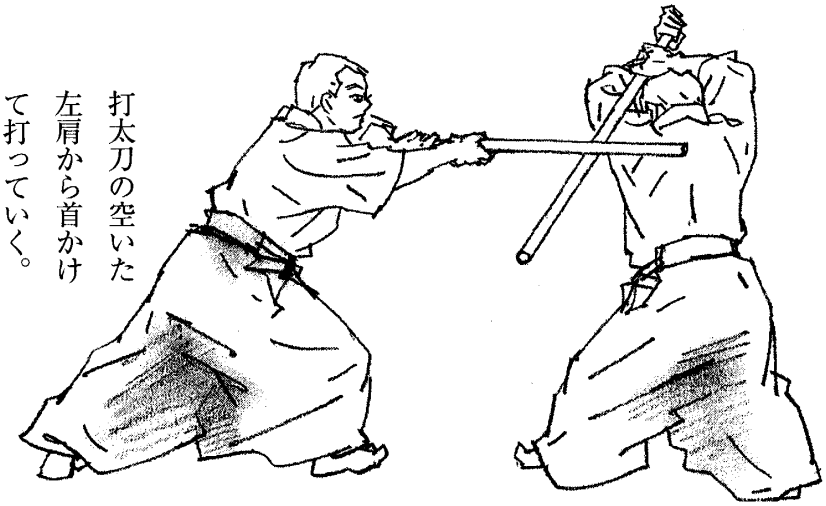
○太刀先を上げないで打ち落とす。

太刀を打ち落とされるやいなや、太刀を右片手で小さく廻刀して、

そのまま左足を45度左の線に大きく進め、さらに右足を後ろに大きく引いて撥草に構える。

攻められて撥草の構えを大撥草に挙げながら退がる。

打太刀は使太刀の空いた左脇を下から身をかがめて切り上げんとするが、使太刀が空いた左肩を打ってくるので、太刀をそのまま左肩に担いで使太刀の打ちを防ぐ。



打太刀の空いた左肩から首かけて打っていく。

使太刀の左に大きく廻りこみ、左肩越しに見える使太刀の拳を振り向きざま袈裟に切っていく。

体と太刀をくるりと右に廻して打太刀の打ちを外す。

○両手をもじり真直ぐあげる。
太刀先は頭上に高く上がる。

○左足は打太刀の右足先と一直線上になる。

浮　舟

（後）使太刀の左脇を下から切り上げんとするが、使太刀が正面を打ってくるので、太刀をあげて刀棒で受ける。

（先）体を打太刀に向けながら下から切り上げてくる太刀を右鎬で押え（防ぎ打ち）、

（後）後ろに退がりながら、二度目の打ちを刀棒で受ける。

（先）すばやく足を踏み替えて正面に戻り、大きく太刀中を打つ。

（後）一重身（ひとえみ）になって刀棒の太刀を乳通りに構える。

（先）前かがみになって手をもじって下段に構え打太刀の左脇の下を切り上げる勢いを示す。

片手打ちで使太刀の首を切っていく。

太刀を大きく廻して雷刀に上げながら左足を引いて打太刀の打ちを外し、
○左足の土踏まずに右足の踵がつくことが大事である。

（後）切り落とされて、同時に腰を折り敷く。

（先）一気に腰を落として折り敷きながら、上から打太刀の太刀を十文字に切り落とす。

九箇の太刀

十兵衛は『昔、飛衛（弓の名人）という者あり』で、「身作り良く固めんことは、三学、九箇などいえる数の太刀を明け暮れ初心になりて使うべし」、つまり表太刀である「三学円の太刀」と「九箇の太刀」で新陰流の身体作りを行なえと言っている。

それでは新陰流の身体使いの特徴はどのようなものであろうか。柳生新陰流の祖・柳生石舟斎宗厳、江戸柳生初代・柳生宗矩、尾張柳生初代・柳生利厳とは、それぞれ若干の違いがある。

宗厳「身懸り五箇の大事」

慶長八年「新陰流截相口伝の事」

一　身を一重に成すべき事

一　敵の拳、我が肩に較ぶべき事

一　身を沈にして、我が拳を楯にして下げざる事

一　身を懸かり先の膝に身をもたせ

後のえびらを開く事

一　左の肘を屈めざる事

宗矩「五ヶの身位の事」

元和四年、鍋島三平宛

一　身を一重に成すべき事

一　敵の拳を我が肩に較ぶる事

一　我が拳を楯に付く事

一　左の肘を伸ばす事

一　先の膝に身をもたせ、後の膝を伸ばす事

戦国時代末の宗厳が、鎧を身にまとって大きく腰を落とした「沈なる身」であったのに対し、家康によって天下が統一され「元和偃武」のなった江戸時代初期の宗矩の身構えからは「沈なる身」は消えている。さらに宗矩の甥の利厳となると「直立たる身」となり、膝が伸びた身構えとなる。

しかし、それで「沈なる身」が完全になくなったわけではなく、僅かに膝をえまさなければ武術的身体操作は出来ない。

「三学円の太刀」の術理が「待ち」であるのに対し、「九個の太刀」は「懸かり」である。しかしこの場合の懸かりは「誘い」、「迎え」であって、使太刀から打っていった太刀を打太刀が外して、しめたとばかりに反撃してくるところを、使太刀が二の太刀で倒すものである。

九箇の太刀の面白いところは、当時の主だった流派である念流、新当流、陰流を学んだ伊勢守が、それぞれの極意を九個にまとめたと言われるように、この太刀には様々な要素があるということである。

一本目　必勝　塚原卜伝が得意とした左太刀である。

二本目　逆風　宗矩の兄の五郎右衛門は伯耆飯山城の戦いで逆風の太刀一本で多くの敵を討ち取って戦死した。このときの奮戦によって柳生新陰流の名が世にとどろいたと言われる。

三本目　十太刀　春風館ではここで使われるクネリ打ちをとても大事にしている。

四本目　和卜　足腰の力で僅かに太刀を沈めて、打ってくる相手の太刀を打ち落とすだけであるが、新陰流の中で一番難かしいものである。『月の抄と尾張柳生』には「古来の伝としては、和卜の形一本をもって百本にまさると言われている」とある。

五本目　捷径　左右が狭い廊下や道で使う太刀である。

六本目　小詰　天井が低い場合の太刀である。打太刀の構え、太刀を右膝通りに立てて構える。使太刀の構え、獅子の洞入。

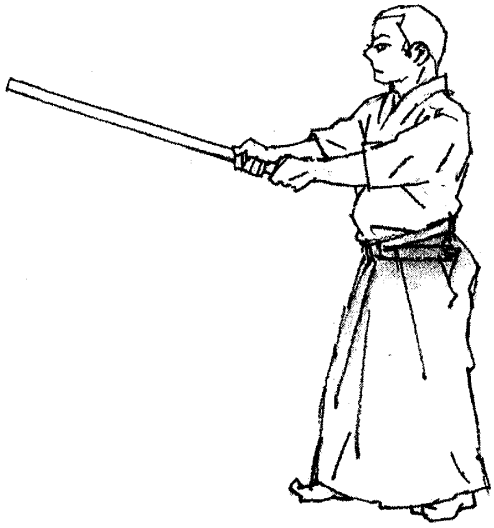
七本目　大詰　剣道型一本目と似た太刀筋である。

八本目　八重垣　横雷刀の構えは、どこを打ってくるか分かりにくい。

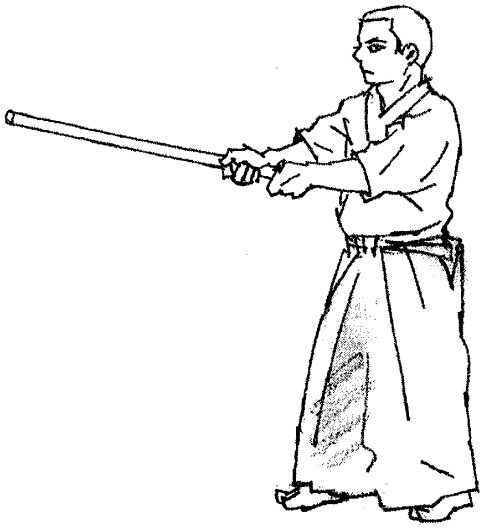
九本目　村雲　ちぎれ雲のように太刀先を大きく揺すらせる。

必勝

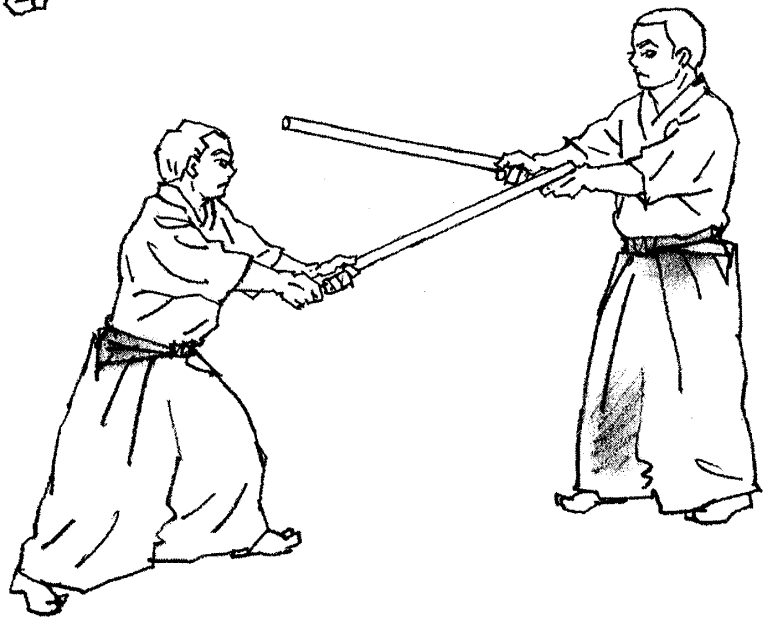
青岸の構えを少し高くした城郭勢に構え、剣先を使太刀の左肘に付ける。



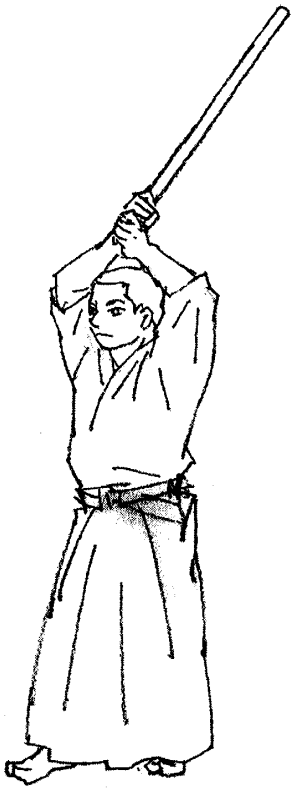
左足をやや前にして左太刀を右の肩に少し高く立てて構える。
○両肘は上げない。



右足を右真横（または右斜め前）に前に大きく踏み出すや、



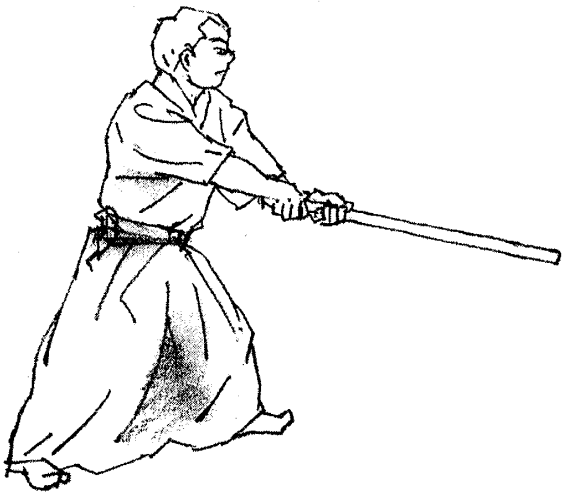
左足で踏み込んで打太刀の柄中を太刀の左鎬で叩くように打っていく。（迎え）
三図はイメージ、実際の動きは次の四図



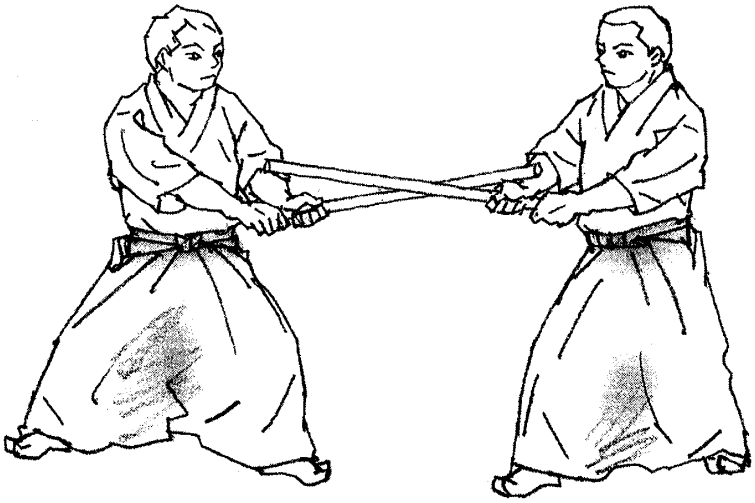
その瞬間、太刀を上段に執りながら後ろの足より後へ引き、

○両手を伸ばして打つ。打太刀に外された剣先は打太刀の元の柄中の位置に止まり、打太刀の中墨（体の中心）を外れない（そのまま打太刀の腹を突いていくことが出来る）。

○体を前屈みにしないように注意。



使太刀の、前に出た両拳を右足を踏み込んで打つ。



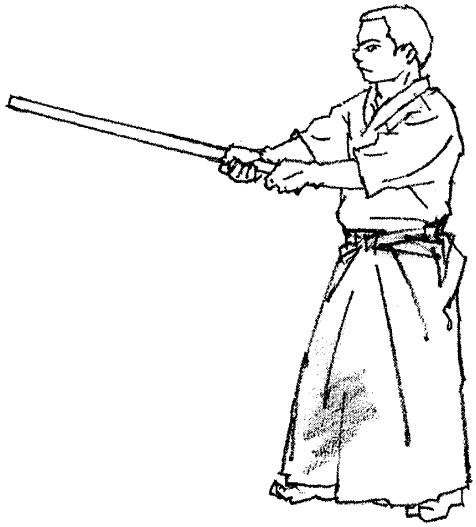
必勝の構え（正面）

使太刀

左足より打太刀の右斜め横に身を翻して打太刀の打ちを外し、同時に、下段の太刀を僅かに左斜めに取り上げ（刃はそのまま横を向いている）、そのまま打太刀の右手首を削ぐようにして斬る。

○斬った太刀先は打太刀の両拳の間に止まり、打太刀の中墨を外さない）**筋違いに勝つ**

逆風（ぎゃくふう）

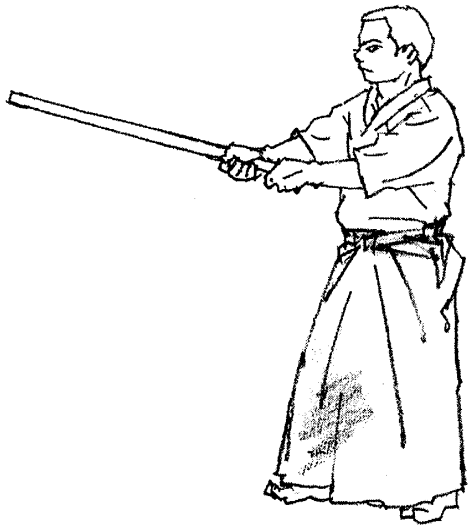


中段に構え剣先を使太刀の肘へ付ける。

左足前、太刀を右の肩に少し切先高く構える。**払いの太刀**

○目付けは打太刀の頭の後ろ。

遠山の目付け



左足を前に出しながら太刀を大袈裟に振り上げ、面を打つと見せて、

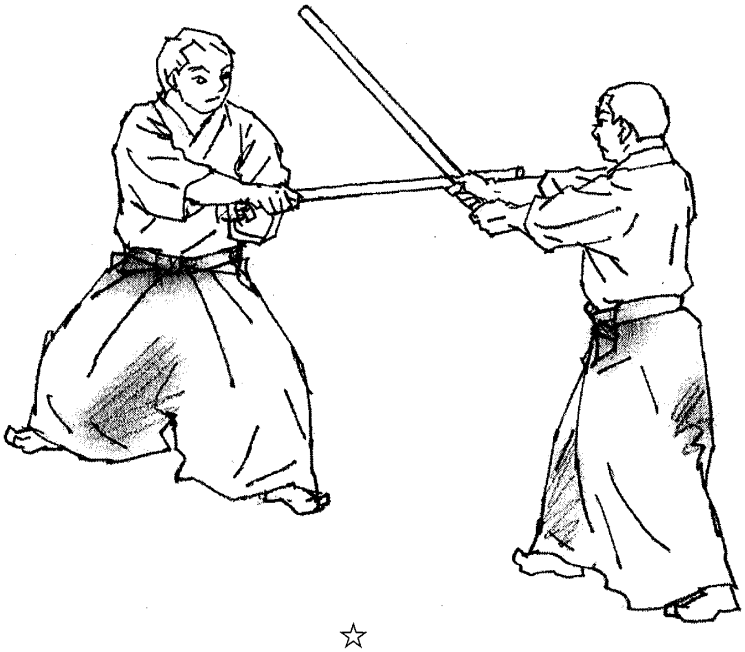
（後）上段になりながら後ろへ退り、使太刀の打ちを抜く。

（先）右足を前の左足まで小さく踏み込んで、打太刀の左拳を打っていく。

（後）使太刀の左車を見て、右足を踏み込んで頭を打っていく。

（先）拳への打ちを外され、身を入れ違いで左の足を左斜め後ろに大きく開き、隅かけて左車に構え、待つ。☆

○ただ待つのではなく、後の先の心で待つ。打太刀を十分に働かせる。



打太刀が打って来るにしたがって、身を立て替えて、肩を入れ替えて打太刀の右の腕首を打つ。

○左足を踏み込んで打ち、右足を引く。

四図の使太刀を正面から見たところ

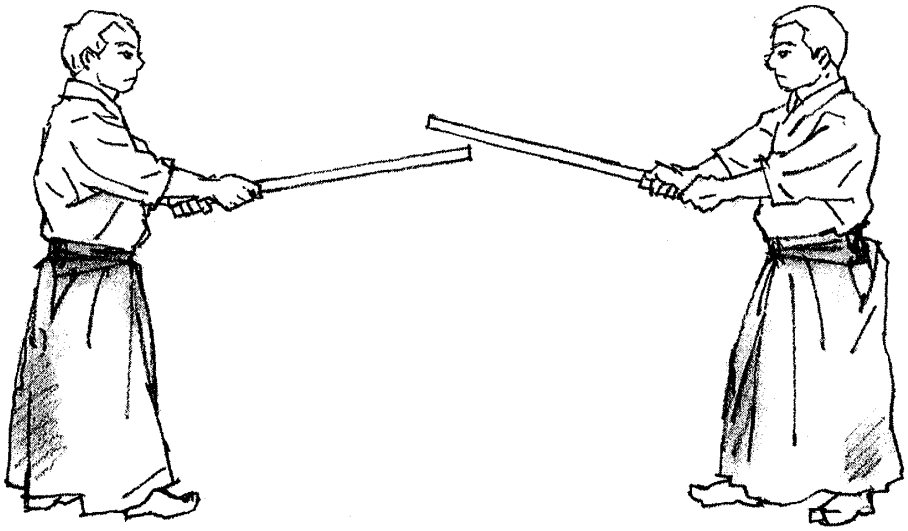
☆この時、最初私は「さあ来い、来るなら打ち勝ってやる」という気持ちで待っていた。加藤先生はそれを見破って次のように言われた。

どんな時でも「さあ来い、おれが勝つぞ」という気持ちでもって遣ってはいけない。それが勝ち口の色となって出てしまう。今から勝つという気持ちがあっても、それを顕してはいけない。自然の流れのなかで勝ち口を得なければいけない。それは神戸先生が厳しく言われたことです。

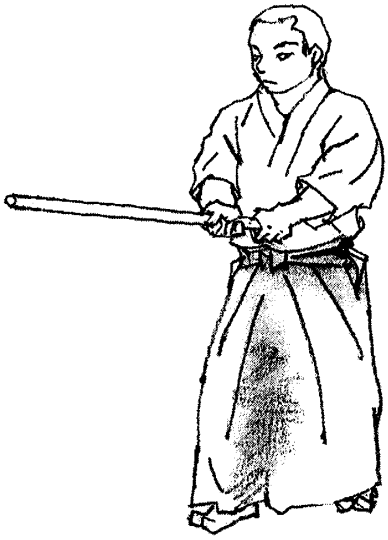
十太刀（とおだち）

青岸に構え、斜めに文（あや）を切る。

正中段に構え上下に文を切る。



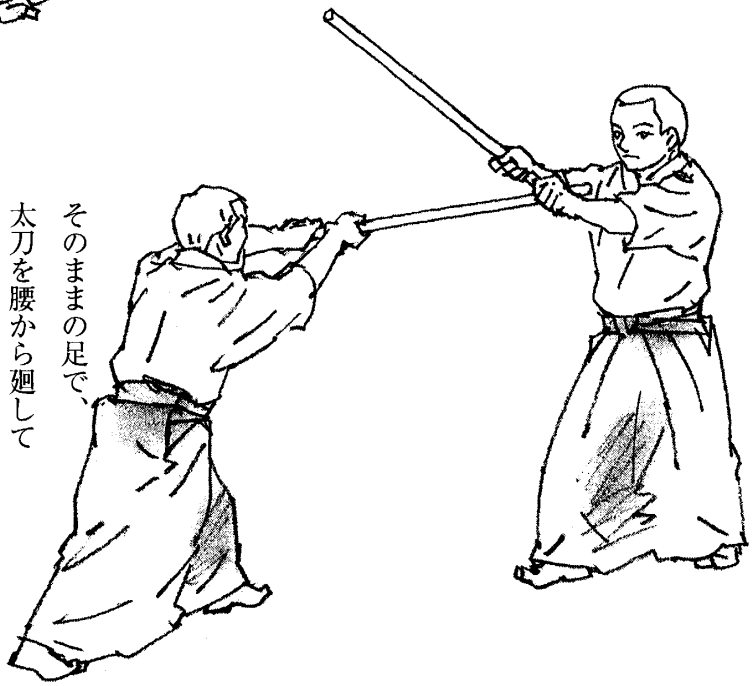
（後）左に転身した使太刀に向き直り、前に出た肩を打っていく。



（後）機を見て、足を盗んで右足を右斜め後ろに引き左足を前に出し、太刀を斜め後ろに引き（十太刀の車）、肩を見せて待つ。

使太刀の、前に出た肩を打っていく。

そのままの足で、
太刀を腰から廻して
下から切り上げて打太刀の柄中を打ち、
○両手を充分に伸ばして、左拳を突き
上げるように打つ。刃は上を向く。
打ったとき、臍（へそ）は正対する。



（後）撥草に退いていく。

（先）すぐさま体を右に移動しながら
太刀を引いて前の如く車に構える。

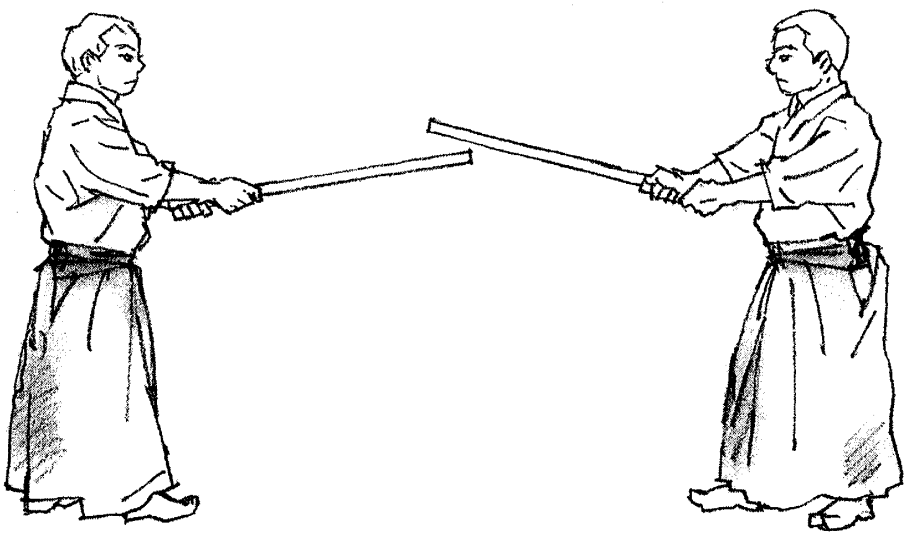
二の斬り（残心）
太刀を大きく右肩上から廻して鬢（びん）を
切る太刀筋で剣先を右目に付ける。

◎何度でも同じ打ちを繰り返す。
それで「十太刀」と言う。

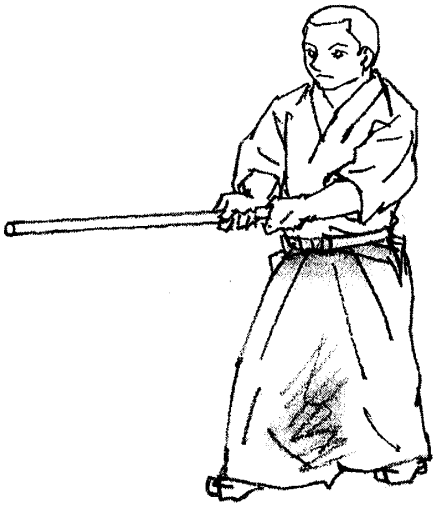
拳を見せたところ

肩を見せたところ

十太刀（くねり打ち）

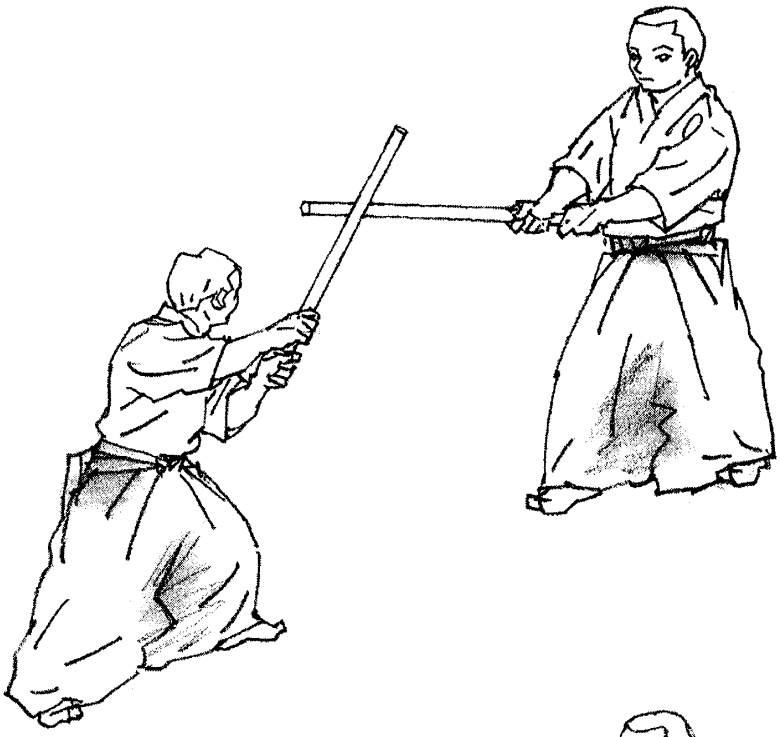


（後）左に転身した使太刀に向き直り、

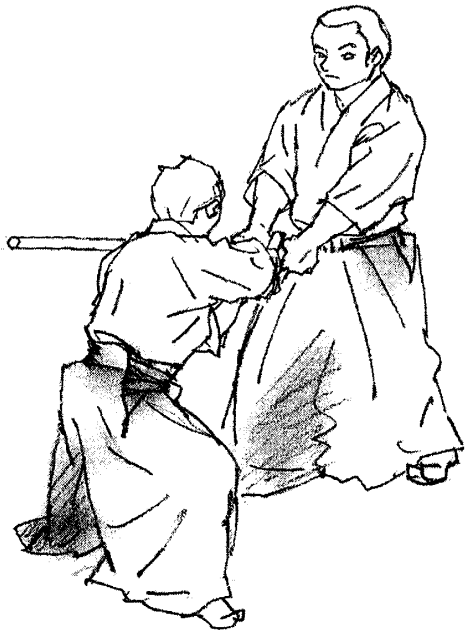


（先）拳を見せて待つ。

前に出た拳を打っていく。

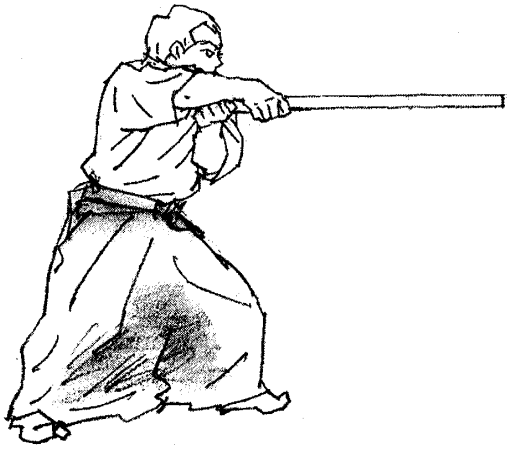


左足から踏み込みながら太刀を上げ、
○太刀を大きく上げる仕方と小さく
上げる仕方がある。



右足を横に出しながらくねり打
ちに柄中を打つ。
○足腰をえます力で切り下ろす。
臍は正対する。

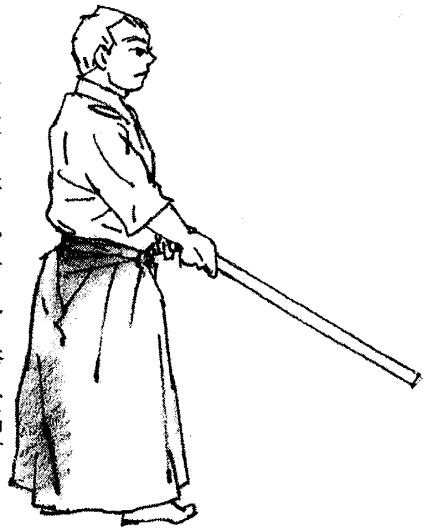
☆江戸時代における日本人の身体操作の研究のために敢えて新陰流の技を分解してイラスト化しているが、加藤館長は「厳周伝は分解して遣ってはいけない」と常々言われている。たとえば上の一図、二図のくねり打ちも図のように分解すると二拍子のように見えるが、実際は一調子で勢いをもって遣わなければいけない。それには巧者の技を見て、さらには自分が打太刀になって技を受けてみなければ本当のところは分からない。



上図の使太刀を横から見たところ

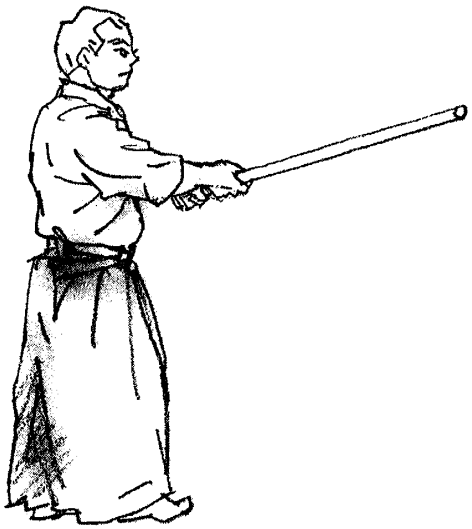
和ト（かぼく）

左上段に構え、待つ



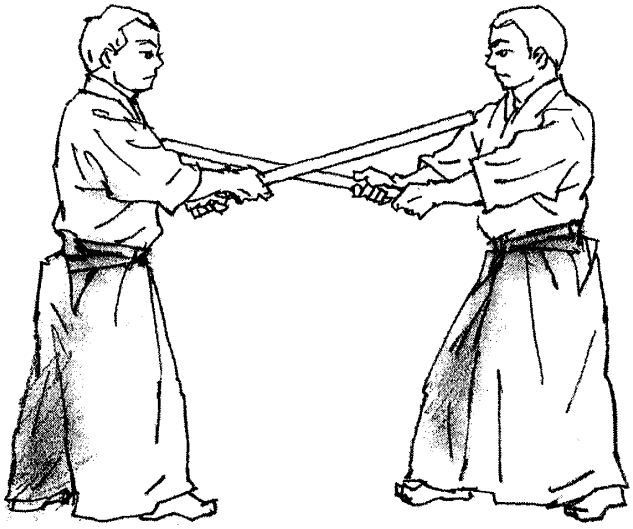
下段に構え、右足を踏み出すと同時に太刀を城郭勢（青岸の上段）にスッと上げ、

（後）拳を打って行く。
○面を打つ場合もある



（先）間に入り拳を見せて、待つ。

◎最初、春風館の稽古で「一刀両段」の次に難しいと思ったのが「和ト」であった。いくら練習しても高弟の方々に打太刀をお願いすると、打ち落とせず、かえって打太刀に上太刀になられてしまった。（著者）

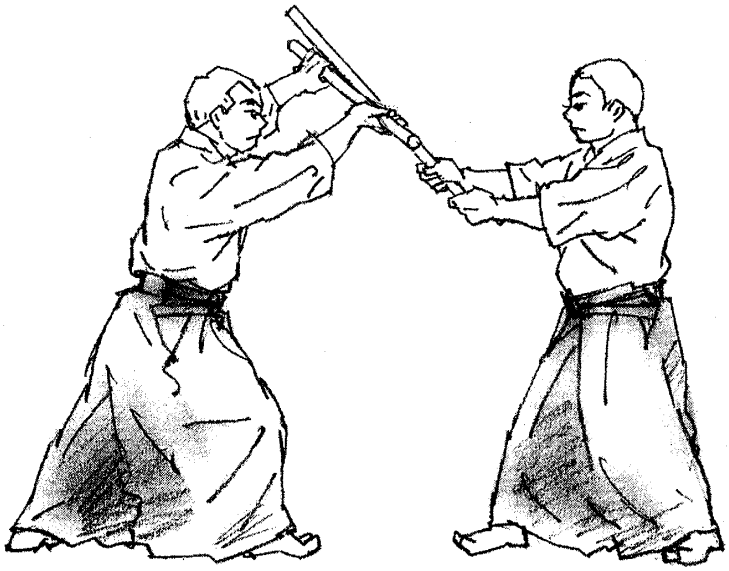


太刀を上げないで、そのまま左斜めに打太刀の太刀を打ち落とすや右足から一歩踏み込んで太刀先を喉に付ける。
○打つとき、絶対に剣先を上げない。

捷径（しょうけい）

雷刀に構え、待つ。

一重身、左の手に柄を持ち、右手で太刀中を親指と人差し指の間で挟み（龍の口）持ち、すすっと攻め進み、間境で止まり、待つ。



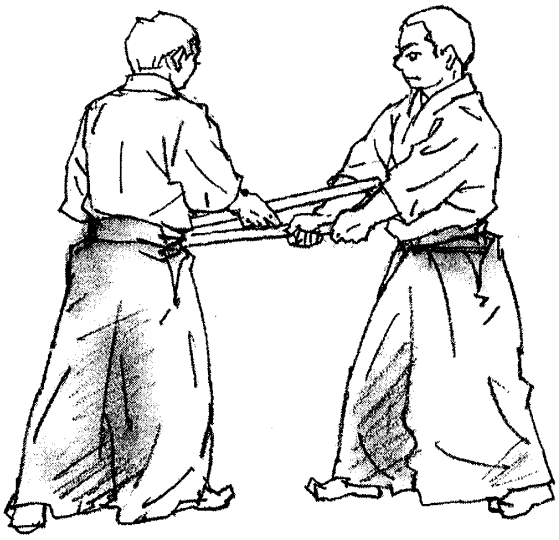
真っ向に打ちかかる。

左手を高く、両手を上げて打太刀の太刀を刃を上にして刀棒に受け止め、

その瞬間、両手もろとも左一重身になって、打太刀の太刀を左に落とす。太刀先は打太刀の胸元に向ける。

○巧者は左足の指先を、踵を中心に左後方に回しながら両膝をエマす。

左手を下ろして左腰の位置に下げる。
刃は下を向き太刀先を胸元につけな
がら右足から一歩詰めて残心を示す。

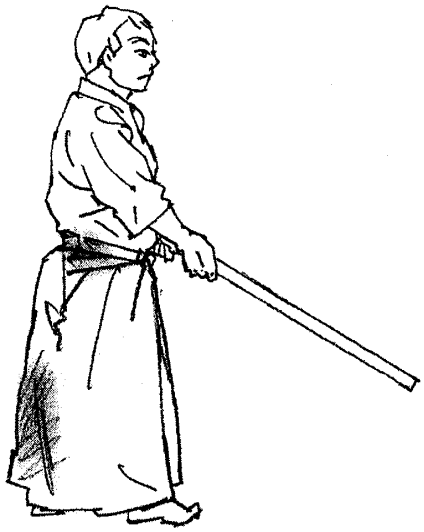


春風館に秘蔵された新陰流（疋田豊五郎）の伝書

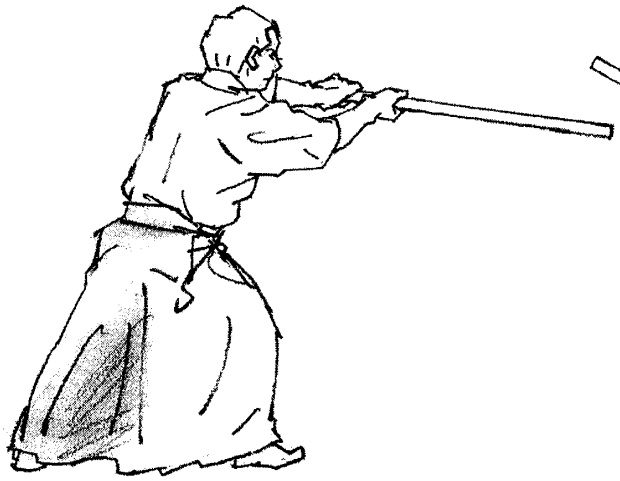
小詰（こづめ）

天井が低い場合の太刀である。

膝を折り腰を低くし、太刀を右膝の上に斜めに立てて構える。

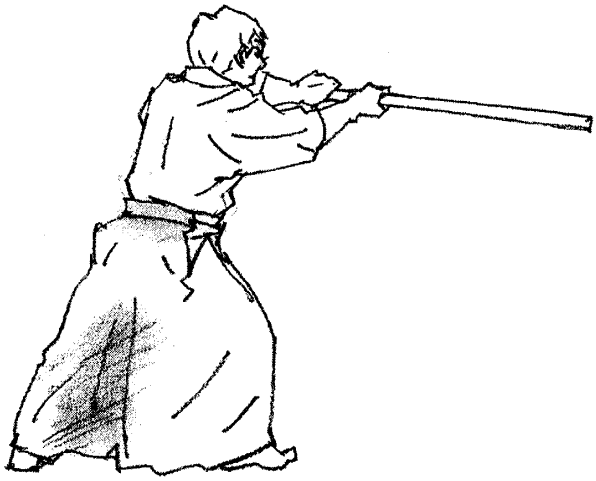


下段に構えた太刀を、左拳を左眼の高さに上げ刃を上に向けながら進み、

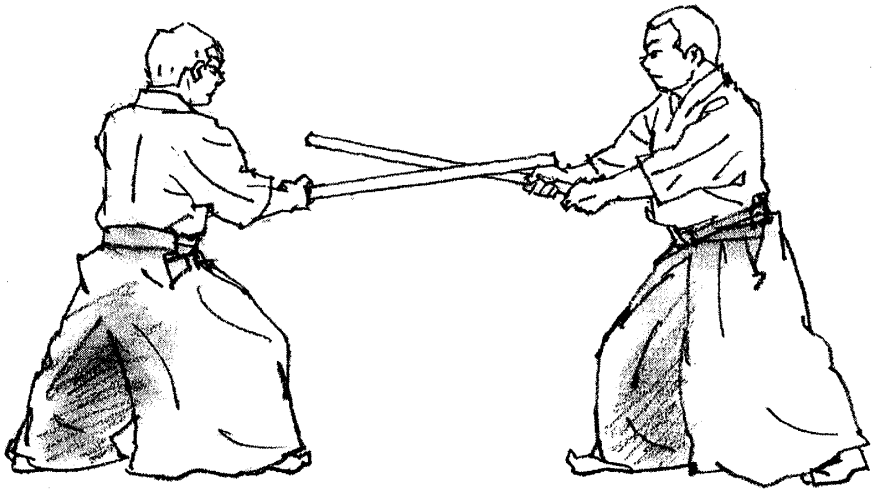


間に入って打太刀の左胸を突く勢いを示して、腰を低く構える。

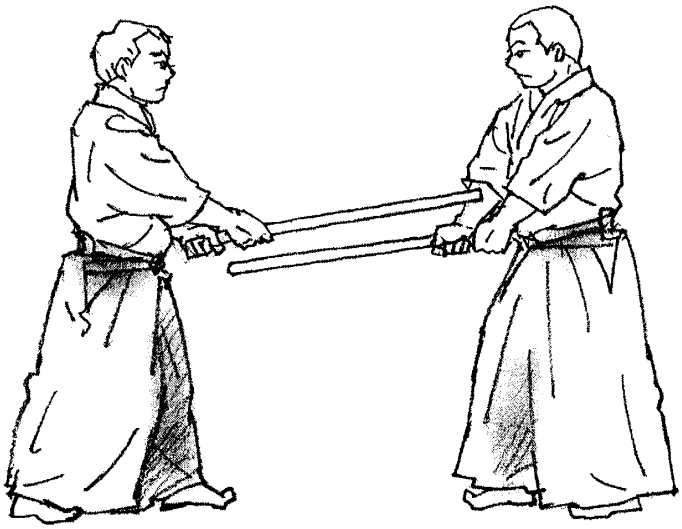
左拳を小さく打っていく。



拳に当たる寸前、膝をエマし腰を落として、打太刀の太刀を右峰で左斜め下に打ち落とす。
○太刀を上げない。刃は上向きのままである。

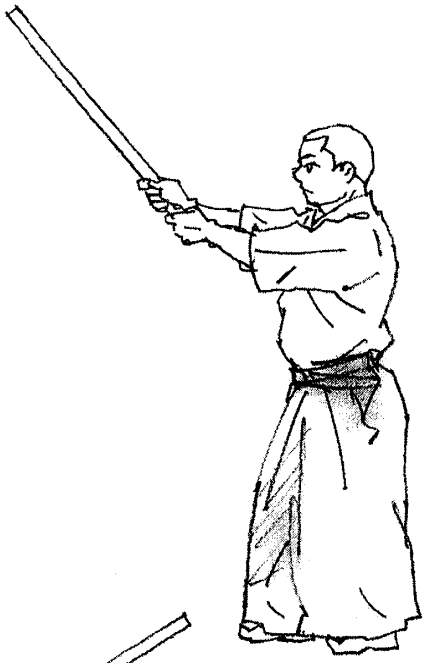


太刀を中段に戻しながら中墨を突いて残心



神奈川歯科大学古武道講座（新陰流・合気柔術）

大詰

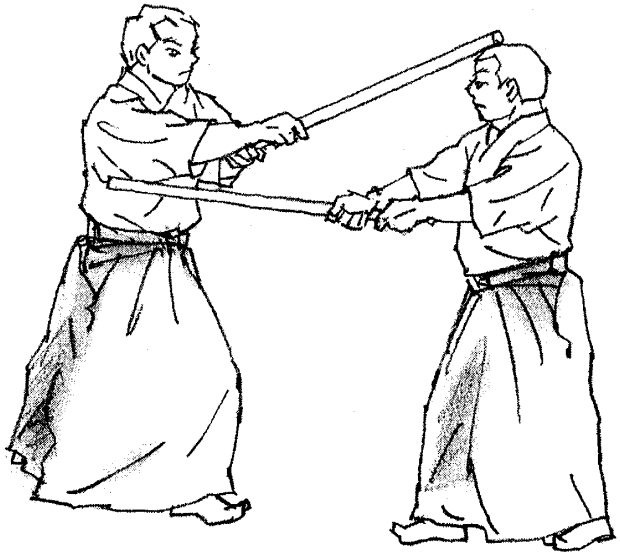


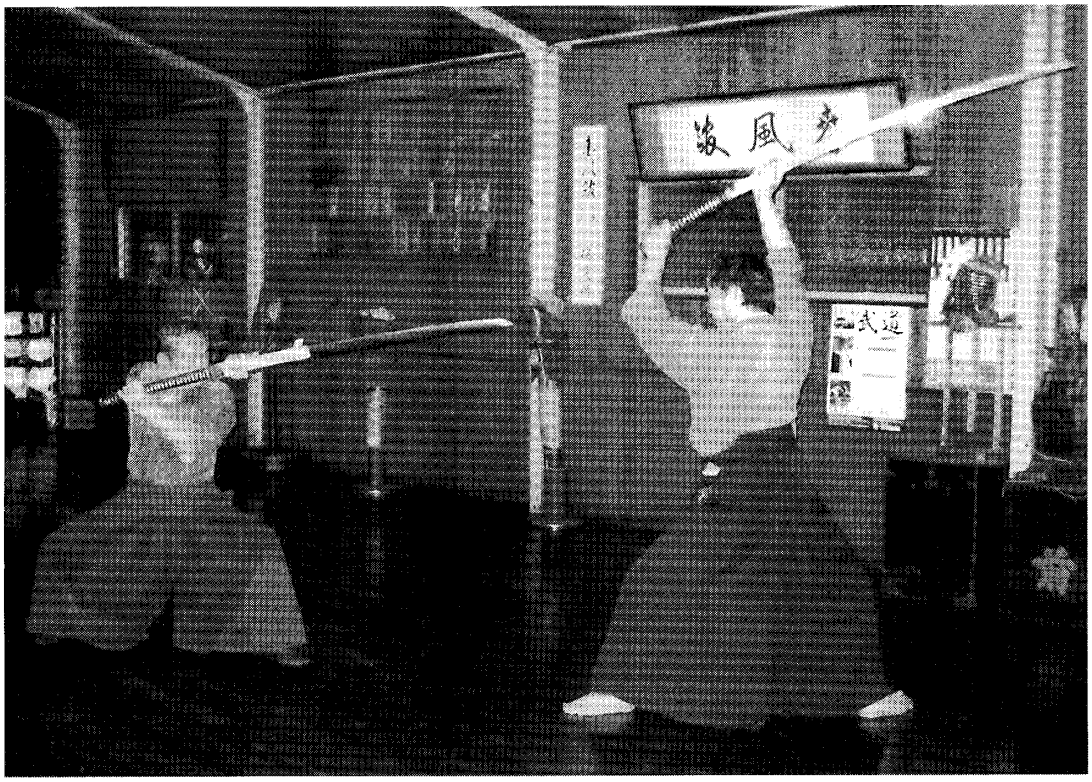
右手を肩の高さに構えた
相上段で互いに進む。

左拳を打っていく。

体を左斜め後ろに開いて太刀を大き
く振りかぶって打太刀の打ちを抜き、

面を打つ。





古伝・三学円の太刀　大太刀（右・肥前国正光・定光合作・刀長三尺五寸三分）

八重垣（やえがき）

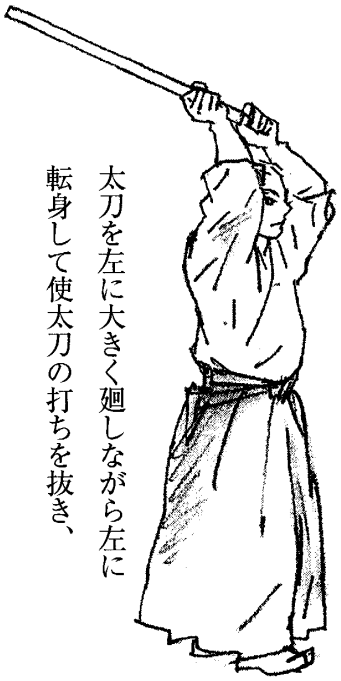
青岸に構え、太刀先を使太刀の左肘に付ける。

横雷刀。太刀は額から前に出ない。
○横雷刀は正面からも右からも左からも打てる遣い勝手のよい構えである。

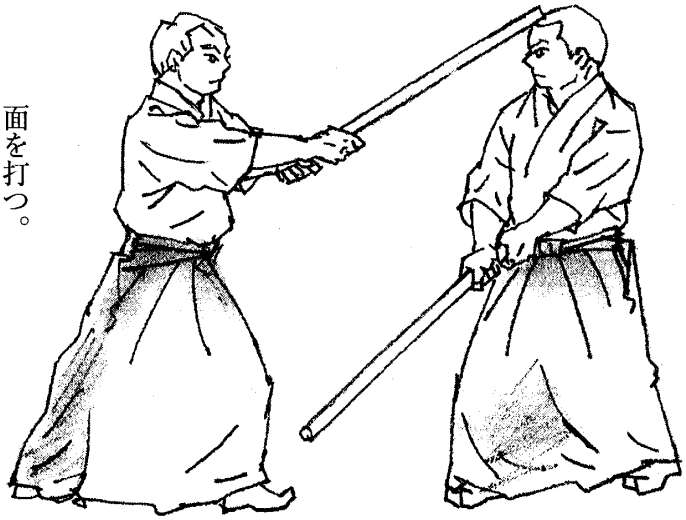
（後）使太刀の太刀が自分の太刀の近くに届くのを見定めて、
○この時、使太刀と打太刀の太刀は八重垣の形となる。

（先）右足を横に出すや、左足で打太刀を攻めながら太刀の左鎬（しのぎ）を下に向けて打太刀の太刀中を押さえるように、ゆっくり下ろしていく。

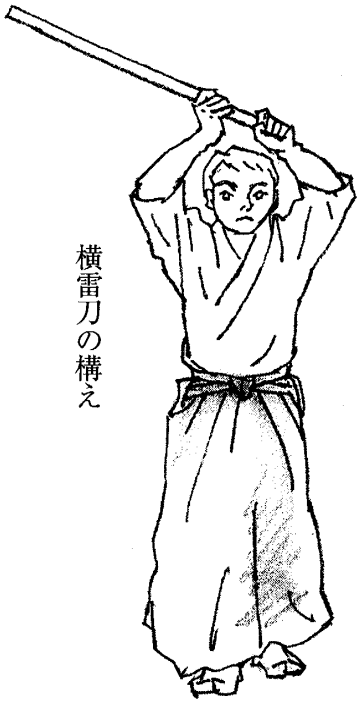
太刀を小さく廻して素早く拳を打っていく。



太刀を左に大きく廻しながら左に
転身して使太刀の打ちを抜き、



面を打つ。



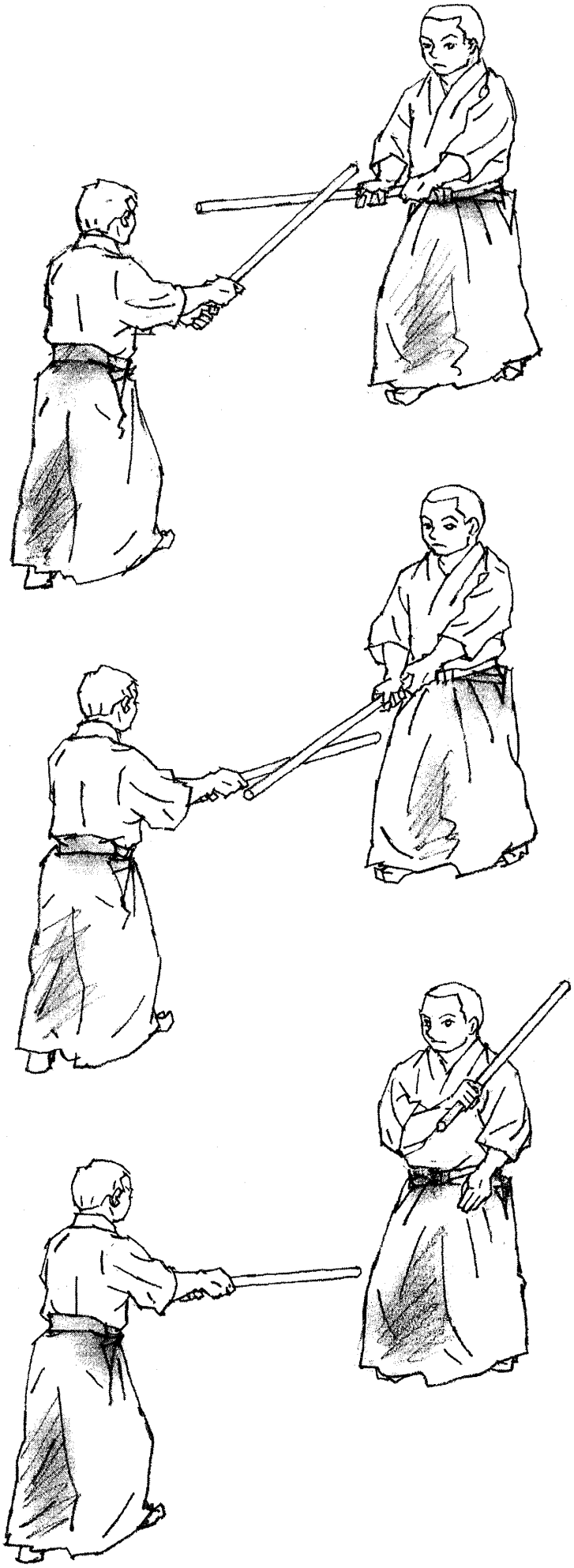
横雷刀の構え

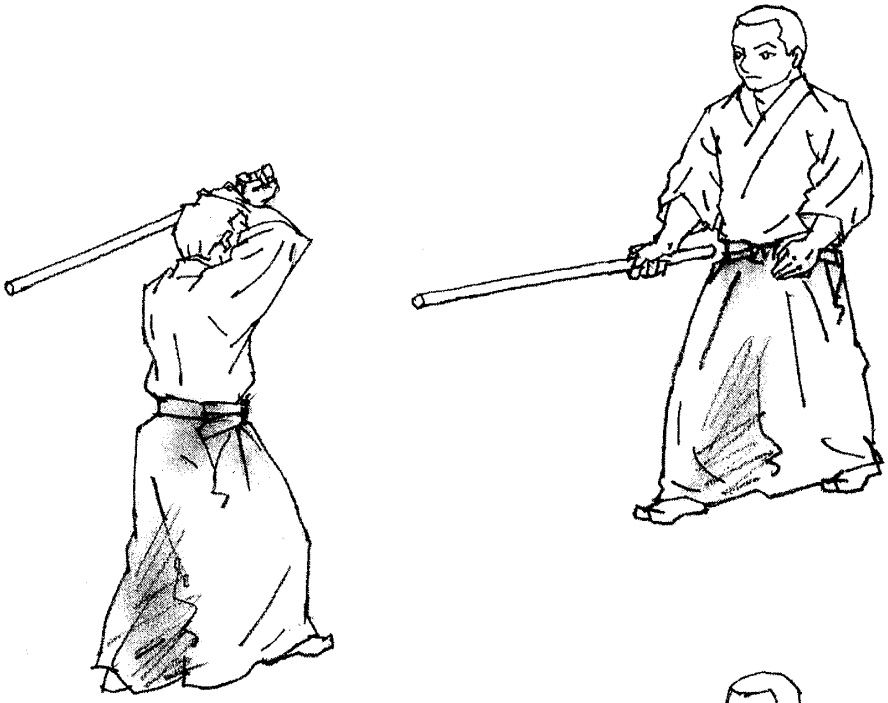
◎使太刀は、どこを打つか分からんぞと、ゆっくり太刀を落としていく。打太刀は、使太刀がどこを打ってくるか分からないので油断なく見極めていく。この両者のピーンと張り詰めた緊張が美しい太刀である。

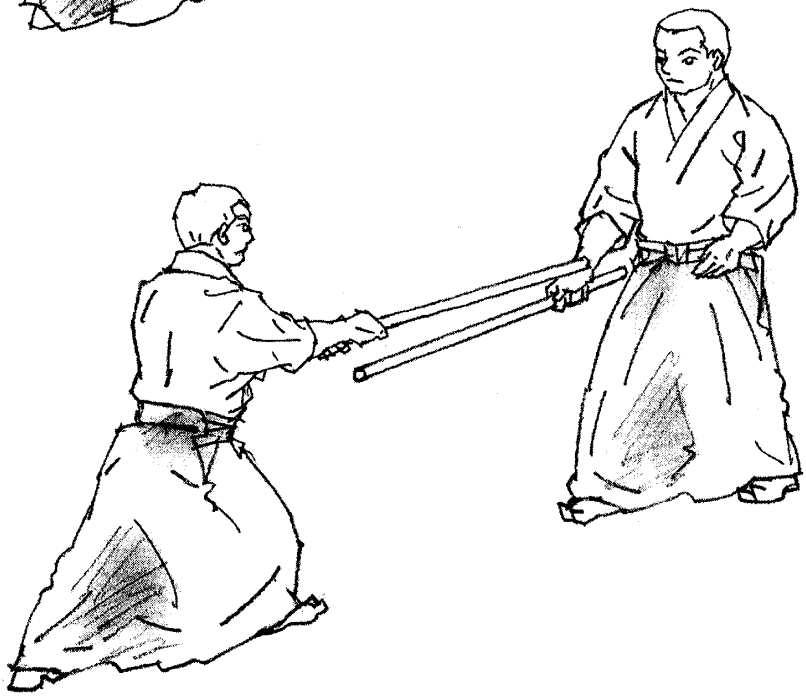
その後、打太刀は使太刀の太刀筋を見定めるや、急の太刀で打っていき、使太刀は、それをすかさずさっと抜いて、大きく面を打つ。この緩急のドラマが、遣って興味深い。

八重垣（尾張遣い）

この「八重垣」の当り拍子は、次の「村雲」の当り拍子と共に、神戸先生によって春風館道場だけに伝えられた「秘剣」の一つである。したがって術理は記さない。個々に口伝を通して実技の中で教えを受けることが大切である。また実際に打太刀になって巧者の技を受けて、技のすごさを体験しなければ本当のところは分からない。





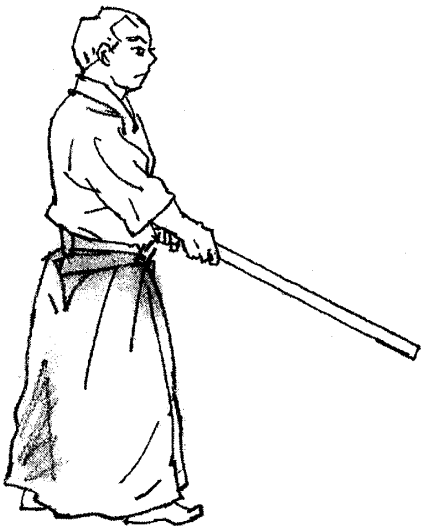


◎ほとんど同時に互いの右手を打ち合うので、どちらが打ち勝つか分らないところに面白さがある。

市民講座「やさしい古武道・新陰流を学ぼう」

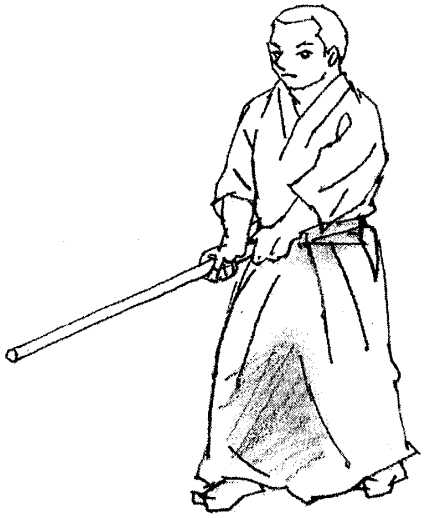
村雲

互いに十分の間を取って下段に構え、文を切りながら進む。
（上下に剣先をゆらす）

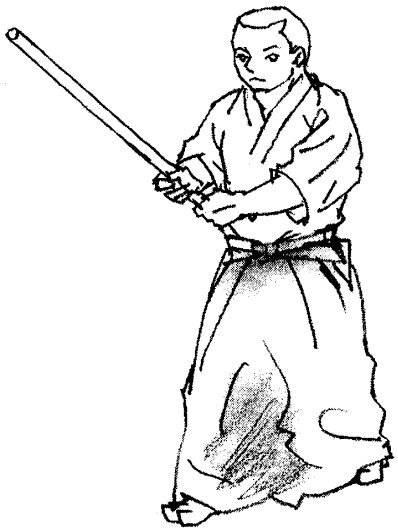


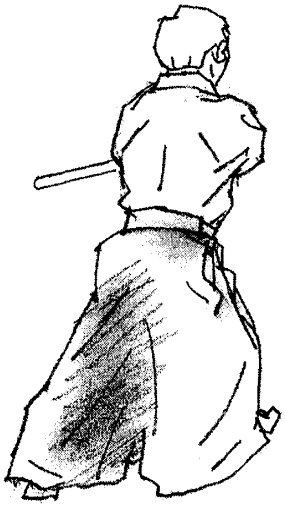
間境で剣先を急に左斜めにして、拳をしっかり見せて上下にゆらゆらと文を切りながら右に二、三歩廻る。
○間境ぎり〳〵の間を変えない。

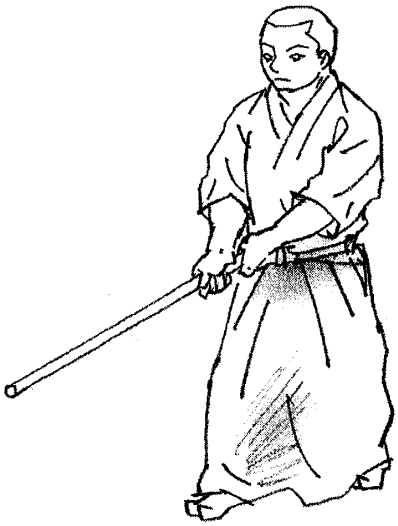
中段に構え、使太刀に正対する。



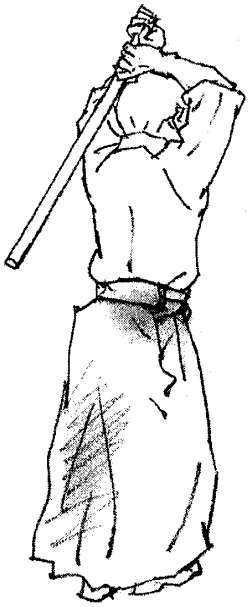
機を見て拳を打っていく。

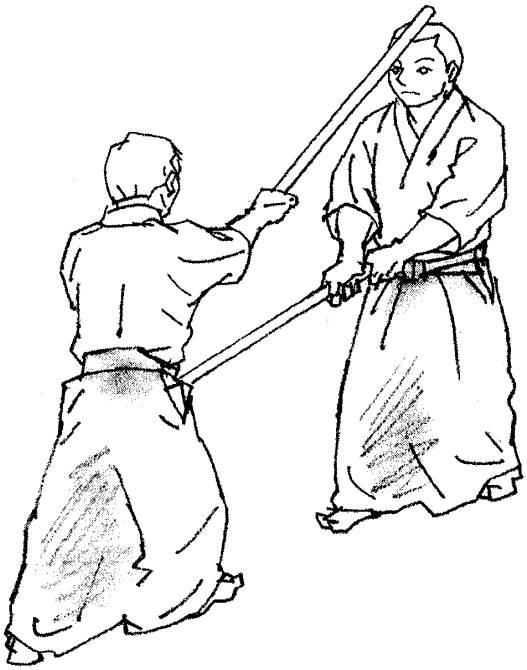






左斜め後ろに体を退きながら
太刀を大きく上段に取り上げ
て打太刀の打ちを抜き、





大きく面を打っていく。
○拳に勝ってもよい。

下段のまま元の位置に戻る。

太刀を胸元に退きながら元の
位置に戻り、太刀を斜め上に
胸元に収め、上（かみ）への礼をなす。

上図の使太刀を正面から
見たところ

村　雲（尾張遣い）

この「村雲」の当り拍子は、「八重垣」の当り拍子と共に、神戸先生によって春風館道場だけに伝えられた「秘剣」の一つである。したがって術理は記さない。小さく両拳に勝つ双手切りであり、厳周伝の特徴である「くねり打ち」の一つである。道場でも完全に遣えるのは二・三名の高弟だけである。

『天狗抄』講習

平成十七年十二月二日、神奈川歯科大学武道場で春風館道場の下村先生を迎えて新陰流（厳周伝）の講習会が開かれた。当日は「三学円の太刀」「九箇の太刀」「燕飛」「天狗抄」が講習された。ここでは「天狗抄」を取り上げることとする。打太刀は著者の主宰する「新陰流稽古『沈龍の会』」の指導員・赤羽根大介である。

赤羽根大介は十一月三日、明治神宮の日本古武道振興会主催の古武道大会で「大太刀・燕飛」、十一月五日、鎌倉鶴岡八幡宮で鎌倉居合道連盟の主催する古武道大会で「三学円の太刀（江戸遣い）」「九箇の太刀」「燕飛（大太刀）」を著者と演武しているが、春風館道場の先生に教えを受けたのは今回が初めてである。稽古後「使太刀で勝たせてもらうと分っていても、攻めてこられると、気迫に圧されて負けてしまう」と感想を述べ、「こんな人がいるのか。この人は本物だ」と感激していた。下村先生には「ここまでやるとは思わなかった。とにかく形が綺麗だ。稽古を積めば結構な使い手になる」と、過分な言葉を頂いた。

「天狗抄」は陰流の愛洲移香斎から新陰流の上泉伊勢守、さらに柳生新陰流の柳生石舟斎宗厳と伝わってきた太刀である。最初は「天狗勝」と呼ばれたものを、石舟斎が「天狗抄」と改めたと言われている。

「天狗抄」について『月の抄と尾張柳生』は長岡房成の「新陰流兵法口伝書外伝」を引用して次のように言う。

天狗とは、当流先哲の説によれば、天狗は山気にして、時あり形をなすものとされ、本来無形なれども、敵によりて形をなすもの。もとよりこの道は無形の位にして、敵に応じて形をなすを本原とする。

柳生十兵衛の『月の抄』によると、石舟斎は、

この太刀は構えを習いとして、これより切り掛け、序のうちにて表裏をもととして用いる太刀、これなり。これより敵の転変に従う心持なり。

「天狗抄」は八本の太刀によって成り立っている。

「花車」「明身」「善待」「手引」「乱剣」「二具足」「打物」「二人懸」

今回はイラストのスペースの関係で「九箇の太刀」に対して「五箇の太刀」とも言われる最初の五本を取り上げる。春風館では普段の稽古ではこの五本の稽古が行なわれている。打太刀・使太刀のダイナミックな打ち合いがあり、個人的には演武して一番面白い太刀である。

春風館道場の加藤館長のお許しを得て、第二十四回浅草日本古武道大会（平成十八年四月十五日、台東リバーサイドスポーツセンター）に参加させて頂いた。演武は次の通りである。

「三学円の太刀（尾張使い）」	打太刀	下村幸裕	使太刀	赤羽根大介
「燕飛」	打太刀	山崎双葉	使太刀	朴　周鳳
「大太刀・燕飛」	打太刀	赤羽根大介	使太刀	下村幸裕
「天狗抄」	打太刀	赤羽根龍夫	使太刀	赤羽根大介
「三学円の太刀（江戸使い）」	打太刀	下村幸裕	使太刀	赤羽根龍夫

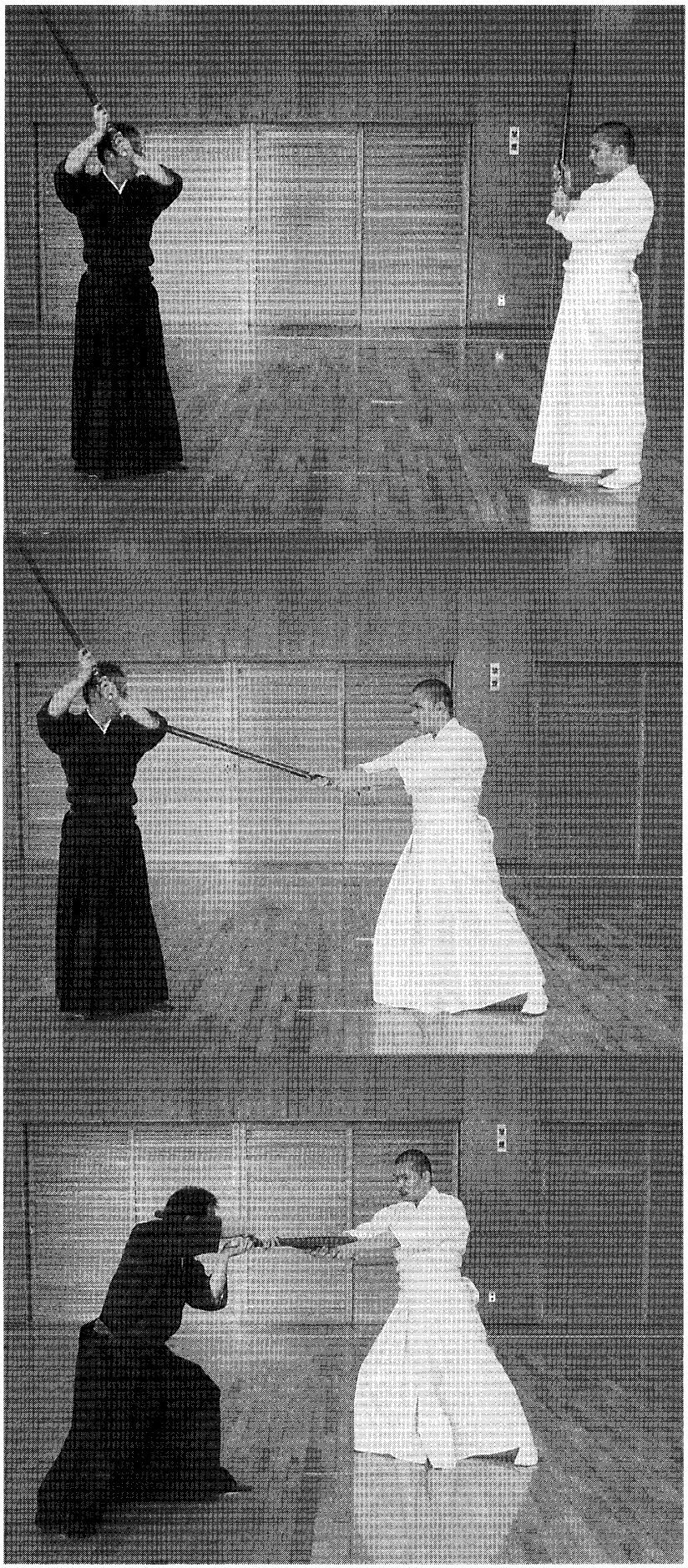
なお五月二十九日、三十日、韓国江原大学校で開催される、日本と韓国の大学が共同で開催する「韓国スポーツ人類学会」で、早稲田大学大学院博士課程、朴周鳳氏が「日本の剣術流派と新陰流の検討—朝鮮との関係を中心に」について発表し、著者と赤羽根大介が新陰流（厳周伝）の演武をする予定である。またシンポジュウムの題目は「韓国人の身体文化を考える」であり、「韓国伝統舞踊の演舞」もあり、近代以前の日本と韓国の身体操作の比較について興味深い討論を期待している。

花車（かしゃ）

（使）霞（かすみ）太刀

相手を上から見据える気持ちで構えて待つ。

（打）脇構え（または青岸で文を切り）で攻め進み、



○撥草の場合より体を横にし、足は左右に開かない。

（打）左肘を浅く打って行く。

（使）左肘を引いて打ちを外しながら体を右前に開き（目安・三〇度）

○二図はイメージ図。実際の動きは三図

（使）膝をえます力で柄中を上からパーンと切り下げる。

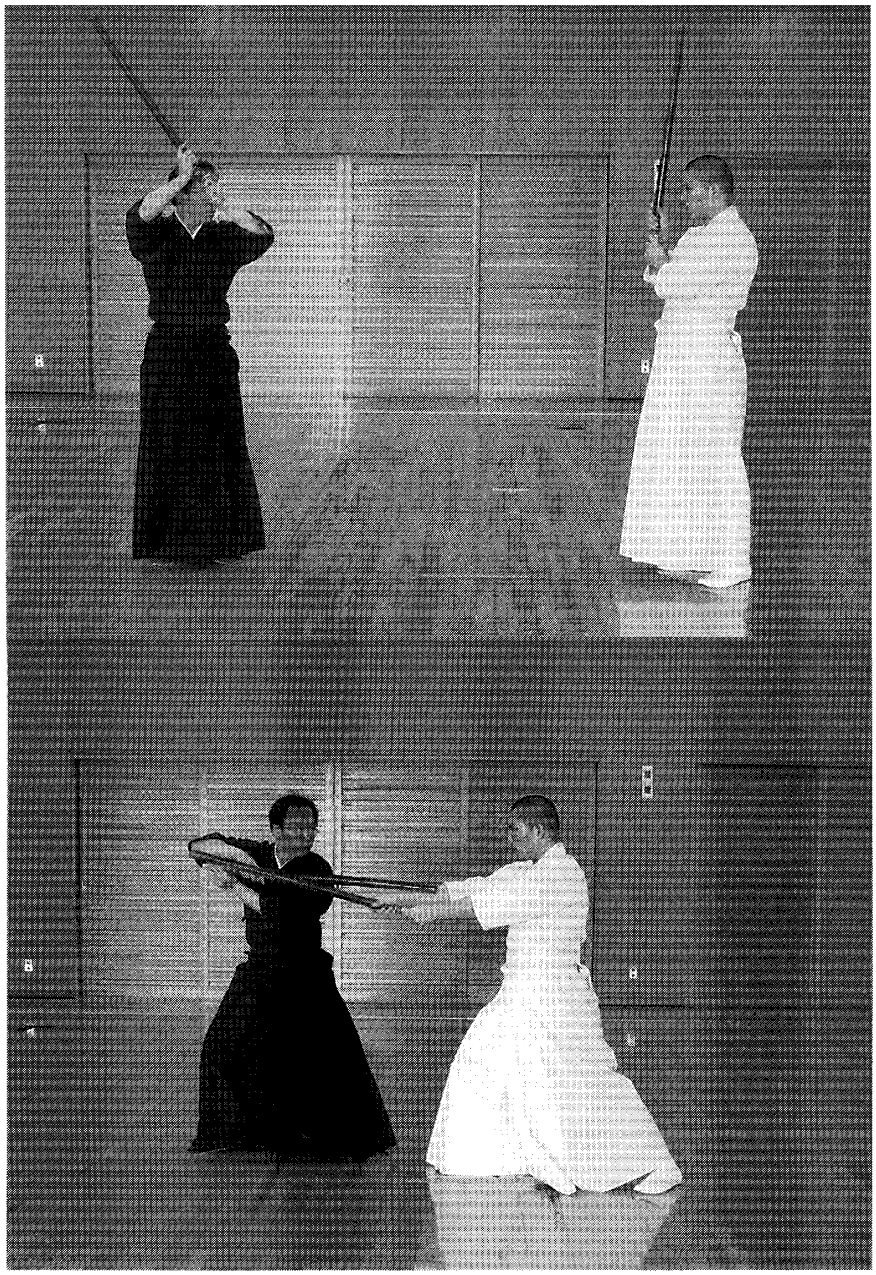
○剣先から真下に打ち下ろす気持ちで上から覆いかぶさるように叩く。左拳は顔の前。左肘は脇に付いている。

○左足は打太刀を向き、両膝・両足は大きく横に開く。

○左足・両肩・太刀は平行になる。

(打)真直ぐ左腕を打っていく。
(使)体をわずかに左に開き、右腕を打つ。
○左拳を強く後ろに引くので右拳が顔の前となる。

打太刀・使太刀　元の構えに戻る。



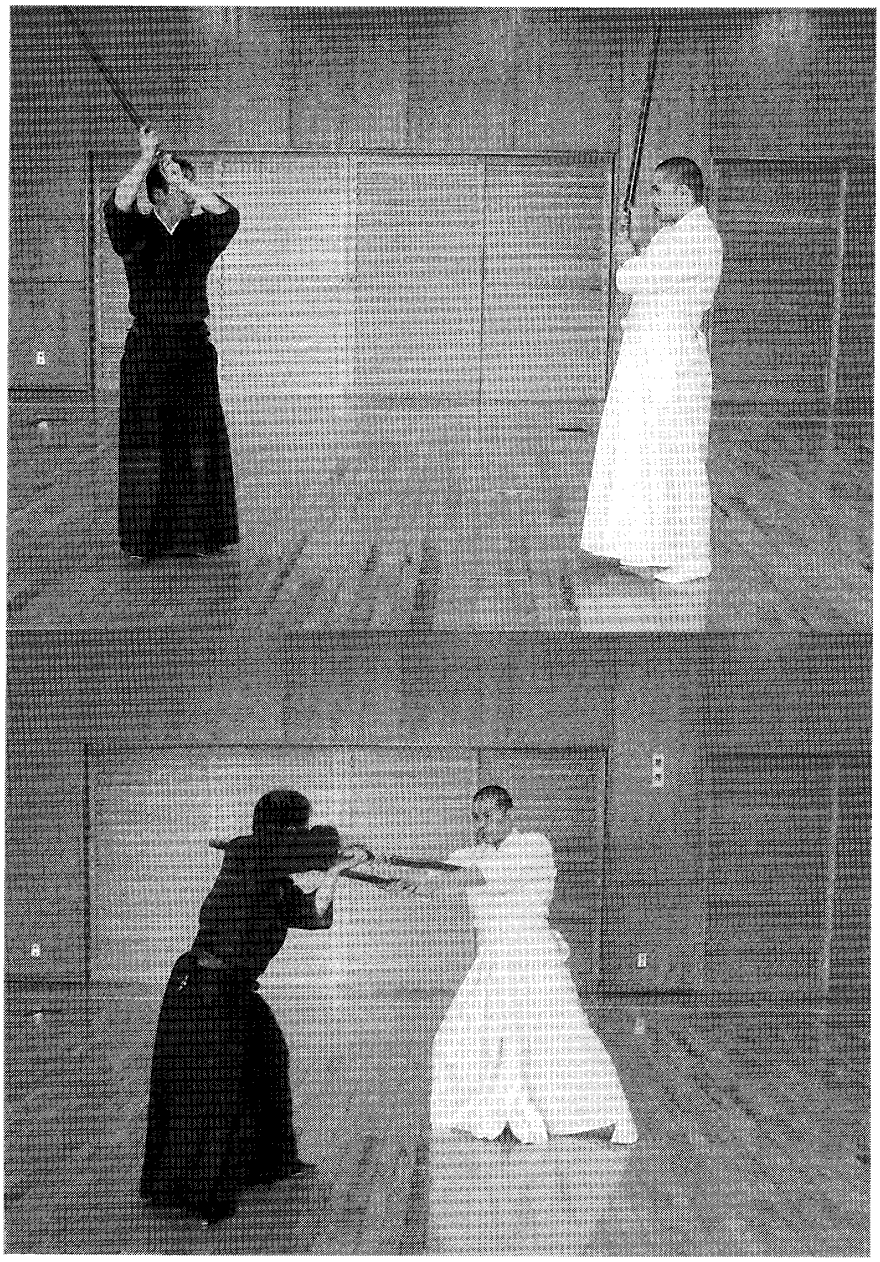
江戸柳生古目録による使い方

(使)手は左の肩を敵の身通りを外さず脇構の太刀をあげて、相手(打太刀)の方へ少しさしかかる様にして左の足を先へなし腕をのばし一重身に肩を敵のこぶしにくらぶる味いにて構ゆるなり。

解説

これは高きかすみの構えなり、刃、天を指す、高きを打つ太刀なり。この勢法は打太刀ヒジに浅く打ちきたるを越して拳に勝つ。また打ちきたるを、仕太刀、合し折り敷くものなり。

この形、柳生十兵衛、仇討の小太郎なるものにこの一本のみを伝えしと云う説あり、さも有べし。能く極めて尽せる所有る形なればなり。また他に是を新陰流カラ竹割の太刀と云う。これ撥草は横に払へども霞太刀は竪(たて)に打つ故この名あり。

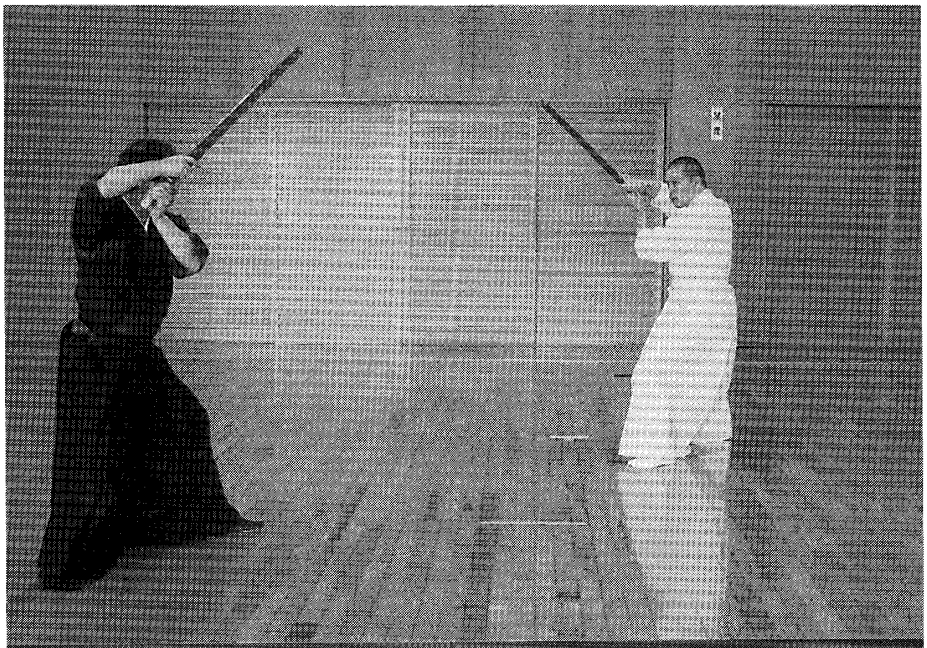


打太刀・使太刀　元の位置に戻る。

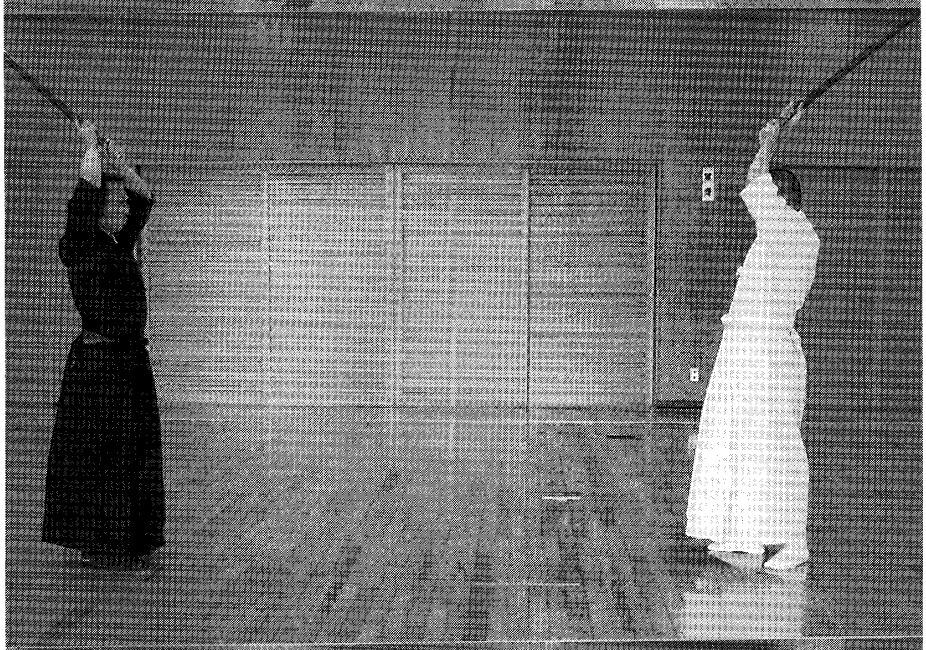
（打）深く肩を打っていく。
（使）体を最初よりも大きく右前に開き
（目安・四十五度）、柄中を打つ。

(使)右斜めに開いた体をそのまま後ろに退きながら、一重身になって太刀を逆の中段に構える。

(打)使太刀に正対するように右斜め後ろに退きながら、一重身になって太刀を逆の中段に構える。



打太刀・使太刀　互いに相手を見据え、太刀を廻し雷刀に上げ元の中心線に戻る。



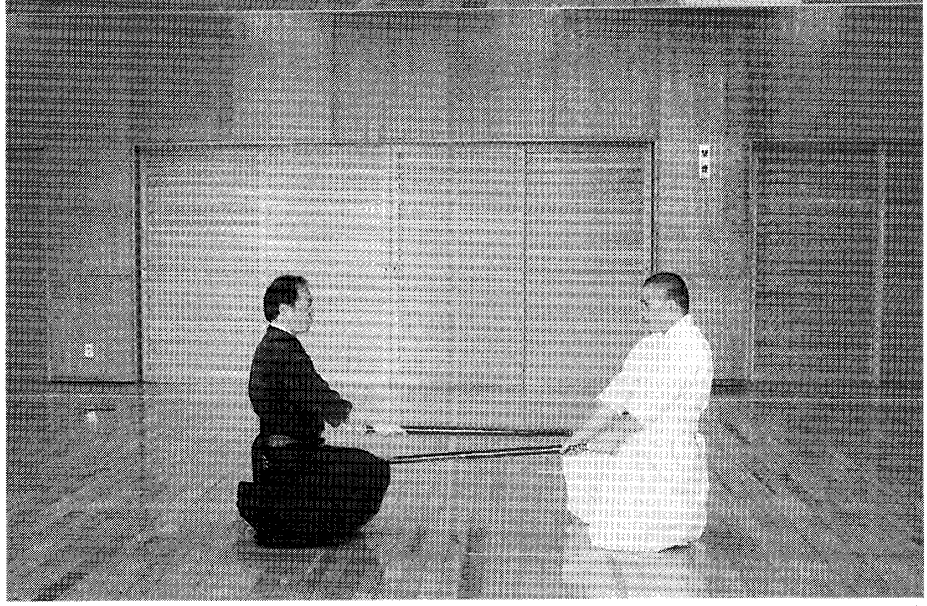
○左足の土踏まずに右足の踵がつくことが勝ち口の一つである。

(打)正面を打っていく。

○演武では首を切っていく。その方がきれいに見える。

(使)合打(がっし)で柄中に打ち勝ち、折り敷く(腰を沈める)。

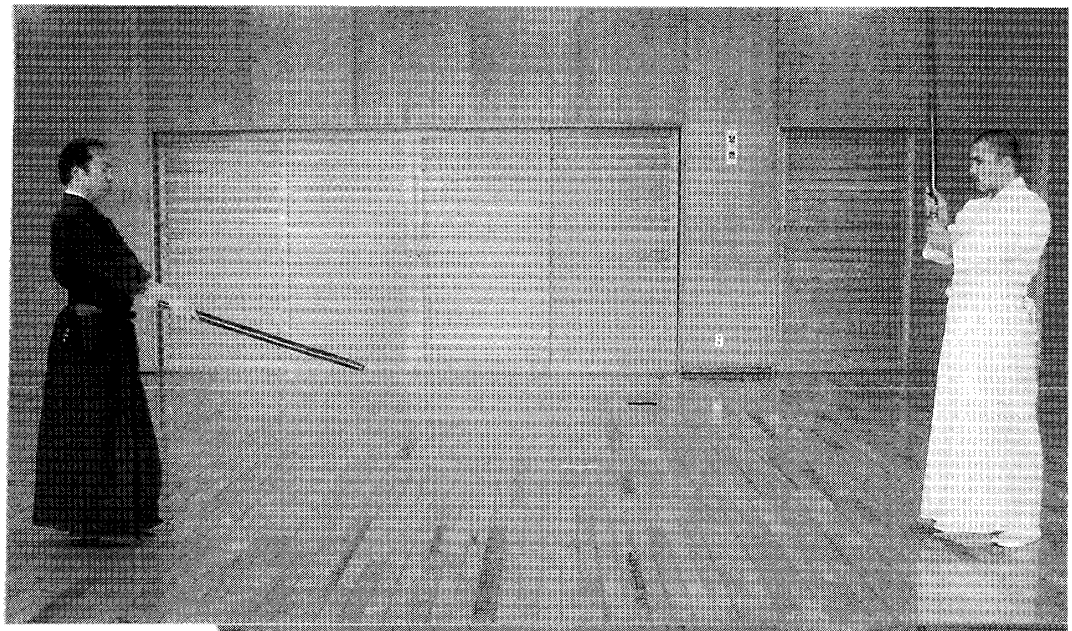
(打)打たれて、同時に折り敷く。



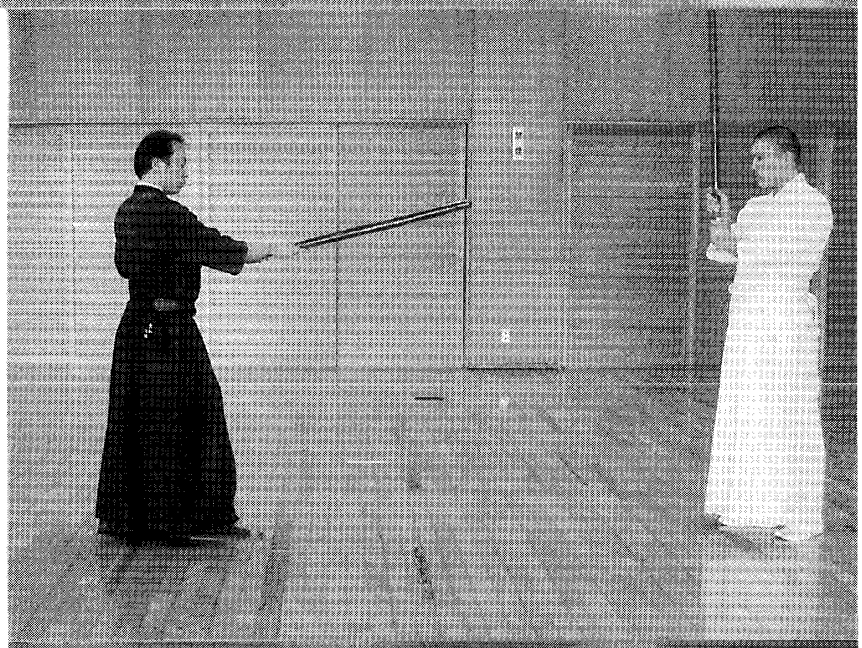
○折り敷いた時、右膝が左膝より前に出ない。

明身（あきみ）

（打）太刀を脇構えに構え、待つ。
○一の太刀を横にした構え
（使）下段に構え、太刀を中段に上げながら、攻め進み、

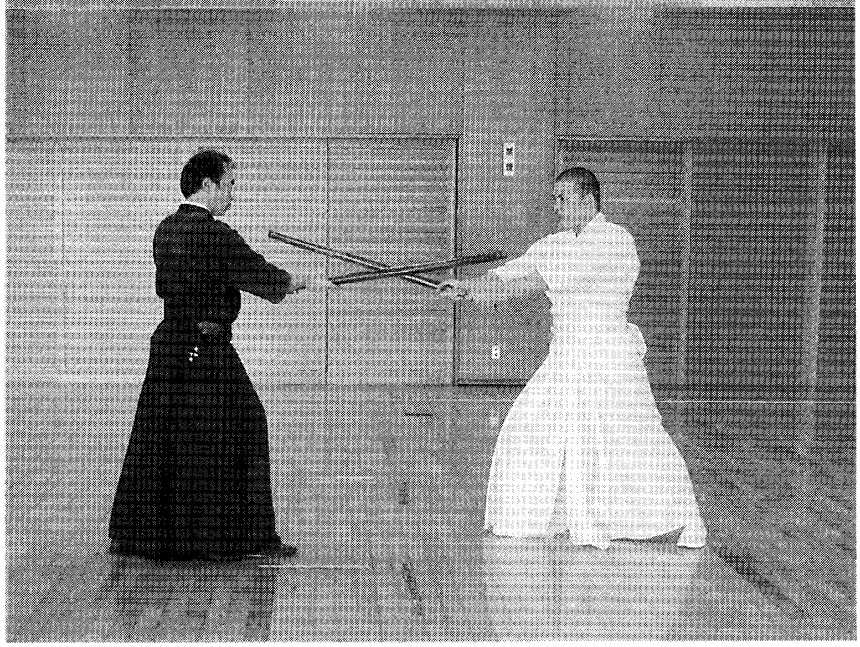


（使）間境を右足で越しながら青岸に構える。
（打）真直ぐ左拳を打っていく。



○頭を打つこともあるが、間が近くなり危ないので、最初のうちは拳を打つ。
○「九箇の太刀」の「和ト」と同じ太刀筋であるが、違いは青岸に構えるとき、足幅を大きく開いて待つことである。

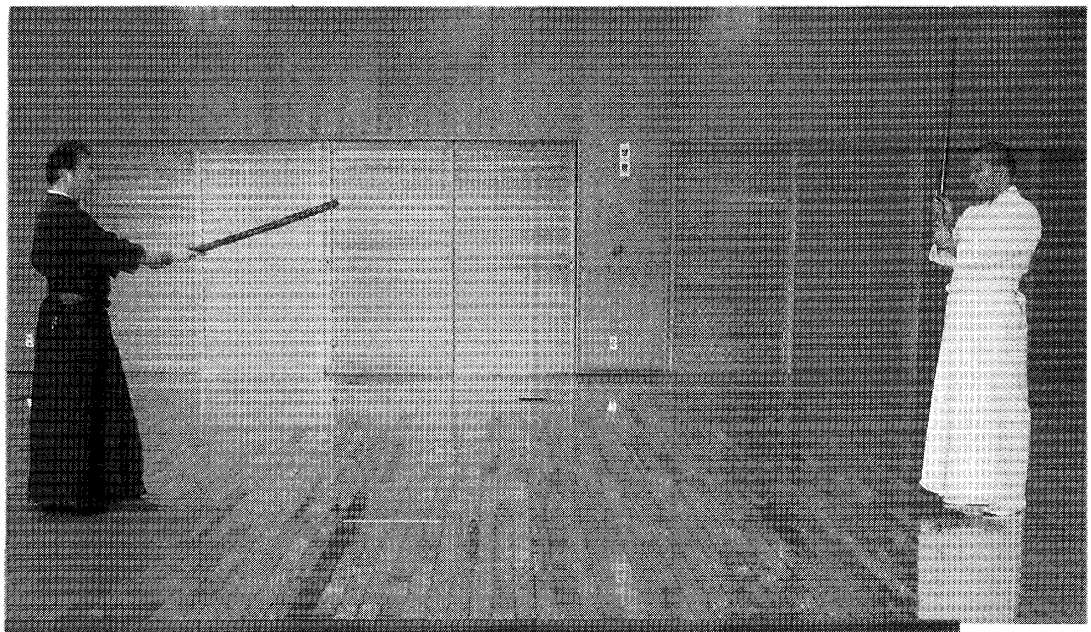
（使）構えた太刀のまま、筋を変えないで打太刀の太刀を切り落とすと同時に相手をぐっと突く。
○剣先を上げないで打つ。打った瞬間、前足にやや重心が乗り、後ろの左足のエビラ（膝のうしろ）が伸びる。



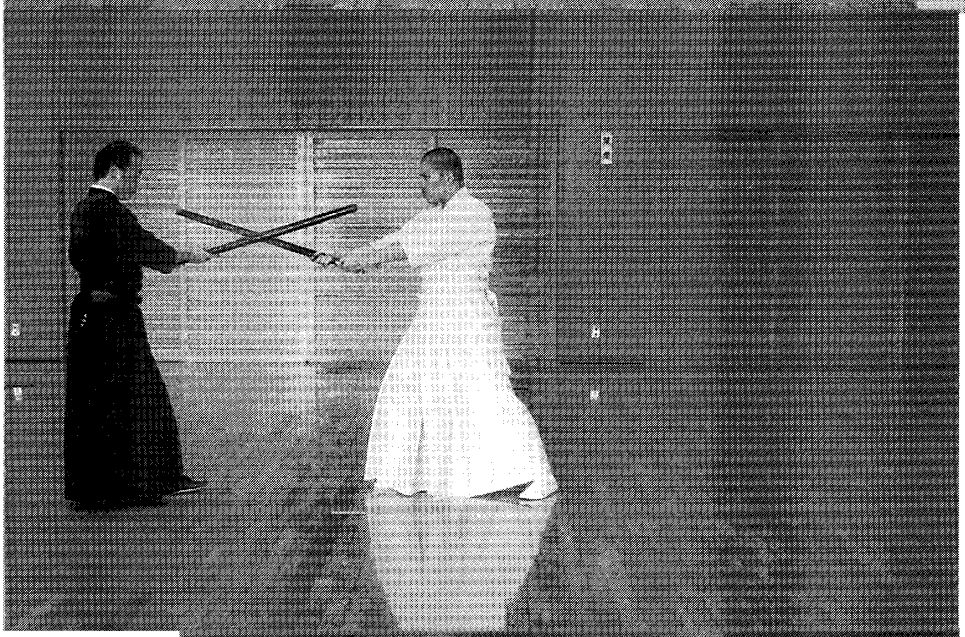
○打太刀の打ちを手元で受けようとすると打ち負けてしまう。剣先で落とす気持ちで、脇を締めて剣先に力を込めて突き落とす。剣先の冴えを利かせる。
○最初は足を大きく開き、右に体を変えて打つ。体を右に開くことによって、左斜めに落とす剣先の冴えが出る。

善待（ぜんたい）

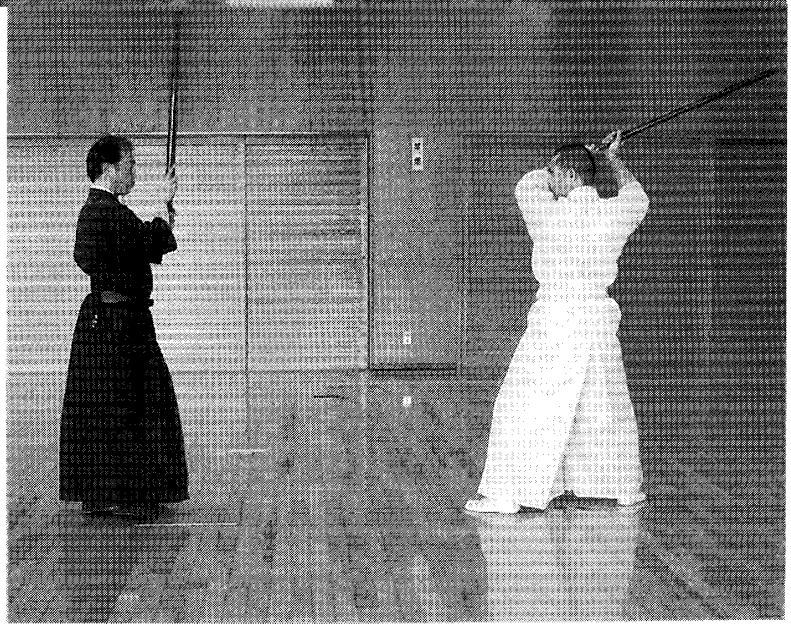
（使）青岸に構え、待つ。
（打）脇構えで攻め進み左拳を切っていく。



（使）左足のつま先を左に開きながら前に出し、太刀を斜めに引いて刃で打太刀の打ちを受け（または和ト勝ちで）、太刀を下からラセンに廻しながら、右足・左足と進め、剣先で打太刀の中墨を攻めると同時に、



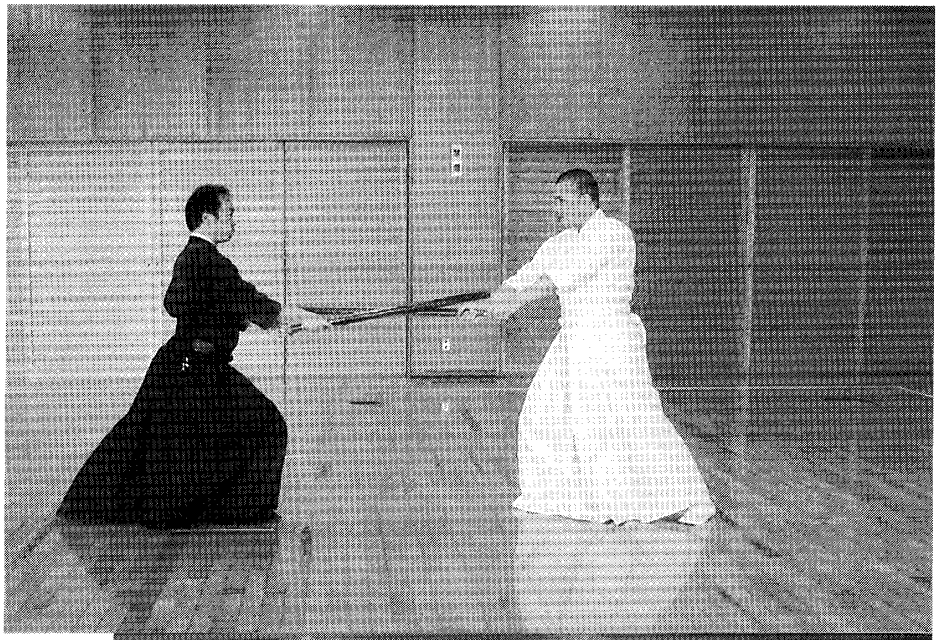
（使）後ろの右足を左足に揃えて、すばやく太刀を顔の前に垂直に立て、「拝み打ち」の構えとなる。
（打）ぐいぐい前に攻められて大きく撥草に退がり、



○左拳は水落ちの前まで上げることが肝要。左拳が高いから、下に切り下ろす勢いが強くなる。　**浮沈の位**

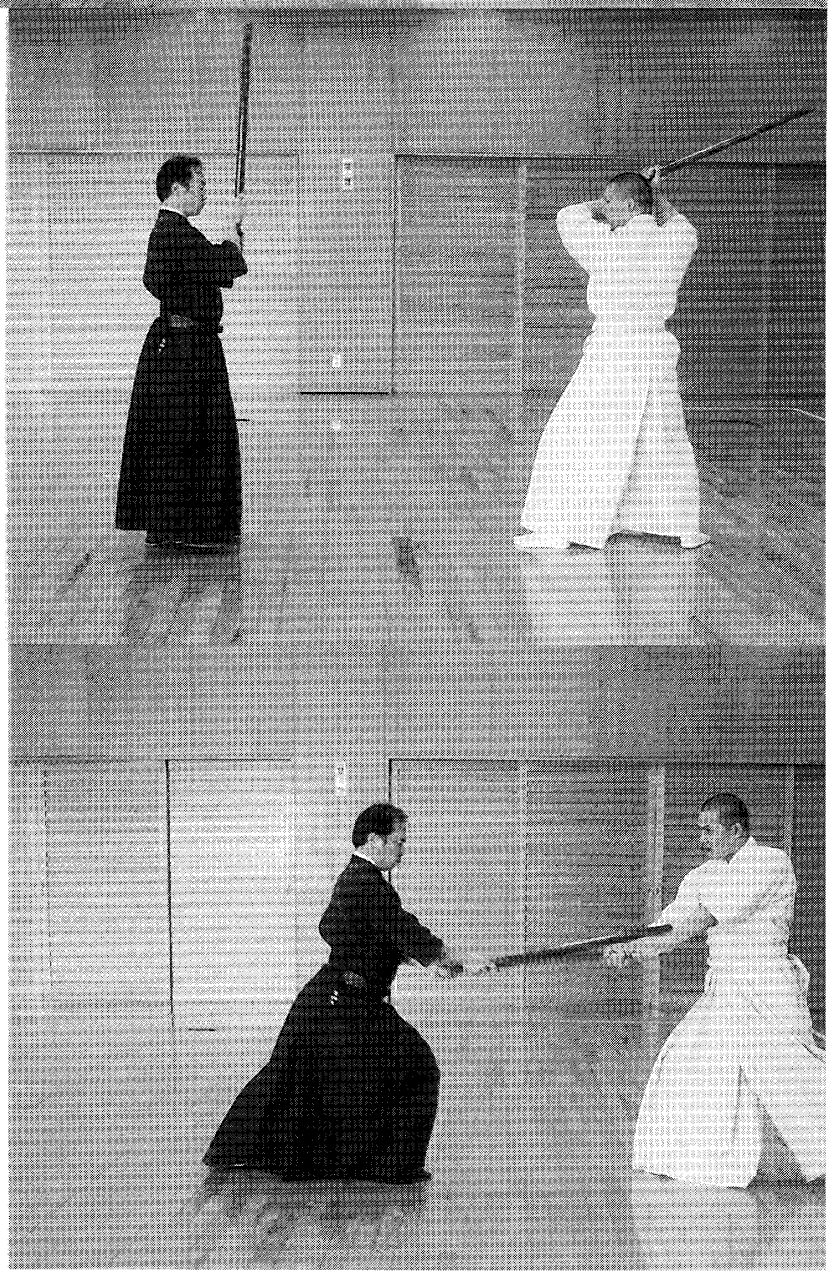
(打)拝み打ちの構えとなった打太刀の左拳を切っていく。

(使)太刀を剣先から真直ぐ、打太刀の両拳が水平まで落ちるまで切り下ろす。



○このとき両足は両開きとなる。右足で前に攻めながら左足を後ろに開く。後ろの左足を絶対に曲げない。

○同じ打ち合いを三回繰り返す。



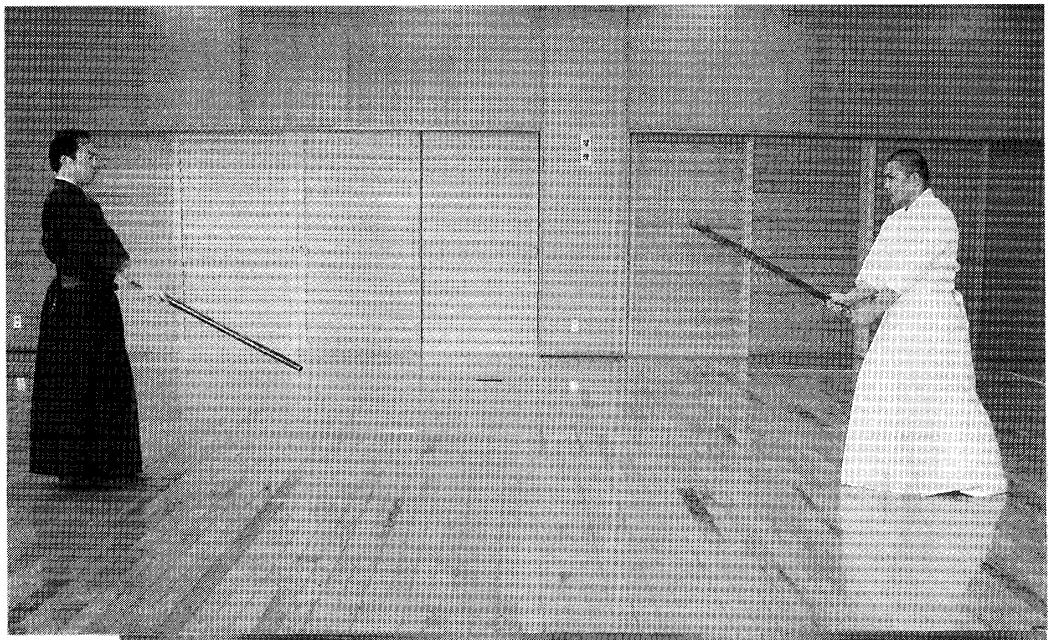
江戸柳生古目録による使い方

互いに中段の青岸なり。序を切りかけ打太刀の太刀に乗りかけ身位を少し沈みて打太刀の両手の間、胸へ太刀先のなる様に切るなり。打太刀は乗られて下より使太刀の後の拳を払い切りに切りて、後へ一足宛くさる（さがる?）なり。初めは敵の打を見て打合いきわへなる時は急に打つべし、乗りかけてからは無理に打っても勝つと云う心持なり、然るによりて善待無明と云うなり。

手引（てびき）

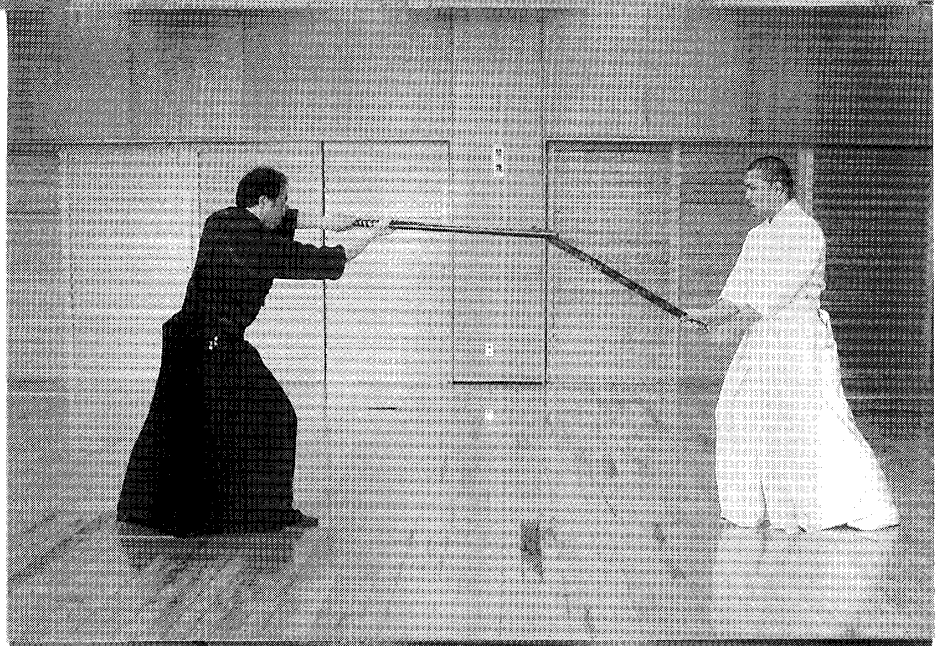
（打）右膝を折り重心をかけて、太刀を右膝通り、剣先を立てて待つ。

（使）下段に構え、身を沈め太刀の刃を上に向けながら攻め進み、



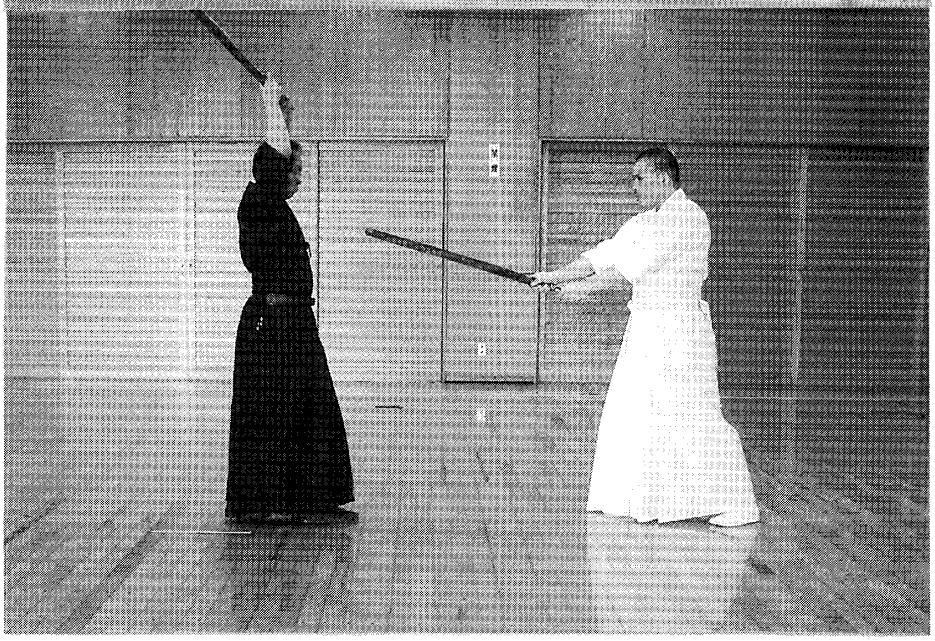
（使）間境で打太刀の左胸を剣先で突く勢いを示す。

○「小詰」の使太刀・打太刀と同じ構えである。



（打）後ろの左足を前の右足に引きつけ、右足を踏み込んで小さく左拳を打っていく。

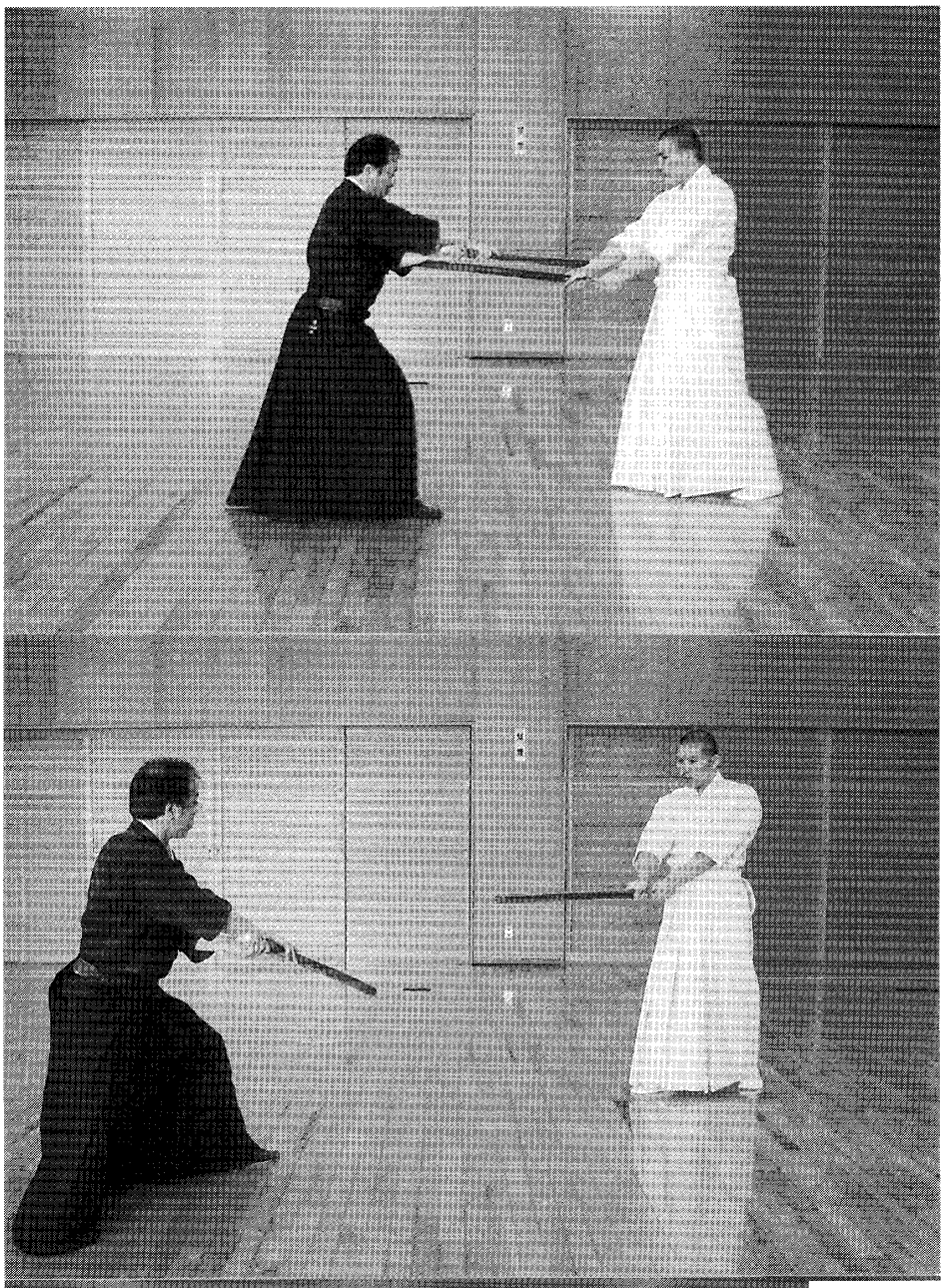
（使）太刀を横雷刀に取り上げて打太刀の打ちを外し、



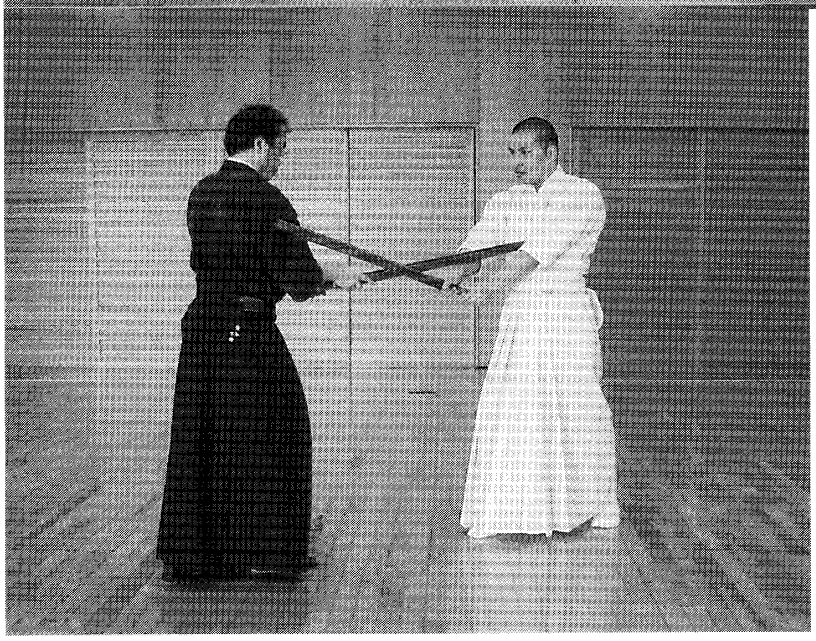
(使)廻し打ちで右拳を打ち、

(使)右斜め後ろに引いて両手を見せる。
○拳を見せた時、膝をえまして体を沈める。

(打)使太刀に正対して前に出た拳を打っていく。
(使)右足を踏み込んで太刀で、打太刀の右手に乗るようにして、右膝通りの太刀筋（極意の線）で中墨を突いていく。但し危ないので　練習では左足前のまま小さく踏み込む。



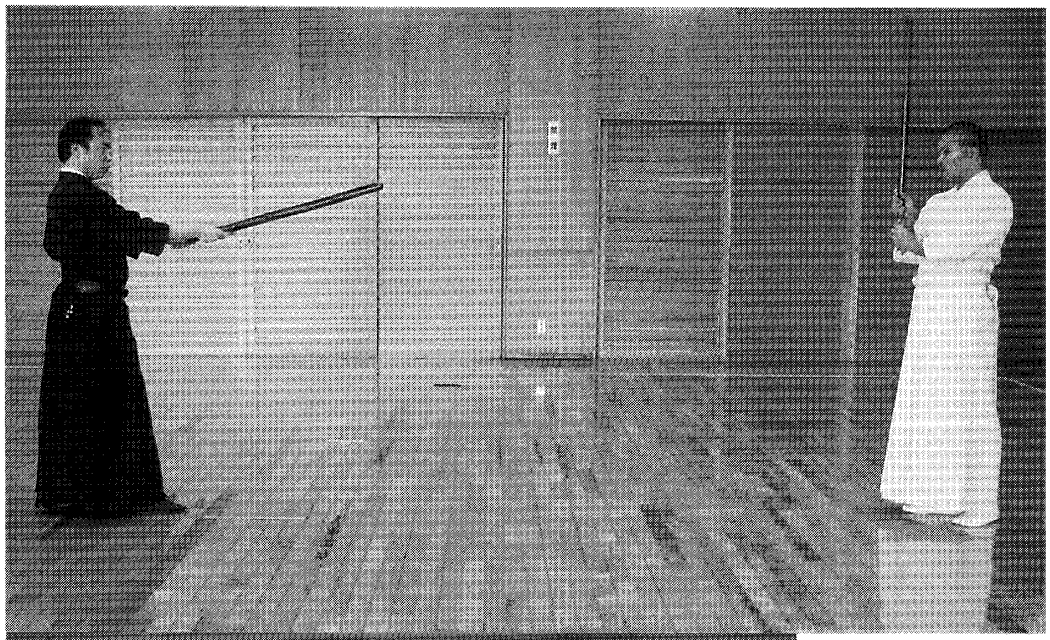
○体が低いから体を伸ばしての突きが強くなる。**浮沈の位**



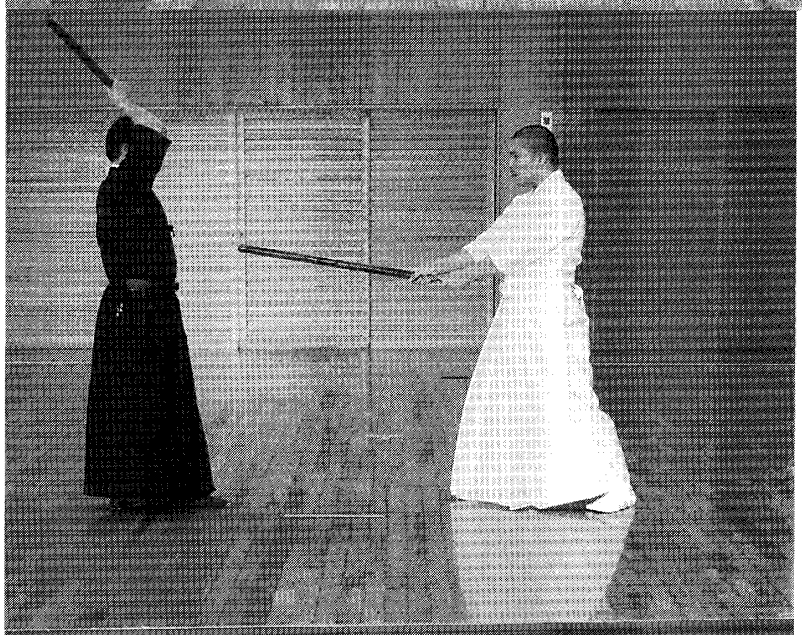
○新陰流の中で最も危険な技

乱剣（らんけん）

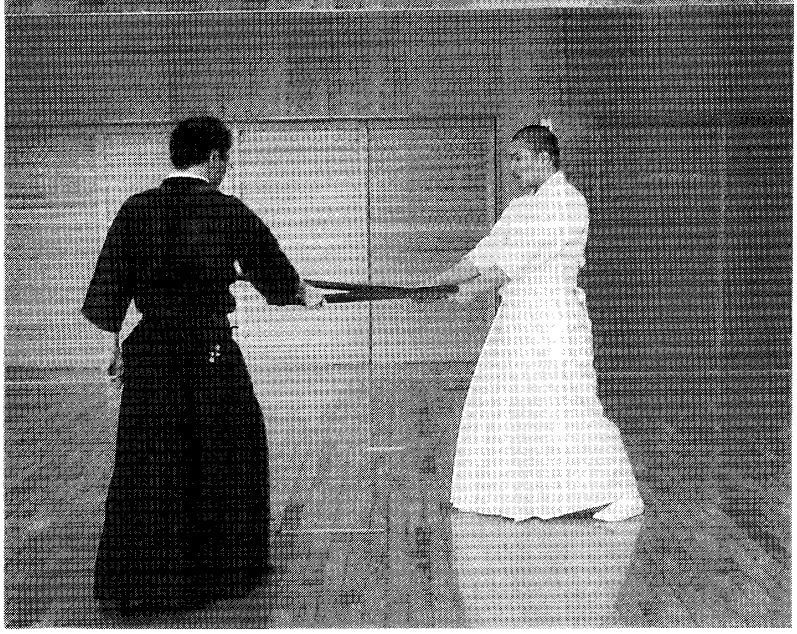
（使）青岸の構えで文を切って待つ。
（打）脇構えで（または青岸で文を切って）
攻め進み、



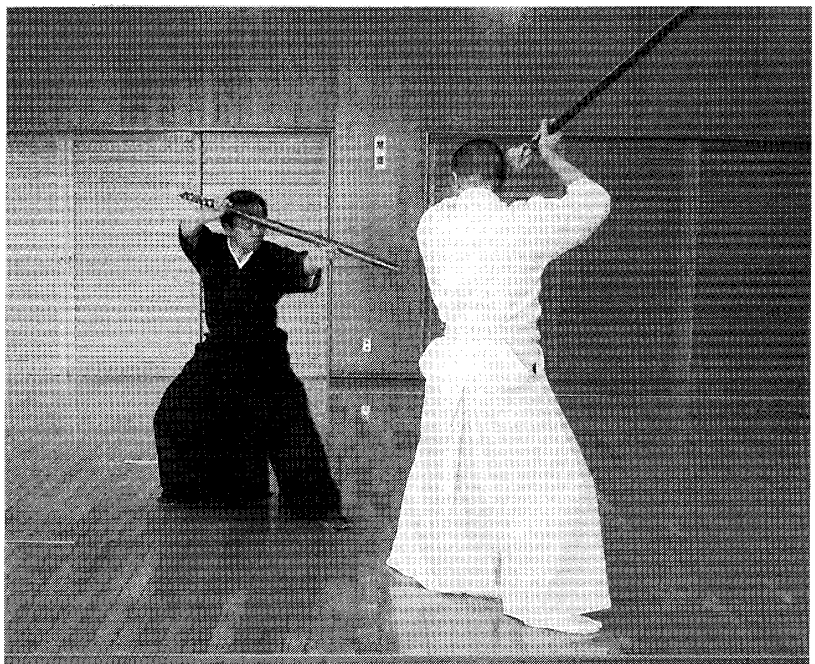
（打）左拳を打っていく。
（使）右片手で太刀を横雷刀のように取り
上げ、



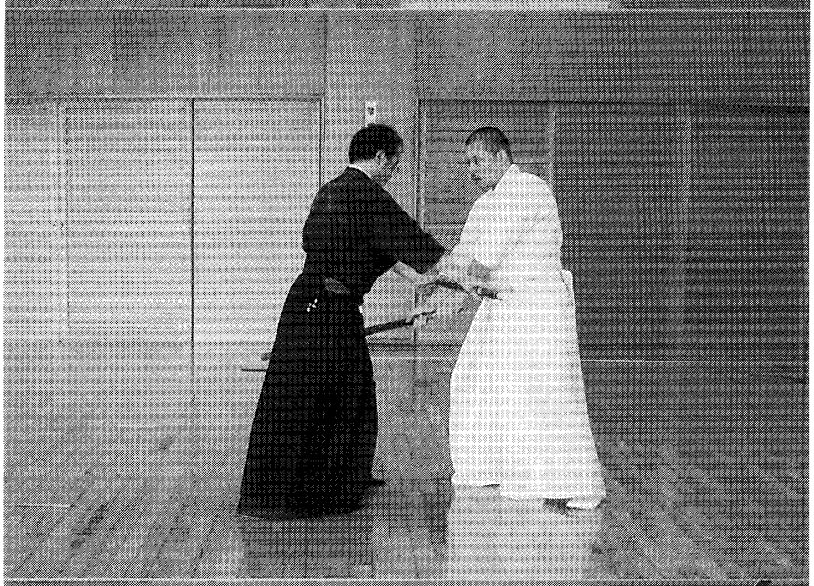
（使）右斜め前に体を移して真直ぐに
柄中（または左拳）を打つ。



(打)撥草に退がる。
(使)太刀を刀棒に取って下から切り上げる勢いを示して左肘を剣先で攻める。
○腰を入れ、両手を伸ばして、自分の座を外さない。



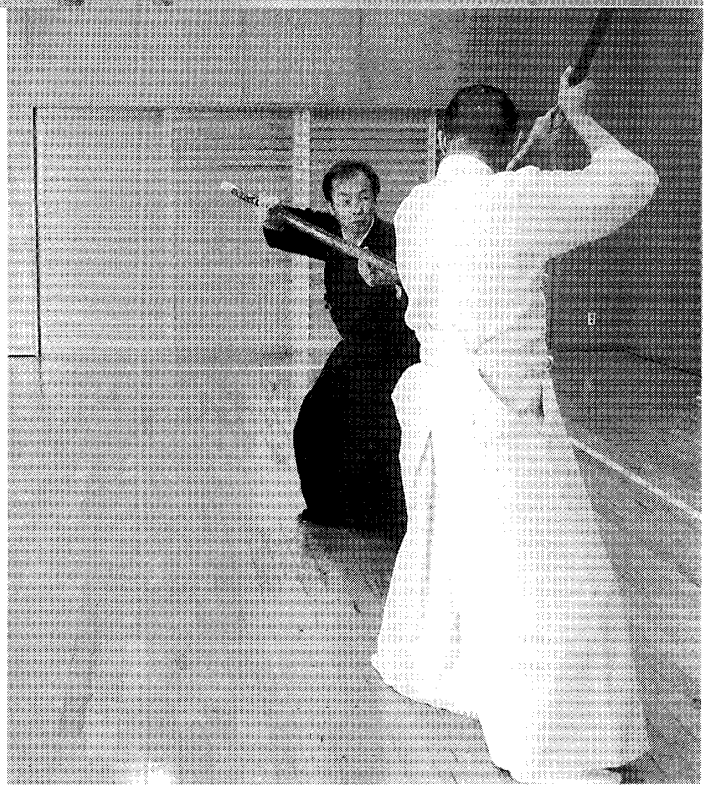
(打)使太刀の剣先を嫌い、使太刀の左に廻って肩を打っていく。
(使)前の左足から前に出て、打太刀の両腕を刀棒の太刀で上からグイと押さえる。
その後、わずかに押さえた力を緩める。



(打)それにつれて大きく使太刀の右に廻って撥草に構える。
(使)刀棒で打太刀の肘を攻める。

○打太刀が動けば使太刀は肘または脇を切り上げることも出来る(勝ち口の一つ)。
○剣先で攻められて堪(たま)らず打ってくるのを後の先で押さえる。
○使太刀のヘソと打太刀のヘソが正対することが大事。

（打）使太刀の左に廻って胴を打っていく。
（使）左足から出て、打太刀の両腕を刀棒の太刀で上から押さえる。



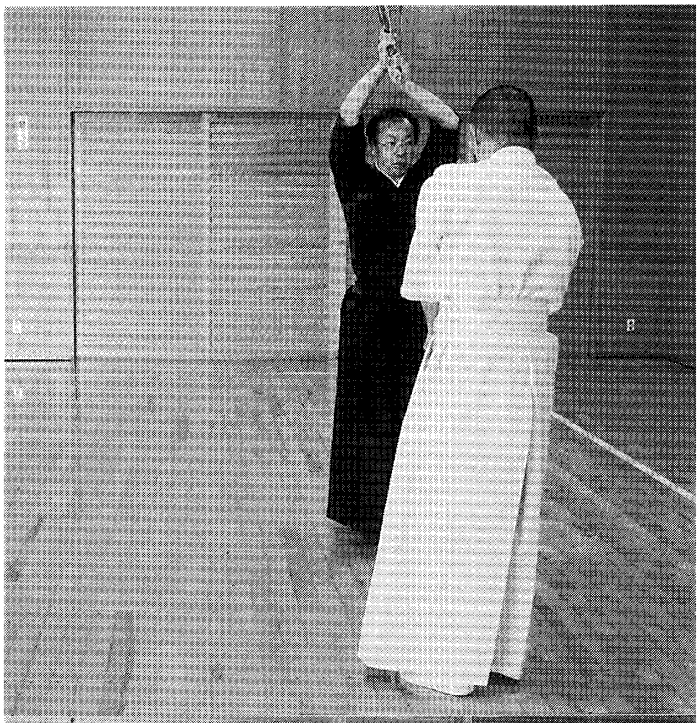
（打）使太刀の右に廻って撥草に構える。
（使）打太刀の肘を攻める。

江戸柳生古目録による使い方

互いに上段の青岸にて序を切りかける。打太刀より進み来たり使太刀の左拳を打つ。使太刀、片手太刀にて上段に外し、打太刀の拳へ真直ぐに切りかける。打太刀、打たんと太刀を上げるところを、（使太刀は）打太刀の左の方へひっさげたる片手に左の手をそえ刀棒となりて詰める。打太刀、右に開いて裏を打つところを、くさりながら廻す廻刀して真直ぐに拳に勝つ。打太刀、また上段にて打たんとする刹那、刀棒にて詰める。打太刀、また裏を打たんとする起こりを、刀棒切先にて押し切り、折り敷くなり。打太刀また同じ。

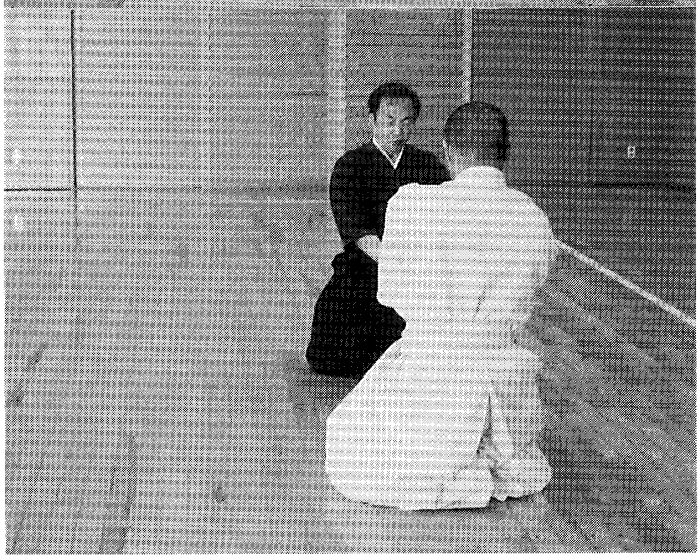
(打)足を打っていく。

(使)太刀を雷刀に取り上げながら前の左足を引いて打太刀の打ちを抜き、



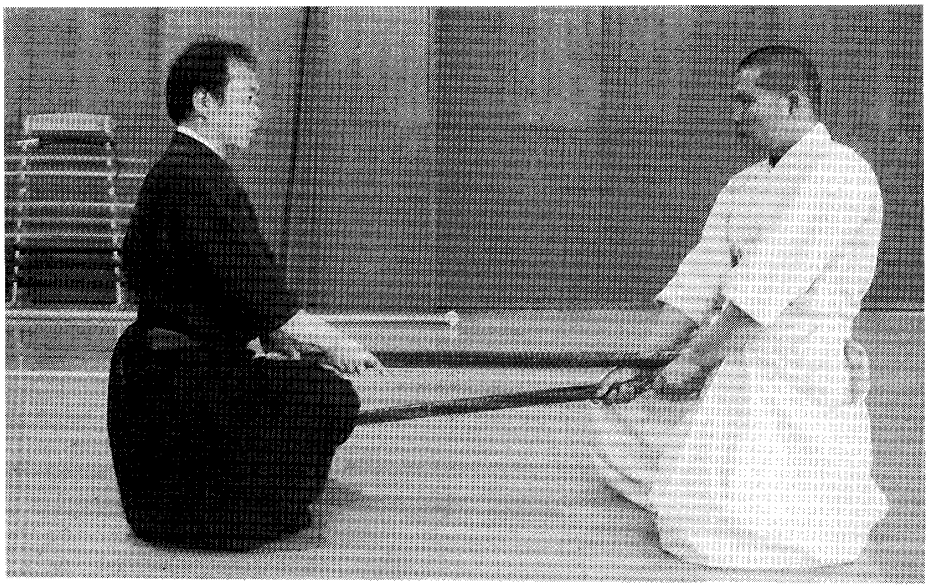
(使)大きく上から両拳を打って折り敷く。

(打)同時に折り敷く。



別の勝ち口

(使)上から両腕を押さえて、打太刀の体をそのまま床まで押し付ける。



上の図を正面から見たところ

「燕飛」講習

「新陰流を哲学する—柳生厳周伝の研究（一）」を刊行以来、著者の主宰する「新陰流稽古『沈龍の会』」には様々な武道家や研究者が、日本だけでなくアメリカや韓国からも訪れるようになった。熱心に学ぶ姿勢がある人には出来る限り稽古の便宜を図るようにしている。

国際武道大学の修士課程を出て早稲田大学の博士課程で東南アジアの武術交流史を研究テーマにしている朴周鳳氏は、国際武道大学の魚住教授を代表とするプロジェクト「東アジアにおける武術の交流と展開」の一員であり、千葉の吉田道場で新陰流を学んでいるが、著者が吉田道場の稽古に顔を出したのが縁で、時々著者の稽古会にも参加して頂いている。

冬休みの休暇で日本に来ていた利梨大学の舞踊学科の学生・李在夏さんは、たまたま著者の稽古会に見学に見えたので稽古に加わっていただいたところ、とても初心者とは思えない身のこなし方をした。厳周伝の特徴は

一、帆かけ舟がするすると波の上を滑るように、足を上げない風帆の位

一、身体の軸を前後左右にぶらさないで腰を垂直に沈める浮沈の位

であるが、李さんは著者の動きを見ただけで、ほとんどそのまま再現してみせた。日本語が十分でないので朴氏に通訳してもらい話を聞いたところ、新陰流（厳周伝）の足腰の動きは韓国の古典舞踊の動きと似ているとのことであった。そこで韓国の古典舞踏の基本を踊ってもらったところ、日本の古典舞踊よりも能の動きに近いように感じられた。

基本は身体の頭のてっぺんから丹田に至る中心軸に呼吸を吐き下ろすことと、踊る際、重心を、中心軸と左右の軸との、三つの軸を移動させることであるとのことで、それも厳周伝の身体操作と似ていると感じた。

それを聞いた著者は、近代化されない以前の足腰の動きは前述の二つであり、したがって厳周伝こそが江戸時代の新陰流であるという著者の主張が補強されたという思いを強くした。

木刀を使っての打ち込みの際にも初めて木刀を握ったと言いながら、太刀筋がしっかりしており、また細く華奢な腕でありながらその打ち込みの力は並の男よりも強かった。打ち込みは腕の力ではなく足腰を使うという加藤館長の言葉の実証のように感じられた。

その後、しばらく稽古を続け、下村先生が来られた際に、稽古をお見せすると、下村先生も動きが正確で綺麗だと感想を述べられ、熱心に教えられた。以下の演武写真はその時のものである。打太刀は「沈龍の会」の指導員の赤羽根大介、術理の韓国語訳と解説は朴氏のものである。

赤羽根大介　　朴周鳳
著者　　李在夏　　下村幸裕先生

카게류(陰流)의 엔비(燕飛)와 야규신카게류

와세다대학대학원 인간과학연구과 박주봉(고무도연구)

「신카게류」(新陰流)에서 전승 되어오고 있는 「엔비」라는 기술은 원래, 일본의 검술유파의 하나인 「카게류」의 검술 기술이다。그것이 카게류로부터 강한 영향을 받아 신카케류를 창시한, 「카미이즈미-이세노카미-히데쯔나」(上泉伊勢守秀網: 1508~1577)에 의해, 신카게류 검술의 근본이 되는 중심 기술로써 전해지게 되었다。

「엔비」의 기술은, 엔비(燕飛)、엔카이(猿回)、야마카게(山陰)、쯔끼카게(月陰)、우라나미(浦波)、우끼후네(浮舟)라는 6본 으로 구성되어 있으며、6본의 기술을 끊임없이 연속적인 동작으로 행하는 형태로 전승되어 왔다。또한 엔비는、전후좌우의 막힘없이 부드럽게 연결되는 움직임과、몸의 회전을 통해 상대방의 공격을 피하고、그 회전의 움직임을 이용해、다시 자신이 공격해 들어가는 기술의 형태를 나타내고 있다。

이러한 엔비의 기술은、카게류로부터 신카게류로 이어지게 되며、그뿐만 아니라 중국의 무예서인 『기효신서』(紀効新書:1584)에 카게류와 엔비의 기명(技名)이 기술(記述)되어 있고、조선시대에 씌여진 『무예도보통지』(武藝圖譜通志: 1790)에는 신카게류의 이름까지 기술되어 있어、카게류와 엔비가 전파된 범위를 짐작케 해준다。그후 신카게류에 전승된 엔비는 신카게류의 안에서도 특히、「야규」(柳生)가에 의해 보존전승되어 오늘에까지 이르고 있다。

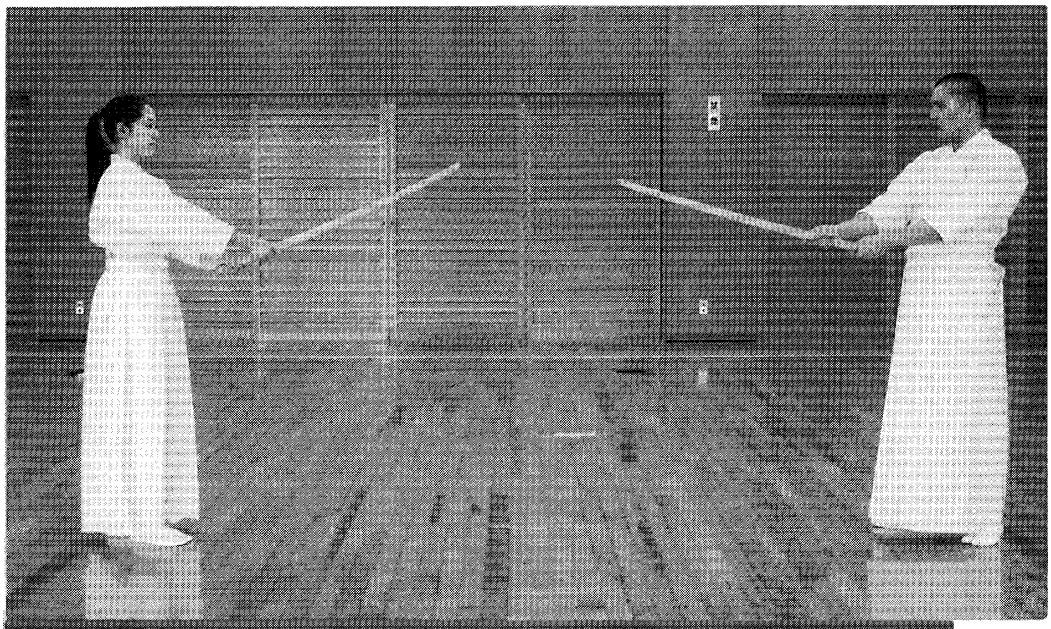
야규가(家)에 전승된 신카게류를 통상、「야규신카게류」(柳生新陰流)라고 부르는 있으며、야규가의 「야규-무네요시」(柳生宗厳)가 카미이즈미로부터 인가(印可)를 받은 이후、그의 아들인 「야규-무네노리」(柳生宗矩)가 도쿠가와(德川)장군가의 병법사범이 되면서부터 더욱 그 명성을 떨치게 되었다。

또한 야규-무네노리는、장군가의 병법사범이면서도 정치가로서의 역량을 발휘해、도쿠가와 장군가의 측근으로써 조선 통신사의 영접등 조선과의 외교관계에도 밀접한 관계를 맺고 있었다。

그밖의 야규가의 문헌에서도、당시 조선인으로 추정되는 인물이 쓴 목록이 전해져오고 있고、그외의 사료(史料)에도 조선인과의 관계를 나타내는 문헌이 보여지고 있어、당시의 야규가와 조선과의 친밀했던 관계를 엿볼 수 있다。

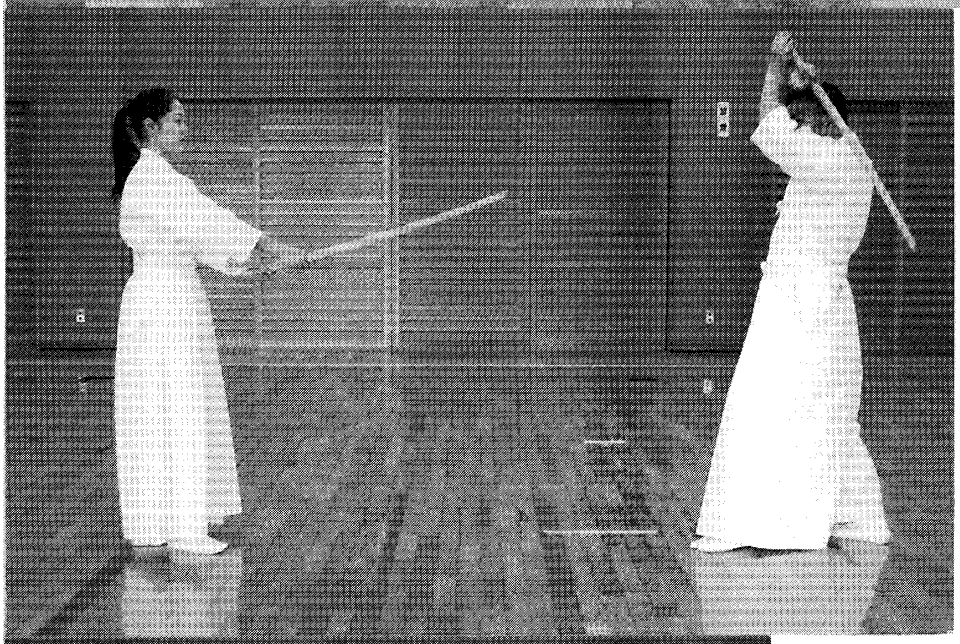
다음의 엔비의 기술을 분석한 사진은、아카바네다이스케(赤羽根大介:신카게류연구회)씨와 이재하(李在夏:이화여자대학 무용학과)씨의 연무(演武)로 이루어졌다。

야규 신카게류(柳生新陰流)『엔비(燕飛)의 형』

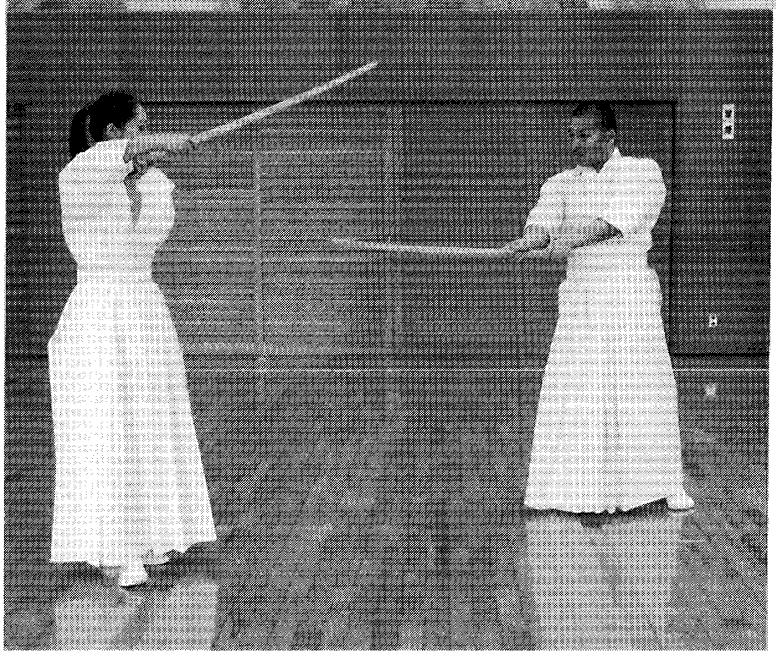


타도(打刀) 칼을 잡은 손을 자신의 왼쪽편 앞으로 비스듬이 내리고, 칼끝은 상대의 얼굴을 겨냥한 상태에서 공격해 들어간다。(=青岸)

사도(使刀) 정(正)중단의 자세를 잡고 상대를 기다린다。



타도(打刀) 상대에게 근접하여 왼발을 내딛으며, 칼을 머리위에서 왼쪽에서 오른쪽으로 돌리고, 다시 오른발을 오른쪽 앞으로 비스듬이 (45도) 내딛으며 공격거리 안으로 들어가는 동시에,



사도(使刀) (後)손에 맞기 직전에 오른발을 오른쪽 뒤로 비스듬이 (45도) 빼며, 칼을 오른쪽 어깨 위로 비스듬이 올려 공격을 피한다。(왼쪽팔꿈치는 몸에 밀착 시키고, 칼날은 밑을 향하며 손은 귀의 높이)

타도(打刀) (先)왼손을 천천이 내려 친다。

사도(使刀) 무릎을 부드럽게 굽혀가며, 오른쪽뒤로 비스듬이(45도) 물러난다。

타도(打刀) (後)칼을 올리면서 오른쪽뒤로, 비스듬이 물러나며,

사도(使刀) (先)칼을 중단으로 되돌리며, 칼끝으로 타도의 얼굴을 겨냥하여 찔러 들어가고,
○칼끝으로 공격해 들어가는 기세。

타도(打刀) (後)칼을 오른쪽 어깨위로 치켜 올린다(=撥草)。

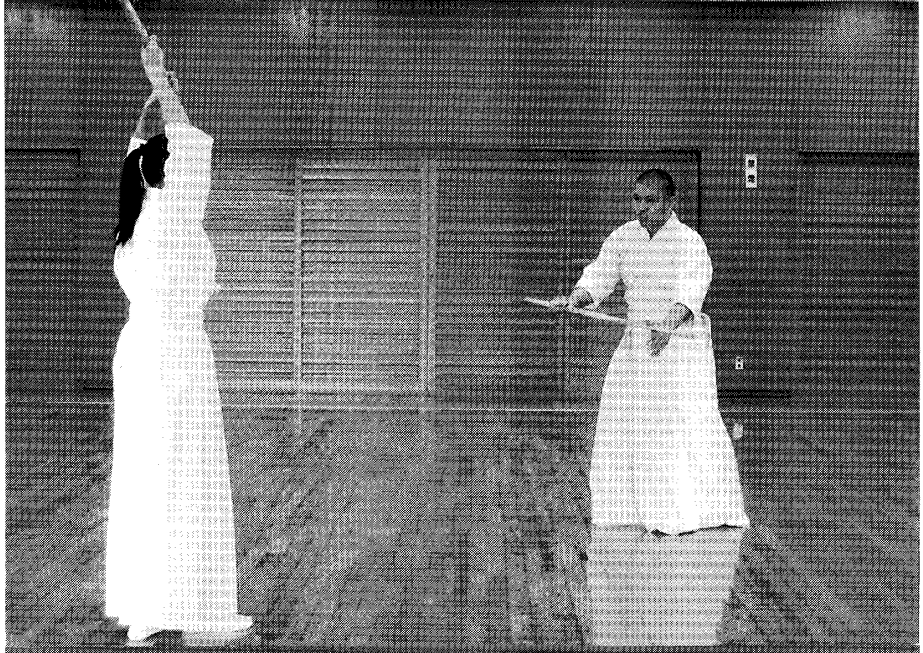
사도(使刀) (先)타도가 칼을 올리는 것과 동시에, 칼날이 위로 향하도록 칼을 오른방향으로 비틀며, 칼끝은 상대의 오른쪽 눈을 겨냥해 들어간다。

타도(打刀) 기회를 봐서 양발의 위치를 바꿔가며, 한손으로 사도의 왼쪽손을 내려친다。

사도(使刀) 양발의 위치를 바꿔가며 무릎을 가라앉히고, 그와 동시에 비틀어 올린 칼을 되돌려가며, 왼쪽 칼등으로 타도의 칼을 내려친다。
○칼끝은 올리지 않으며, 무릎을 굽히고 허리를 가라앉히며 내려친다。
○발의 위치는 완전히 바뀌지만, 허리만는 같은 위치에서 가라앉는다。

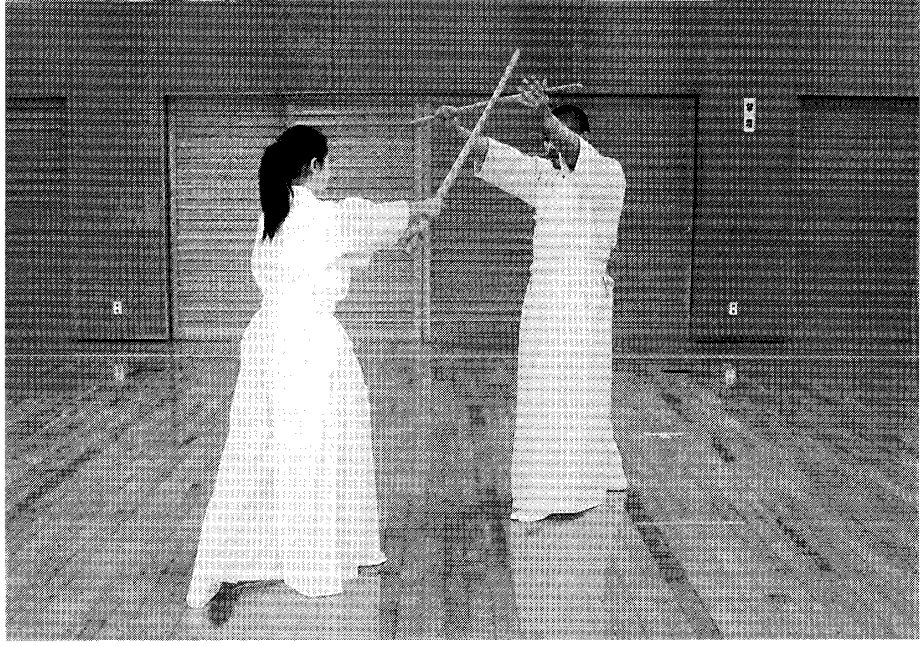
타도(打刀) 그대로 칼끝을 왼쪽뒤로 돌려 왼손으로 칼등을 받친다。

사도(使刀) 무릎을 굽힌 상태로 뒤로 물러나며, 다 물러난 후 칼을 머리위로 치켜올린다(=雷刀)。



타도(打刀) (後)칼을 받쳐 올리며 사도의 칼을 막는다(=刀捧)。그리고, 곧바로 왼손을 미끄러지듯 이동시켜, 타도의 칼을 칼등에서부터 잡으려 한다。

사도(使刀) (先)타도의 비어있는 머리를 치며 들어간다。



타도(打刀) (後)받쳐 올렸던 칼을 내리면서, 칼이 오른쪽 겨드랑이나 가슴의 높이에 오도록 자세를 잡는다。

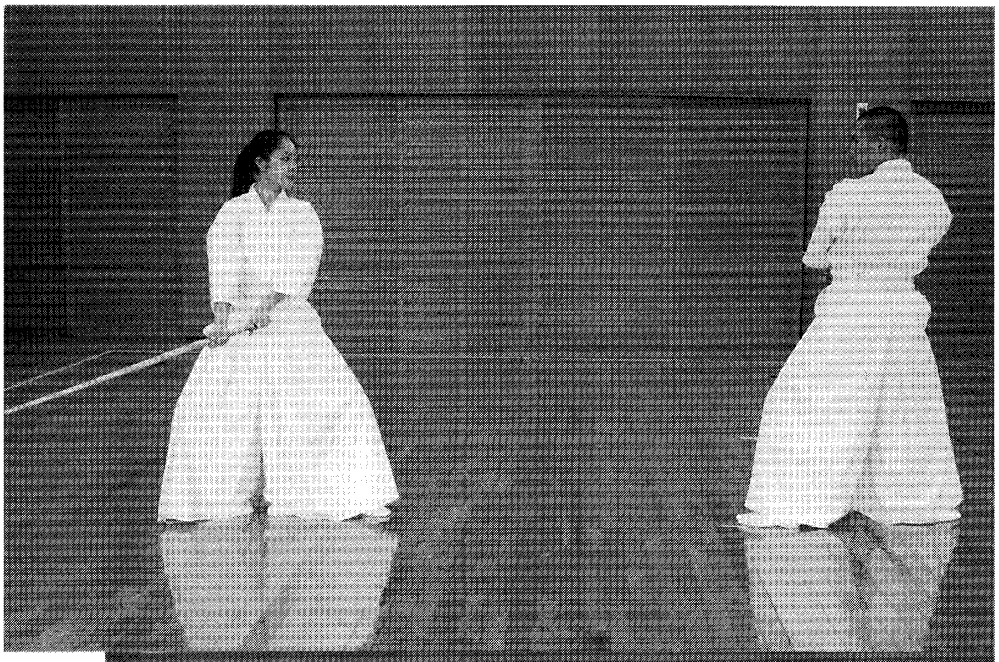
사도(使刀) (先)틈을 두지않고 무릎을 부드럽게 굽히면서 자신의 손을 오른방향으로 비틀며 타도의 네손가락을 핑-하고 베어 올리며, (칼날은 위를 향한다)무릎을 굽힌 상태 그대로 뒤로 물러난다。

타도(打刀) 칼을 머리위에서, 왼쪽에서 오른방향으로 돌리며 몸을 중심선으로 이동시키고, 칼을 머리 위로 치켜 올린다(=雷刀)。

사도(使刀) 타도와 동시에 칼을 왼쪽에서 오른방향으로 돌려가며 중심선으로 돌아오고, 칼을 머리위로 치켜 올린다(=雷刀)。

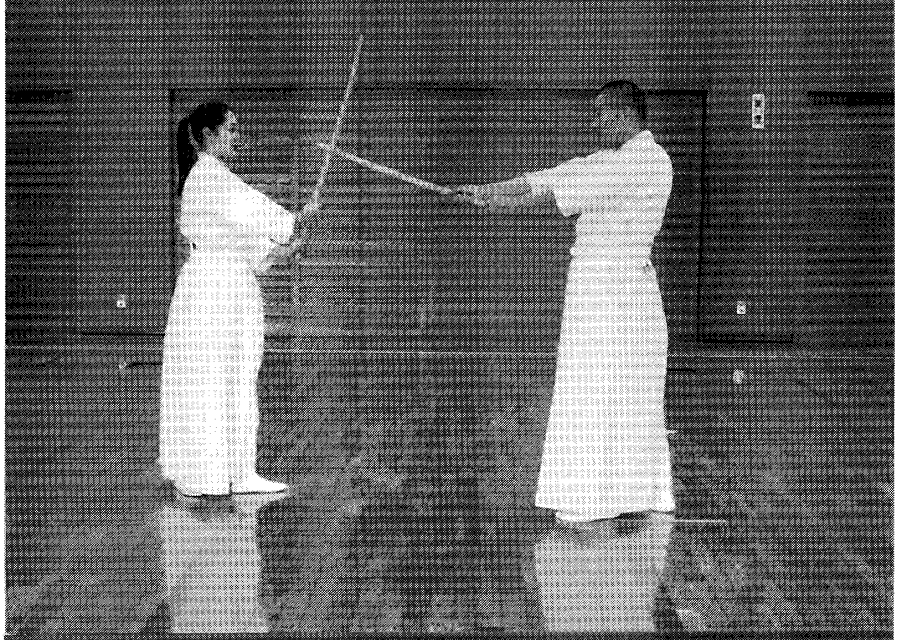
서로 상대의 정면을 내려친다。

타도(打刀) 양발의 위치를 바꿔 오른발을 약간 뒤로 빼 몸의 옆면이 상대를 향하게 하며, 칼은 뒤로 돌려 칼끝을 바깥쪽으로 45도정도 벌리고 45도정도 밑으로 내린다。(칼손잡이는 몸의 중심에 둔다)(=車構)



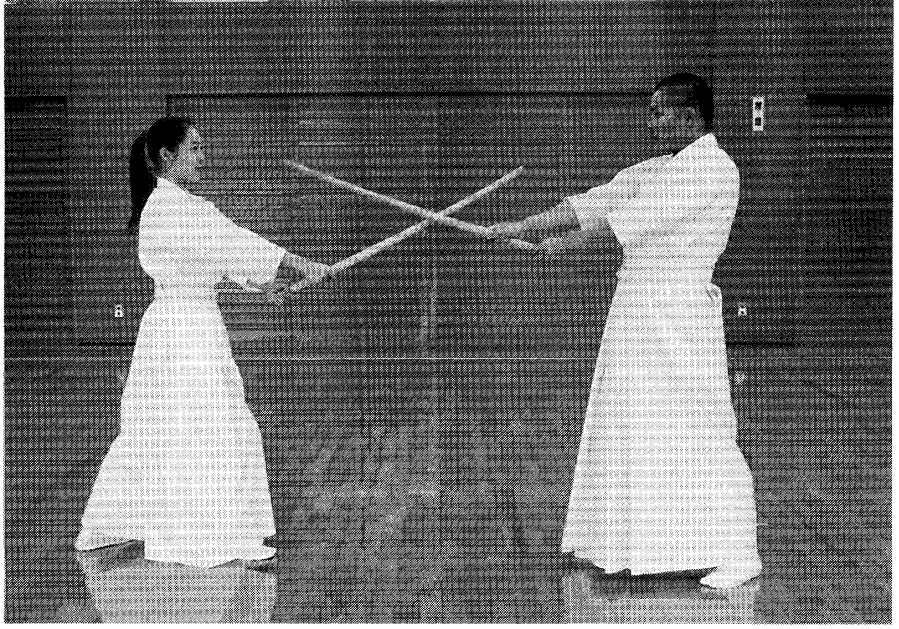
사도(使刀) 동시에 타도와 같은 자세를 잡는다(=車構)。

타도(打刀) 앞의 왼발을 약간 오른쪽 앞으로 내딛으며, 사도의 어깨를 내려친다。



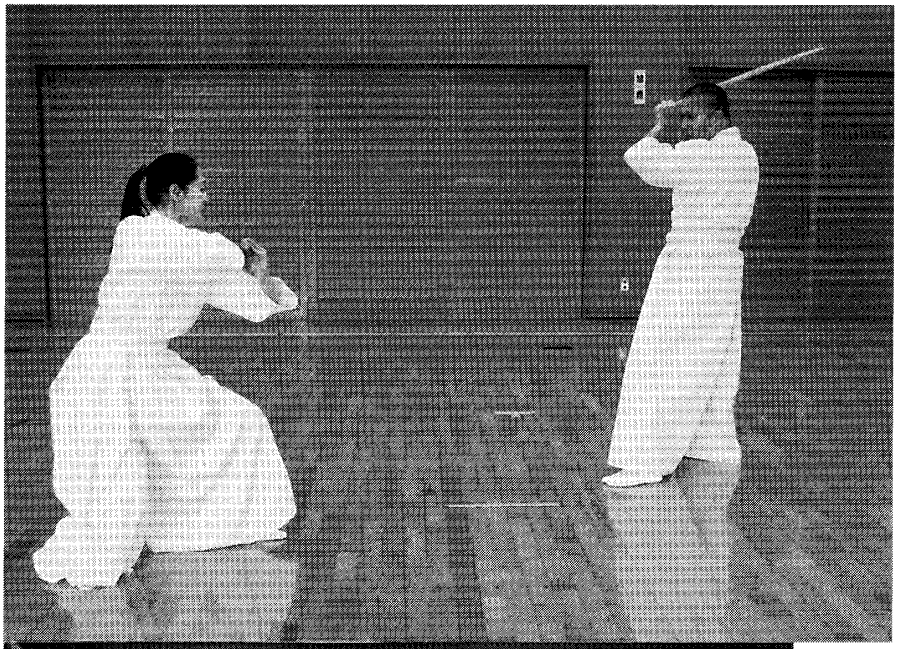
사도(使刀) 몸을 약간 왼쪽으로 이동시키며 칼을 왼쪽 옆구리앞에 세워 타도의 공격을 막고、○그대로 칼을 세울뿐 손을 올리지는 않으며、단지 막기만 할뿐 받아 치지 않는다。(중심은 몸의 왼축)

타도(打刀) 몸을 다시 약간 왼쪽으로 이동시키며、칼을 들어올려 사도의 오른손을 내려친다。



사도(使刀) 그와 동시에 오른발을 오른쪽 앞으로 비스듬이 내딛여 몸을 오른쪽으로 이동시키며、타도의 오른손을 내려친다。(중심은 오른축)

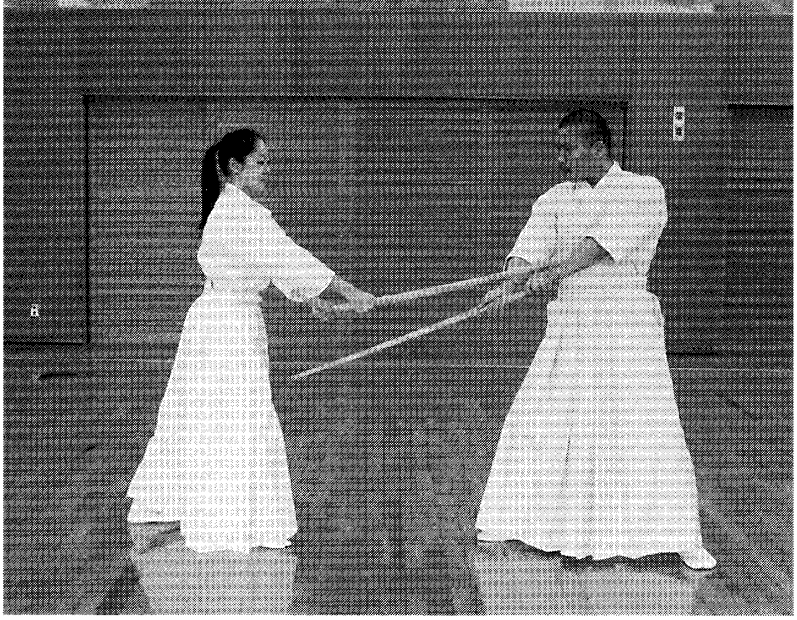
타도(打刀) (後)공격당한 뒤, 칼을 오른쪽 어깨위로 올리며(=撥草), 오른쪽 뒤로 비스듬이 물러난다。



사도(使刀) (先)왼발을 내딛으며 몸을 똑바로 상대를 향하게 하며, 칼을 위에서 아래로 돌려 칼날이 위로 향하게 하고, 칼로 자신의 무릎을 방어해가며 타도의 왼쪽 겨드랑이를 베려한다。

타도(打刀) 앞에 나와 있는 사도의 왼쪽 무릎을 내려친다。

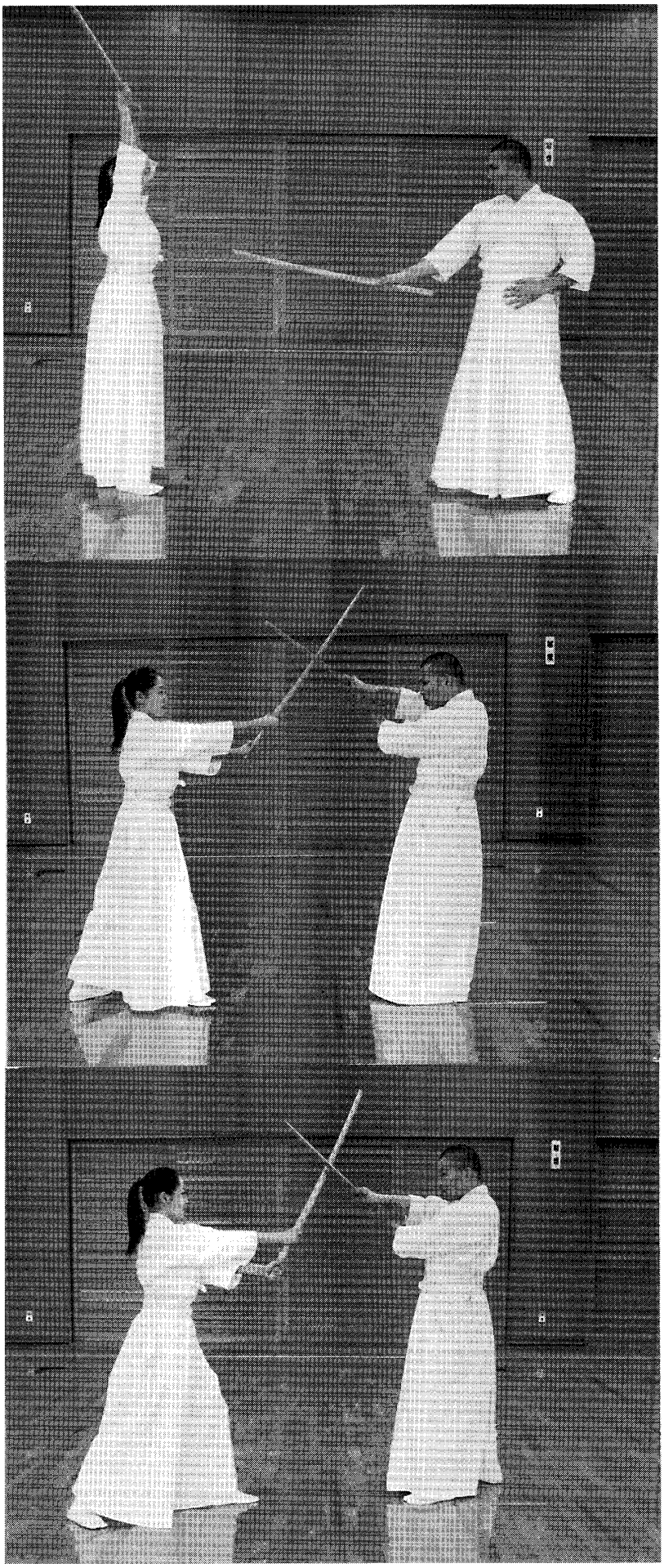
사도(使刀) 칼을 반대로 되돌리며, 칼이 비스듬하도록 머리위로 치켜올리며(=橫雷刀), 그와 동시에 왼발을 왼쪽뒤로 비스듬이 빼면서 공격을 피하고,



사도(使刀) 다시 정면으로 돌아오며 타도의 양손을 내려친다。

타도(打刀) (後)뒤로 물러나는 사도의 몸의 중심을, 한손으로 칼을 안에서 밖으로 돌려가며 공격한다。

사도(使刀) (先)타도의 양손을 누름과 동시에 칼을 머리위로 비스듬이 치켜 올리며(=横雷刀) 뒤로 한걸음 물러나고, 타도가 칼을 한손으로 돌리며 공격하는것에 따라, 한걸음 더욱 뒤로 물러난다。(오른발은 그대로 왼발부터 두걸음 물러난다)



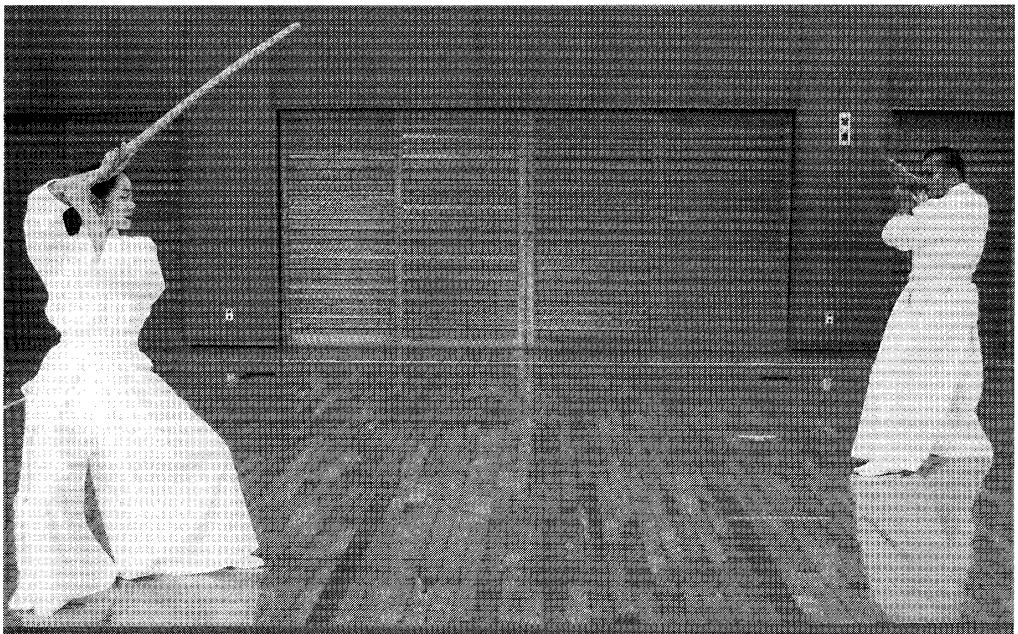
타도(打刀) 비어있는 사도의 오른쪽 겨드랑이를 겨냥해, 밑에서부터 손을 비틀며 베어올린다。(칼날은 위로)

사도(使刀) 베어 올라오는 타도의 칼을, 칼을 비스듬이 올린 자세에서 그대로 칼의 오른쪽면으로 가볍게 내려친다。

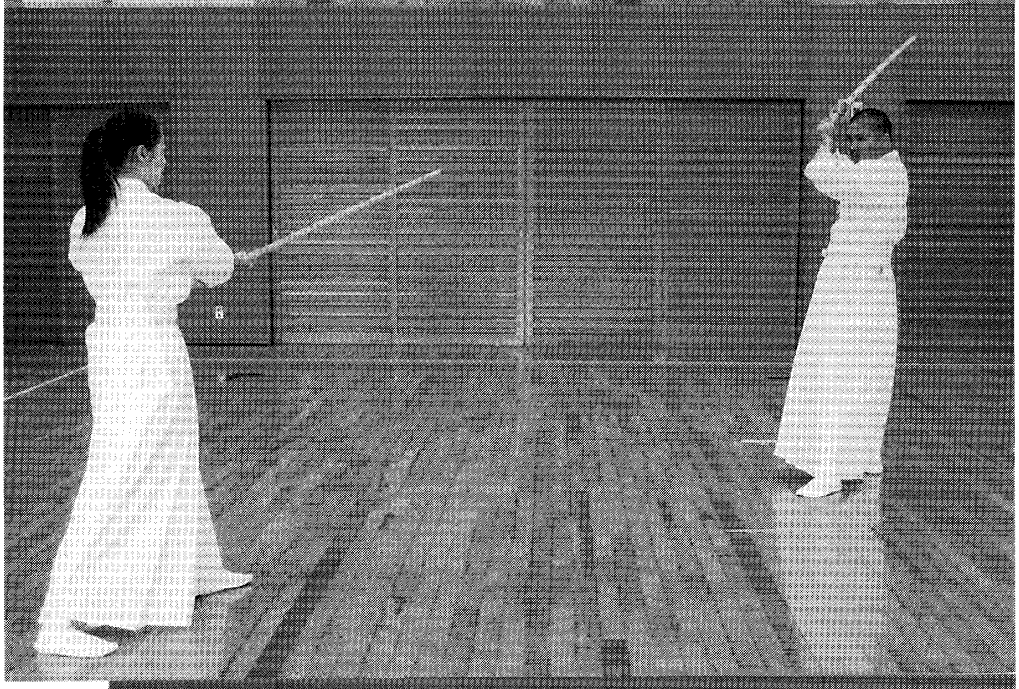
○실제로는 오른손을 벤다。

사도(使刀) 그와 동시에 발의 위치를 바꿔가며 정면에서부터 타도의 칼의 중심을 재빠르게 친다。

○실제로는 왼손을 벤다。

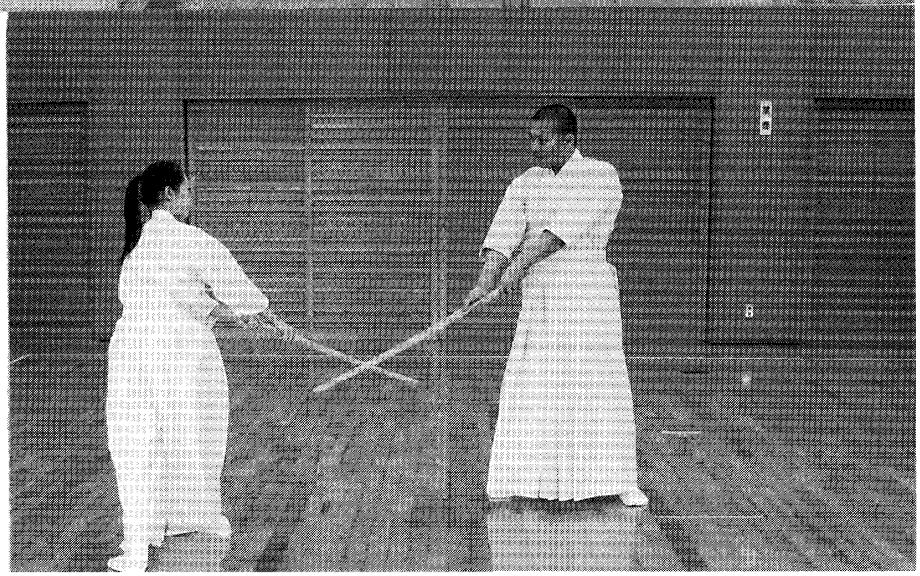


칼을 서로 상대를 향하도록 오른쪽 어깨위로 비스듬이 올리며, 오른쪽 뒤로 비스듬이 물러난다。



타도(打刀) 칼을 오른쪽 어깨위로 올리며(=撥草), 사도의 왼쪽 옆면이나 왼쪽 팔꿈치를 공격하려는 기세를 보인다。

사도(使刀) 그에 따라 앞의 왼발부터 상대를 향하게 하며, 칼을 정면으로 되돌리고, 칼끝은 상대의 왼쪽 팔꿈치를 겨냥한다。

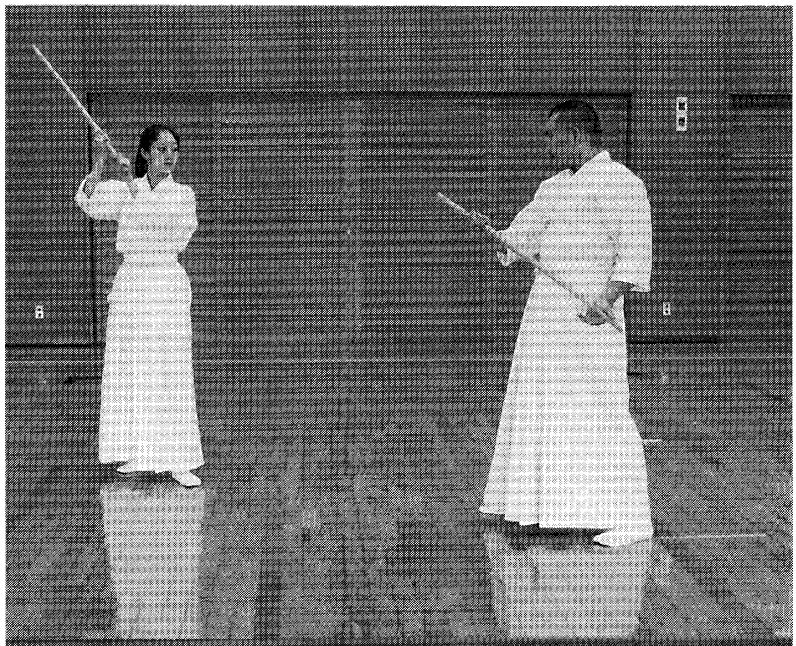


타도(打刀) 왼손을 내려친다。

사도(使刀) 오른발을 타도의 오른발 앞쪽으로 비스듬이 크게 내딛으며, 칼을 돌려쳐 타도의 칼을 떨어뜨리고, ○칼끝을 올리지 않고 내려친다。

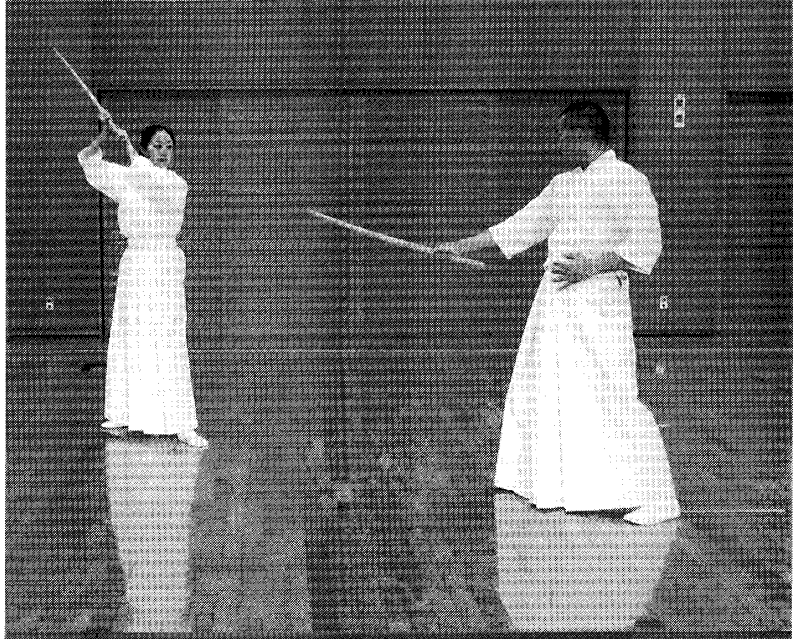
타도(打刀) 사도에게 공격당해 칼이 떨어지자마자, 칼을 오른손으로 작게 돌려, (안에서 밖으로)

사도(使刀) 그대로 왼발을 타도의 오른쪽 45도 앞으로 크게 내딛으며, 오른발은 크게 뒤로 돌려 상대방을 향하게 하고, 오른쪽 어깨 위로 칼을 치켜 올린다(=撥草)。



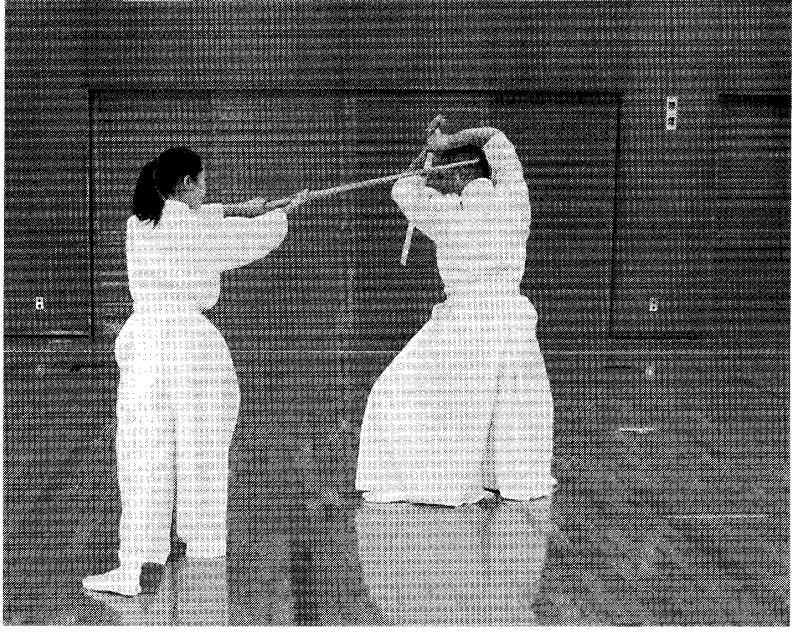
타도(打刀) 오른쪽 어깨위로 올린 사도의 왼쪽 팔꿈치를 공격한다。

사도(使刀) 어깨위로 올린 칼을 더욱 높이 올리며 뒤로 물러난다。



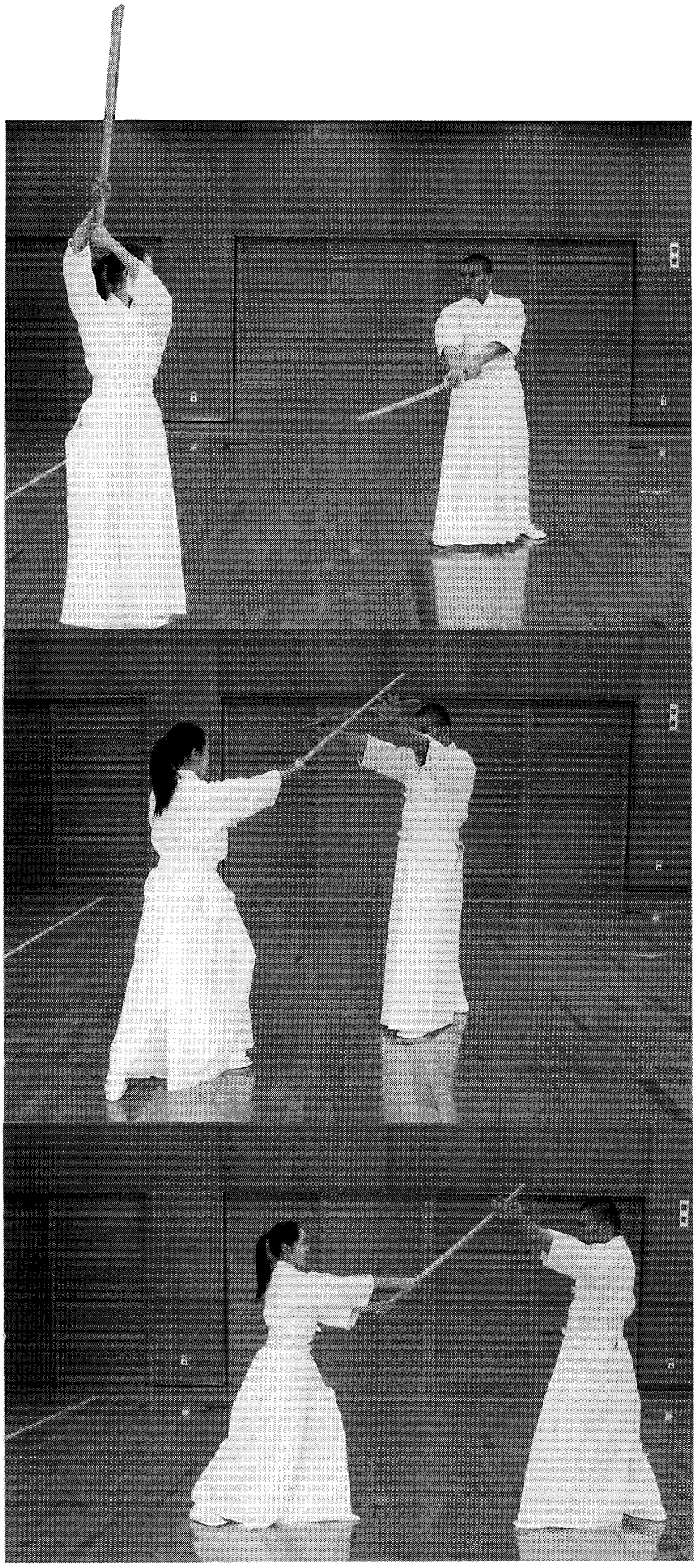
타도(打刀) 타도는 사도의 비어있는 오른쪽 겨드랑이 밑을, 몸을 웅크리며 베어 올리려 하지만, 사도가 비어있는 타도의 왼쪽 어깨를 치고 들어오기 때문에, 칼을 그대로 왼쪽 어깨뒤로 얹어, 사도의 공격을 막는다。

사도(使刀) 오른발을 오른쪽 옆으로 크게 내딛으며 타도의 비어있는 왼쪽 어깨를 치고 들어간다。



타도(打刀) 사도의 왼쪽으로 크게 돌아 들어가며, 왼쪽 어깨 너머로 보이는 사도의 손을 내려친다。

사도(使刀) 몸과 칼을 우회전 시키며 타도의 칼을 피한다。
○양손을 비틀며 똑바로 올린다。
○칼끝은 머리 위로 높게 올린다。
○왼발끝을 타도의 오른발끝과 일직선상에 둔다。



타도(打刀) (後)사도의 왼쪽 겨드랑이 밑을 베어올리려 하지만, 사도가 정면으로 치고 들어오기 때문에, 칼을 왼손으로 받쳐 올리며 막는다(=刀捧)。

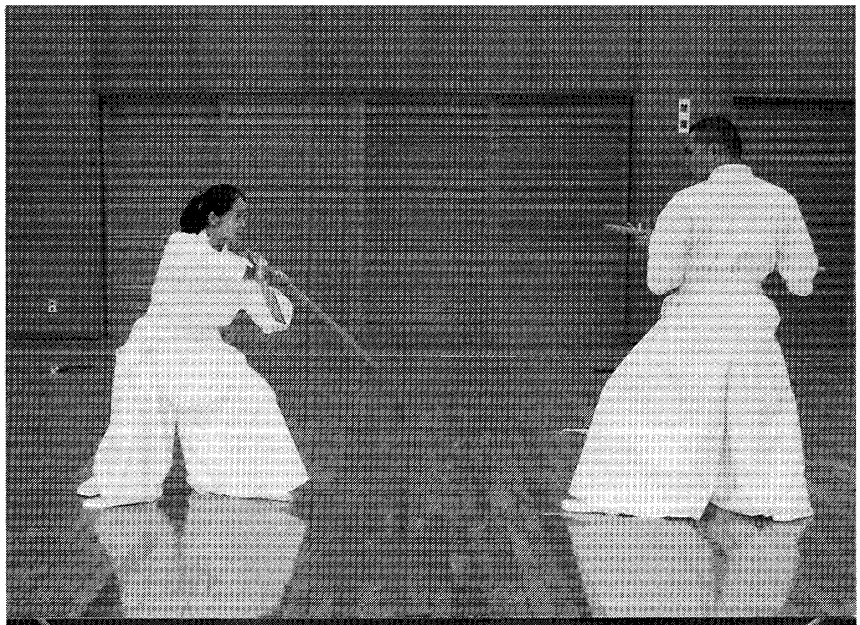
사도(使刀) (先)몸을 타도쪽으로 향하면서 밑에서부터 베어올라오는 타도의 칼을, 칼의 오른쪽 옆면으로 가볍게 치며,

타도(打刀) (後)뒤로 물러나며 두번째의 공격을 막아낸다 (=刀捧)。

사도(使刀) (先)재빠르게 발을 바꿔 정면으로 돌아오며, 크게 칼의 중심을 내려친다。

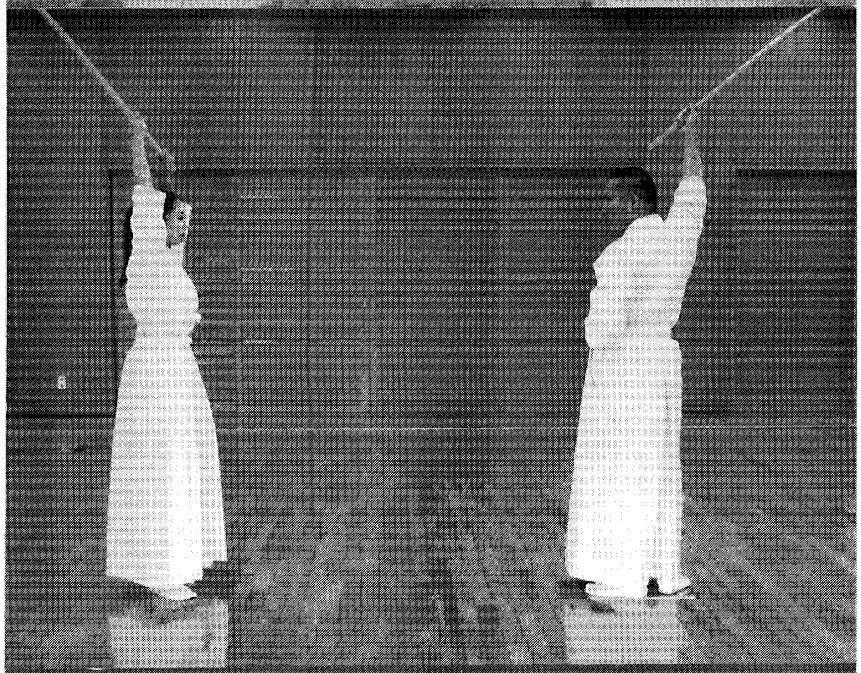
타도(打刀) (後)오른발을 뒤로 빼, 몸의 왼쪽면이 사도를 향하게 하고, 칼은 가슴앞에 위치시킨다.

사도(使刀) (先)앞쪽으로 몸을 웅크리며 칼을 위에서 아래로 돌려 하단에 위치시키고, 타도의 공격해 들어오려는 오른쪽 겨드랑이 밑을, 베어올리려는 기세를 나타낸다.



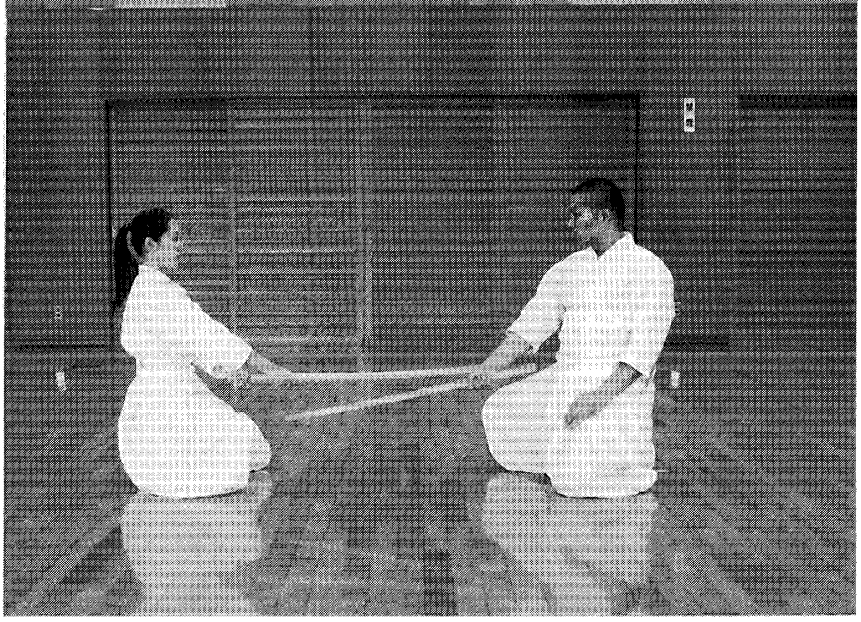
타도(打刀) 한손으로 칼을 올려 사도의 목을 내려친다.

사도(使刀) 칼을 반대로 돌려 머리 위로 크게 치켜 올리며(=雷刀), 왼발을 뒤로 빼어 타도의 칼을 피한다. ○왼발안쪽의 중심 부분에, 오른발의 뒷꿈치를 붙이는게 중요.



타도(打刀) (後)공격을 당함과 동시에 허리를 가라앉히고, 왼무릎을 꿇고 오른무릎을 세운다.

사도(使刀) (先)단숨에 허리를 가라앉혀 주저 앉으며, 위에서부터 타도의 칼을 내려친다. 왼무릎을 꿇고 오른무릎을 세운다.



資料編一

以上、江戸時代の刀法を伝える神戸先生直伝の「柳生厳周伝」を見てきたので、ここで神戸先生のお書きになった『柳生の芸能』（昭和四十八年）と、神戸先生が昭和五十五年に書かれ、平成十六年に加藤館長によって出版された『月の抄と尾張柳生』のうち、本著で取り扱った「燕飛」「九箇の太刀」「天狗抄」の刀法に関する術理の部分を取り出して見たい。

「燕飛」は『柳生の芸能』には「江戸柳生古目録口伝書による使い方」と尾張柳生・柳生利方の「打太刀目録」が載せられて詳しい解説がついている。「打太刀目録」は『月の抄と尾張柳生』でも論じられているが、原文の書き下しはされていない。したがって原文の書き下しは『柳生の芸能』に従った。しかし「燕飛」の用語の解説は『月の抄と尾張柳生』から引用した。同書には長岡房成「新陰流兵法口伝書外伝」を引用した「連也翁ならびに十兵衛子時代の使い方」が記載されているので、これも載せた。

「九箇の太刀」は『柳生の芸能』の「時代別三学の使い方　流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方」、「江戸柳生古目録口伝書による使い方」、「打太刀目録」の三つを記載した。「打太刀目録」の「解説」は両書とも収録した。

「天狗抄」は『柳生の芸能』の「江戸柳生古目録口伝書による使い方」を最初に置いた。『柳生の芸能』『月の抄と尾張柳生』両方に「打太刀目録」の書き下し文が記載されており、大略同じ内容であるが、『柳生の芸能』に従った。「解説」は両書とも収録した。両書共、校正が充分でないので分かりやすく改めたが、私の誤解もあると思う。

以上の資料は必ずしも春風館道場で現在遣われているものと同じではないが、比較研究は今後の課題である。

燕　飛

燕飛は最後まで続け遣いであるが、一応、江戸柳生では九個、尾張柳生では六個の勢法に分かれている。しかし内容はほとんど変わらない。

江戸柳生古目録口伝書による使い方（「柳生の芸能」）

燕　飛

使太刀　中段、向構え。

打太刀　相構え、少しく青岸なり。

右足を進め、巻きかけて使太刀の拳を打つ。

使太刀　右の足を一足引き、左足を進め、太刀を右上に外す。

打太刀　遠く右足を後の右に引いて身を移し、撥草に構ゆ。

使太刀　右足を前の左に移し、左足を右に移し、身を転じて切先を打太刀の肘に付く。

打太刀　左右、足を踏み替え、使太刀の脇を払う。

使太刀　右の足を引きとりざまに、打太刀より切りかけた太刀を打ち落して遠く退き、左脇を前にす。

猿　廻

使太刀　それより刀を挙げ右足を進めて、打太刀の刀棒に取りたる左手を打つ。

打太刀　左手を外して刀棒に受け止め、左手の指にて刀の背を押さゆ。

使太刀　左右、足を踏み替え、手をねじりて霞（かす）む。

打太刀　それより肩或いは上にあげて（挙げた？）使太刀の肘を打つ。

使太刀　太刀を巻き返して打太刀の刀を支え、手に勝つ。

月影

使太刀　車の太刀に引きとり構える。

打太刀　車に構え、一足踏み出し、使太刀の左肩をかけて切る。

使太刀　すぐに打太刀の拳にかけて打つ。

山陰

使太刀　拳を見せかける。

打太刀　その拳を、足を立て替えて打つ。

使太刀　足を立て替えて打太刀の右の拳を打つ。

浦波

使太刀　手をもじりて逆の下段となる。

打太刀　撥草、右脇構えより使太刀の膝を打つ。

使太刀　手足ともに立てかえて打太刀の両腕に勝つ。

浮舟

打太刀　巻きかけて使太刀の拳を打つ。

使太刀　横の上段に外す。

打太刀　手をもじりて、さし上げおる。

使太刀　外一つ、内を一つ打つ（外は右拳、内は左拳）

打太刀　打たれて足を後へ一足、逆中段に引き、脇構えとなる。

使太刀　左足前、順青岸に付ける。

切甲

打太刀　使太刀の青岸に付けたる拳を、左足を引き、使太刀の左拳を打つ。

使太刀　右足を前にし、打太刀の太刀を打落とす。

打太刀　太刀を巻き返して、使太刀の拳を打つ。

使太刀　右肩上に高く外す。

打太刀　切甲にとり入らんとす。

使太刀　打太刀の右に変わり、柄の内を打つ。

刀棒

打太刀　使太刀の肘を払う。

使太刀　左足を前にして、手をもじり高く外す。

打太刀　刀棒に入らんとす。

使太刀　打太刀の両拳を打ち、左足を入れ、手をもじり下段に構ゆ。

打太刀　片手刀を肩より使太刀の膝を払う。

使太刀　上太刀になるよう大きく巻きかけ、打太刀の拳を十文字と打ち、折り敷く。

打太刀目録（「柳生の芸能」）

燕飛

構え中段なり。（打太刀、順の城郭勢　使太刀、正中段）

打太刀　魔の太刀を仕かける。

使太刀　三つの拍子に外す。

打太刀　撥草（はっそう）（雷刀を直す）にかぶり、左の足を踏み込む。

使太刀　打太刀（使方を直す）の二の腕に付ける。

打太刀　使太刀の肘より柄中をかけて引き払い截りに切る。

使太刀　打ち捨てに相架け、そのまま真っ向を打つ。

打太刀　刀棒にて受け合わせ取る。

使太刀　引き切りて霞（かす）む。

打太刀　手の内引き切られ、引き取り、右肩に横雷刀を片手太刀になし、構ゆ。使太刀の左の肩頭を手高に切る。

使太刀　すなわち切り合わす。

猿　廻

使太刀　少しもじる様にして車の構えに直す。
打太刀　同前に直し、左肩を切る。
使太刀　相懸かる。
打太刀　右の足を踏み出し、また切る。
使太刀　抜き越し、打太刀の右の腕へ勝つ。
打太刀　引き取り、右の肩に払いの構えに直す。

山　陰

使太刀　中下段の間にもじり、打太刀の膝通りに付ける。
打太刀　太刀の中より使太刀の膝通りを払い切る。
使太刀　引き越して打太刀の両腕を勝つ。

月　影

使太刀　引き合わせ下がりもじる。
打太刀　魔の太刀を仕懸く。
使太刀　高く頭の上に切先を右にし、横雷刀に構う。
打太刀　折甲に構え、左の足を踏み出し、折甲の両手の間より見る。
使太刀　打太刀の両腕を上よりチャンチャンと切る。
打太刀　即ち引き切る様にして逆の中段に位を直す。
使太刀　同じ構えになる。
打太刀　雷刀に被り踏み込む。
使太刀　二の腕を切る。

浦　波

打太刀　引き払い切る。
使太刀　打太刀の肩肘より右拳を掛け、ヒッシと切る。息。
打太刀　両膝をえまし足を立て替え下りもじるを魔の太刀を仕懸る。
使太刀　いかにも高く、右の肩頭に太刀を揚げる。（この行欠く）
打太刀　折甲となり左の肩頭に被り、左の足を踏み出す。
使太刀　チンと打ちて右足を角へ引き開く。
打太刀　払い切る。
使太刀　高く霞む。

浮　舟

打太刀　左身にて刀棒に取る。
使太刀　刀棒の中取りの先の手を打って、右の手首に移る。
打太刀の拳の下より揚げるようにもじり、魔の太刀にて合し勝ち終わる。

右、燕飛は、初・破・急、三段の習いこれあるなり。惣じて打太刀より仕懸くる法なり。声も三度あるいは五度なるものなり。打太刀より懸かるなり。初は、身はもちろん心意ともに鎮（しずか）にして、破は、心意ともに浮き立ち、体をもまずして心の意を急にすること肝要なり。これは上泉孫四郎方、如雲斎の前にて伝授なり。如雲斎の挨拶、能く訓（おし）え給わるべし。よく習い覚え申すべき由とのことなり。

術語の慣例（「月の抄と尾張柳生」）

燕飛に雷刀とあるは、皆、撥草のことである。この時代は戦国の世なれば、後に使う直上の雷刀は少なく、これは十兵衛子・連也子の時代より盛んになったと云われておる。

打捨てに相懸、これは敵の拳を打落とすことである。それが太刀と太刀と相懸かりたるところで、昨今、相かけといえば、受けることばかりと思う

は狭き考えである。太刀と太刀と相懸かること、また張り止むるも相かけることである。

刀棒、これは太刀を中取りして受けるを云う。すなわち刀の背を掌にて受け、刀を捧げる形に似たるを以て刀棒と名付ける。

引切りて霞む、これは手をもじり刃を上にし、敵の手の内を引き切りて別れたるまゝなるを霞むという。太刀先を高くして霞の太刀となることではない。かえって太刀先は少し低き方である。

引き取り、右の肩に横雷刀を片手太刀になり構え、これはやはり刀棒のまゝ引き取りたる形である。先き手の指を切られたるゆえ、片手太刀となることではない。長短一味の打太刀、下段より取りかけ打つを、上段にして身に争うと書いてあるのと同じ類のものである。

猿回の初め、少しもじる様にしてとは、刃を順に少しもじる様にすることである。これは、ただちに車になるときは、敵よりそのまゝ拳を打つ間（非）あるゆえに、拳を少し左に向けて防ぎ、少し引て、それより車に直すものとする。

月影の初め、浦波の打ち合わせも皆これに同じ、拳をもじることではない。刀を順にもじる意である。

猿回の相懸けの相懸けは、敵の拳をはすに切る心持である。これ、刀中にて太刀と太刀と相懸かりたる処である。

月影の打太刀、引き切る様にし中段に位を直すとは、打たるゝ拳を外さんと、右の脇に引きおろし、身を少し引き、逆の中段にしたのである。使太刀も同じ構えになるは、これも逆の中段にそのまゝなることである。始めの三つの拍子に外したる形に似て、少し低きなり。また、位をなおすとは違うなり。位は内、構えは外のことなり。ゆえに今は打太刀、中段に構えず、直ちに身を少し引き撥草にあぐるものとす。使太刀もただ、位をとるばかりなり。これは破の拍子になってから、またゆるむがゆえに構えは直さざるなり。

またここに**雷刀**とあるも撥草のことなり。上泉子の図にて見るべし。浦波のうちに両膝をえますとあるは、春（厳春）先生いわく、膝に力をとることと言えり。この心よし。膝を張りすぎることは好ましくない。

高く霞むと言うは、右の肩の上に高く拳をもじることなり。霞の太刀とは違うなり。霞の太刀とは天狗抄の初めの構えなどなり。撥草の少し直くなるもので、ここに高く霞むとあるは、高く手をもじることである。

序破急三段の習いとは、初めは緩々（ゆるゆる）と使いだして次第に早く、終りに至って早く使うことである。終りに本文を紹介するに当たり、前述の解説を参考として熟読玩味せば意おのずから通ぜん。

（「月の抄と尾張柳生」ではこの後、「打太刀目録は使太刀の足使いを詳説していないので、連也翁並に十兵衛子時代の使い方を述べておく」とあり、長岡房成『新陰流兵口伝書外伝』から引用している。）

連也翁ならびに十兵衛子時代の使い方（「月の抄と尾張柳生」）

燕　飛

使太刀　直立ちて僅かに右足を前にし、中段直なる構えにして待つ。

打太刀　右足を前にし、胯を開き、中段に（「の」を直す）チツクと青岸に構え、切先を使太刀の拳に付けて進む。

間の外より魔の太刀を以て右足を進め、使太刀の拳を打つ。

使太刀　右足を後ろの右に移し、左足を前に進め、序破急の拍子を以て拳を右の上に外す。

高く腮（あご）に等しくす。太刀すじかって、刃、打太刀の拳に向かう。右肘、チツクと張り、左肘、屈み垂れて、身、太刀の中

に入る。

これ一動きの勢いで、足を移して後、拳を外すにあらず、一度にこれをする。すべて一と動きの勢いをなすは、皆同じことなり。打つと足を出すとは、たとえば月と影との如し。月出れば影至り、月入れば影去る。足を出して後、打つにはあらず、打ちて後、足を出すにあらず、共に同時なり。

打太刀　遠く右足を後の右に引いて身を移し、撥草に構ゆ。

使太刀　右足を前の左に進め左足を右に移し、身を転じて切先の右背を打太刀の肘に付け、眼を刺す。

打太刀　左右、足を踏み替え、使太刀の脇を撥（はら）って、左手、刀の背を中取りして右脇を前にす。

使太刀　刀の左背で打太刀の拳を打ち落として、遠く右足を後に引き、左脇を前にす。この使い方、仮に打太刀の刀を打つなり。これを打ち捨ての相懸けと云う。また前後左右は身のある所にしたがって云う。

使太刀　それより刀を挙げ、右足を進めて打太刀の首を打つ。

打太刀　左足を前に集めて刀棒にしてこれを止めて、左手の四指、使太刀の刀の背を抑（おさ）さゆ。

使太刀　左足より左右、足を踏み替え、手をもじり、刃を上にし、打太刀の四指を引き切りて別れ、切先を打太刀の胸に付く（老師の術伝は切先、高し）。

（打太刀）それより右（下）足を左に進め、左（上）足を後の左に引き、両手、柄を取りて、使太刀の左肘を打つ。

使太刀　魔の太刀をなし、右足を左に進め、左足を左の後に移して、打太刀の打に合わせ、打太刀の刀をささえ、手に勝つ。息有り。始めよりこれまで燕飛。

猿廻

使太刀　わずかに刃を左に向け、拳を捍（ふせ）ぎ、手を縮めて右足と共に少し引き、また大に右足を後に引き、切先を後になして、車の構えとなる。

打太刀　また右足を後に引きて、同じく車の構えとなる。これより左足を進め使太刀の肩を打つ。

使太刀　少し左足を進めて身を捍（ふせ）ぎ、打太刀の拳をはす切りにするなり。しかも今ごく浅くこれを太刀に合わせて使うなり。これを相懸けと云う。

打太刀　左右、足を踏み替えて使太刀の右腕を打つ。

使太刀　また左右、足を踏み替えて、左足わずかに左を踏んで拳を捍（ふせ）ぎ、打太刀の右腕をはすに打つ。これまで猿廻。

山陰

打太刀　右足を後に引いて撥草の構えをなす。

使太刀　左足を進め、僅かに右足を引き、手をもじり切先を返し、下より打太刀の腕をはぬる意を以て、近くわが腰膝をふせぐ。

打太刀　左右、足を踏み替えて使太刀の膝を打つ。

使太刀　また左右、足を踏み替え、筋交いに打太刀の打に乗って打太刀の両手を打ち落とす。

このとき打太刀・使太刀、共に或いは声をかける息あり。これまで山陰。

月影

使太刀　刃を起こし、少し右足を引き、横雷刀に挙げんとす。

打太刀　また少し右足を引き、魔の太刀をなして、使太刀の手を打つ。

使太刀　右足を後に引きあつめ、右足少し前にして立ち、横雷刀にあげて外す（老師術伝は相違す）。口伝あり。

打太刀　少し左足を前に進めて折甲の構えとなる。

使太刀　刀の右背（口伝あり）で打太刀の右拳を打ち、右足を後の右に引き、刃にて左拳を打ち、少し左足を進む。

刀筋かって逆の中段、刃、下に向かう。ほぼ始めの外す形に似て刀低し。

打太刀　少し右足を引き、撥草の構えとなる、

打太刀　足を替えず切先を打太刀の肘に付く。これまで月影。

浦　波

打太刀　左足を引き、使太刀の左手を打つ。

使太刀　右足を前の左に進め、左足を後の左に引き、打太刀の打ちに打ち合わせて、手に勝つ。

この打ち、打太刀共に或いは声をかく息在り。少し刃を左に向け、拳をふせぎ、手を縮め少し右足を引く。

打太刀　少し右足を進め、魔の太刀をなして使太刀の手を打つ。

使太刀　右足を後の左に引き、これを外して撥草に構ゆ。

打太刀　左足を進め右足を集め、左脇を前にし拳をあげ、刃を左肩におびて身をふせぎ入る。これ、折甲の構えの切先垂るゝものなり。

使太刀　右足を前少し右に進め、大いに左足を右に移し、身をかわって、刀の右背で（口伝あり）打太刀の拳を打つ。

打太刀　足を踏み替わり身を替わり右脇を前にし、使太刀の左肘を払って、左手、刀の背を取る。

使太刀　右足を大いに右少し後に移し、左足もまた右に移し集め、少し左足を前にし、身をかわり、左脇を前にす。直っ立ち、拳をもじり、高く右の鬢（びん）の上にあげて外す。これまで浦波。

浮　舟

打太刀　左足を進めあつめ刀棒をなす。

使太刀　右（下）足を前の左に進め、左（上）足を左に移し、刀の右背（口伝）で打太刀の刀棒の左拳の上を打ち、左足を前にあつめ、刀の左（右を直す）背（口伝）で打太刀の右拳を打ち、右足を後に移し、左脇を前にす。

手をもじり、下より打太刀の右拳をはぬる意をなす。

打太刀　隻手刀をあげ、左足を引き、使太刀の膝を払いて折り敷く。

使太刀　足を踏み替わり、魔の太刀をなして、打太刀の拳を打ち落して折り敷くなり。この打ち、打太刀・使太刀共に、或いは声をかくる。

これまで浮舟。

燕飛よりみな続け使いなり。この使い様、総体、大股にして太刀に順て身をかゝり大ぎょうに打つこと好し。また打ち切れること悪しく、奇正、循環するものなり。

九箇の太刀

「必（ひっ）勝（しょう）」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

使太刀　左太刀なり。右肩に払う構えに少し直なる構えにて立つ。

打太刀　中段順城郭構えに似たり。使太刀の左肩より肘の間に付ける。

使太刀　右（左を直す）足を少し踏み出し、打太刀の拳へ左（右を直す）足を踏み込み、その身形にて打ち、下段となる。

打太刀　太刀を引き上げ、使太刀の柄中を打つ。
使太刀　上に引越して打太刀の右腕に勝なり。

江戸柳生古目録口伝書による使い方

使太刀　左太刀、右の肩にかたげ、わが左の肩を相手の拳にくらべ、左の足を出し、その身なりにて懸かるなり。
打太刀　青岸の構え、（太刀を）少し横になして太刀先を少し上げて、使太刀の左の腕におしかけ懸かる。
使太刀　打太刀の太刀半分程より太刀先の方を横に打ち落とす。身を崩さず身共にうち沈みて腕を先へ身通りに出し、太刀先を左のつま先通りに置き、待つなり。
打太刀　打たれてその身にて後の足より後へ退く。また使太刀の待つところを拳かけて先から先へ踏み込み打つなり。
使太刀　その打つところを、後の足を少し開きて拳を身に引き寄せて、下より上へくぐり、打太刀の右腕首を打つなり。

解

打太刀青岸の構えに対し、（使太刀は）右足を前隅に出し、打太刀の拳を払い槍構えとなる。打太刀、上段に外し、ひしびしと打つ。使太刀、下より巻き落とす如く打太刀の右腕首に勝つものなり。前文中、使太刀の腕におしかけてかかるとあるは、拳の動き肘の動きに心をかけることで、おしかけることにあらず。使太刀、打太刀の太刀半分程より太刀先の方を横に打落すとあるも、実は打太刀の拳を斜め横に打落すことを云う。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

使太刀　左太刀なり。右肩に払う構えに少し直なる構えなり。
打太刀　中段、城郭構えに似て、使太刀の左肩より裏肱の間に付ける。
使太刀　打太刀の拳の際、太刀を掛け、右肱の通りへ打ち、下段になる。両膝をえまし、打太刀の柄内へはぬる（はねる）心持なり。
打太刀　太刀を引きあげ、使太刀の柄内を心当てゝ打つ。
使太刀　引き越して打太刀の右腕へ勝つなり。心得積位、悪しければ当る非これ有り。

○「柳生の芸能」解説

右肩にと云々、古今同じ、やや足を踏み割りて構う。
中段城郭の構えとは五箇の身のことなり。
使い方　使太刀、下段となる。

○「月の抄と尾張柳生」解説

使太刀、右肩上に直立ちて高く構える。打太刀、中段城郭の構えとは大略、五箇の身と同じ。使太刀、右足を右に踏み、左足を踏み込み、拳へ払い切る。打太刀、上に外し、使太刀の拳を打つ。使太刀、種字手裏剣と勝つ。

連翁口伝のうち、敵、懸にして身に争うときは、そのまま合し打つ。また敵抜け越し、わが左を打つときは、下より弾ぬる砕きあり。古来、左太刀は隠し太刀あるいは秘太刀とも唱え、人に知られず朝鍛夕錬して、必勝の技を覚悟しなければならない。

塚原卜伝は天下の名人と言われしが、数度の他流試合に必ず左太刀にて勝ちしと伝えられている。

「逆風（ぎゃくふう）」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

打太刀　足を踏みわり身を沈にして構う。
使太刀　抜草払いの太刀より大袈裟に切り払い、左車に足を立替え、それより打太刀の右へ抜け、身積もり三角に、右（左を直す）を先にして角かけて下段に直して構う。
打太刀　使太刀の払いの太刀を順車（右足を後に引く）となりて外し、それより右足を踏み出し、使太刀の右肩頭をかけ真直ぐに打つ。
使太刀　抜けて打太刀の右腕拳ぎわへ勝つなり。

江戸柳生古目録口伝書による使い方

使太刀　右の肩に払いの太刀の如くに構え、左の足を先へ出し、その身なりにかかる。
打太刀　青岸の上段に構え、懸かる。
使太刀　右の足を踏み出し、身を入れ違いて、打太刀のえもんなりに払い、左の足を開き、打太刀の右（左を直す）の方へ隅かけて左車に構え、待つなり。
打太刀　使太刀の払うに然て、右の足を後へ引き、また使太刀の左車を見て、引きたる足を踏み入れて、使太刀の右の肩を切るなり。
使太刀　切るに随いて、また身を立てかえて肩を入れ替えて、打太刀の右へ跳び違い、右の腕首を打つなり。

解

文中、青岸の上段とあるは、誤りなり。これは必勝の打太刀にして、逆風の打太刀は竪一文字をよしとす。

打太刀、使太刀の払うに従って、右の足を後へ開き、順車に外す。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

使太刀　払いの構え。少し切先高く右肩に構える。
打太刀　上段（今は中段）より使太刀の拳に付け懸かる。
使太刀　打太刀の太刀共に大袈裟掛に切り払い、左車に足を立て替え、打太刀の右へ抜け、身積り三角に左を先にし、角かけ下段に直して構える。
打太刀　右足を踏み出し、使太刀の右の肩頭を掛け、真直ぐに打つ。
使太刀　抜けて打太刀の右腕拳際へ勝つなり。
拳高ければ非これあり。積り・身位・勝口悪しければ当たる。

○「柳生の芸能」解説

払いの構え云々、この時は足を踏みわり、身少し低し。
打太刀上段と云々、昔は今の乳通りに構えたるを上段の内とす。今は中段の内なり。
使太刀、打太刀の太刀共に大袈裟がけに切り払い、左車に足を立て替えと云々。これ迄、今使う処と同じ。それより使太刀、打太刀（原文に打太刀使太刀とあるを直す）の右へ抜け、身積三角に左を先にして、角かけて下段に直して構え、順車となる。
打太刀、右足を踏み出し、使太刀の右肩、頭をかけ真直ぐに打つ。
使太刀、抜けて打太刀の右腕拳ぎわへ勝つなり。
打太刀、順車となること、今と違う。

○「月の抄と尾張柳生」解説

この形は後の打ちが主なる故に逆風という。前文中、打太刀上段とあるは、今の乳通り構えたるを、昔は上段の内とす。今は中段の内とする。また現に使う所は強いて拳には付けず、真直ぐに付けることである。

「十太刀」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

打太刀・使太刀　互いに西岸の文の截合なり。共に身を低くし構う。

使太刀　青岸より変化して低き十太刀の構えとなる。

打太刀　移り付けかけ柄中を打つ。

使太刀　下より拳をはねつまる。

打太刀　右足を退ぞけ撥草にとる。

使太刀　五箇の身にてつまること一刀両段と同じ。

江戸柳生古目録口伝書による使い方

使太刀、打太刀　互いに一文字の中段の構えにて序の切り合い。

使太刀　序の内より車の太刀の如く太刀を引きとり、身位、一刀両段の構えに似て、太刀先は我が身通りの前に置いて待つなり。

打太刀　そのまま下段の青岸に直し、使太刀の拳を押さゆる様におしかくるなり。

使太刀　手でより打つ。（原文　遣手でより打つ？）

打太刀　打たれて三学の初手の如く、かたげて引く。

使太刀　それに随いて打太刀の左の方へ直り、青岸の上段にて付ける。付けは何れも初手の一刀両段の付けと同前なり。

解

文中、使太刀の拳を押さゆるようにおしかくるとは、太刀先を使太刀の拳からヒジの間に付けることなり。

車の太刀の如く太刀を引きとりとは、右足を角かけて引き、右足半歩前へ出し、車の太刀となること。

打太刀、使太刀の肘のかゝりより拳かけて打たんとするとき、使太刀、下より、はね打つものなり。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

打太刀・使太刀　西岸、文の截相なり。

使太刀　変化して右の足、後ろ角かけて引き開き直り両膝をえまし、向うへ太刀を出し、拳を右の膝の際に置き打太刀を左の方へ受ける。

打太刀　移り付けかけ、柄の内を打つ。

使太刀　打太刀の柄拳を下より切る。

打太刀　引き上げ被り、左の足を踏み出す。

使太刀　打太刀の左腕肘に付ける。

位身積など悪しければ当る。

○「柳生の芸能」解説

西岸、文の截合なりと云々、半開の如く構えて文を取る。使太刀、変化して開きたるところ、昔の使い方にて、拳低く身も低し。

打太刀、移り付けかけ柄中を打つとは、文より使太刀の変化に移り、拳に付けるを云う。この頃は柄中を打つものとす。

使太刀、打太刀の柄拳を下より切るとは、下より弾ぬることなり。

打太刀、引き上げ被り左の足を踏み出す云々は、これは左の足を先へする意なるべし。元来、踏み出すべき処にあらず。やはり今使う如く踏み替ること良し。

○「月の抄と尾張柳生」解説

この形、当って戻るところ十度にても同じこと故、その尽きざることにより十太刀と名づく。

前文に西岸あやの截相とは、半開の如く構えて文を取る。使太刀、

真直ぐ構えて文を切る。即ち打太刀は西岸、使太刀は直中段にして互いに文をとり、使太刀、変化して十太刀の構えとなる。打太刀、うつり付けかけ肘のあたりを打つ。

使太刀、打太刀の柄拳を下より截るとは、下より弾ぬるなり。現在は肘の辺を打つ故、肘を除けて、横より柄中を十文字に勝つなり。このほか、打太刀、拳を防いで打ち来たるときは、使太刀、上より被せて勝つなり。

「和（か）卜（ぼく）」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

打太刀　堅一文字（直中段）の構えにて待つ。
使太刀　西岸にて進む。
打太刀　真直ぐに打つ。
使太刀　少し開き、横身になり拳をはすに打つなり。

江戸柳生古目録口伝書

使太刀　構え、「活人剣の心持」をもってさげ懸かるなり。
打太刀　青岸なり。
使太刀　右の足を踏みとめ、そのまま立つ身にて打太刀の太刀先三寸へ切りかくるなり。
打太刀　その（共を直す）色につき、真っ向に切りかかる。
使太刀　中墨を外して右手の方へ開き直って体を居へ、二星を勝つなり。
解
活人剣の心持ちとは相手を働かして勝つ心持ちなり。
太刀先三寸に切りかくるとは、三寸に付け、打太刀を働かすことなり。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

使太刀・打太刀　西岸にて仕懸けを待つ。
使太刀　仕懸け来たる。
打太刀　真直ぐに頭を掛け打つ。
使太刀　少し開く心持にて方（かた）の積りにて拳際に付ける。
心得・位・拍子悪しきは付かず当たる。
ただし打太刀、堅一文字の構えなり。

○「柳生の芸能」解説

使太刀・打太刀、西岸にて仕懸けを待つと云々、この文、誤り有りて聞きにくし。

これは使太刀・打太刀ともに西岸の構えにて、打太刀、使太刀の仕懸けるを待つということなり。

さてまた終りに、但し打太刀、堅一文字の構えなりとあり。これは始めにいうところのことは誤りにて、打太刀は堅一文字、使太刀は西岸の構えなりと言うことなり。堅一文字は前にもいう如く真直ぐに構えたるをいう。

○「月の抄と尾張柳生」解説

方の積りというは堅一文字のこと。堅一文字とは真っすぐにかねに構えることである。

現在使う処は、打太刀・使太刀とも直中に構え、使太刀より進むにしたがい西岸に変化して圦内に入らんとする。打太刀、堅一文字の構えより、真っすぐに打つを、体を開きながら、太刀中、十文字と勝つものである。

「捷径」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

身を低くしてかけ込み、介者に向いてはホッテの下を突く。高きは真眉廂下を突く。受けるときは両膝をえまし受けるとあり。

使太刀　中取りの中段にして、身低く駆け込む。

打太刀　雷刀、左足を前にして立ち、右足を大いに踏み込み、真っ向を打ち押う。

使太刀　その押える拍子に乗り落とし撞くなり。

江戸柳生古目録口伝書

細き道などの脇へも開かれず、太刀の振り回しも不自由なる所にての太刀なり。

使太刀　身をひとえになし右の肩を打太刀の拳に比べ、左の手に柄を持ち、太刀を帯のあたりまで身にひき添え、太刀先下りに取りて、すらすらと懸かる。

打太刀　身を一重身になし、左の足を先へなし、太刀を右の肩にかたげ、使太刀を引き寄せ、上より真直ぐに、足を立て替え身を入れ替えて、手の内強く切る。

使太刀　切るところを、その身なりに受け合わす。

打太刀　受けられて、上より押し付ける。

使太刀　押すに従いて左の拳を下ろし、身を立て替えて、左の足にて打太刀のつま先を踏み付け、受けたる太刀をそのまま押し付るなり。

解

文中、打太刀、上より押し付ける拍子を受けて、左の拳はそのまま、先ず打太刀の太刀に乗り、手前に押し落とすなり。しかる後、詰めるものとす。

身を立て替えてとあるは、押し落とした後、打太刀の太刀を防ぐ心持をもって、太刀を斜め横にし、詰める形を云う。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

打太刀　雷刀にして待つ。

使太刀　中取り一重身中段にて仕かけ来り、打太刀の中筋ふえの順に太刀切先を当て、両膝をえまし被る。

打太刀　足を立替え真っ向を打ち、上より押える。

使太刀　その拍子に載り、押返し突く。身積・位・構え、悪しければ当る。

○「柳生の芸能」解説

使太刀、中取り一重身中段にして云々、昔は中取りの中段にして身低きなり。

打太刀の中筋ふえの順に太刀先を当て、云々とは、先ず使太刀の技を打太刀の技より先へ書き、それより打太刀の技を後へまわして書きたるなり。この文の書きよう、前後したるにより誤ることなかれ。敵の打ちに当る拍子なりと知るべし。

打太刀の中筋ふへの順に太刀先を当てると云うも、大略を言いたることにて、実に当てるには非ず。実に当てれば受けられぬなり。ただ筋は大事のところ故、かく言いたるなり。また両膝をえましとあるは、股をふみ開らき受けることなり。

打太刀、足を立て替えと云々、これは始め左足を先へし構えおるゆえ、右足を踏み出し打つなり。

使太刀、その拍子に乗りと云々、これも打太刀、前の如くする故、使太

刀、その押さえる拍子に乗り、押し落し、撞くなり。

○「**月の抄と尾張柳生**」**解説**

昔は早く進む故、捷径（ハヤミチ）と名付く。この形と前の和トと後の小詰と、この三本は狭く長き廊下などの勝負にして、自在に太刀の使われざる処に用うると云う。よりてこの形、打太刀も只一と挫きに打たんとし、使太刀も頭をさゝげて駆け込み撞かんとする勢いなりと云い伝う。然し現在使う処は、常に進むが如く行くものとす。

打太刀目録のうち、使太刀、中取り一重身中段にしてと云々、昔は中取りの中段にして身低く使いしが、今は中取りの下段にして直立ち、手に刀を掛けたる迄なり。手にかけると云うは、大指と食指との間に刀背を挟むことである。

「小詰」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

打太刀　下段膝車、大胯にして至って低く構え、柄を膝に付けるほどにする。

使太刀　少し青岸の様にして太刀先を打太刀の拳に付け出る。中段の少し低き構えなり。その構えを徐々に上げつゝ進みよる。

打太刀　左肘を打つ。

使太刀　左肩に引き上げはずし、右足を踏み出して打ち、ゆるめず左足を踏み込み左身になり膝の外へ拳を出して撞くなり。

江戸柳生古目録口伝書による使い方

使太刀　下段の青岸の構えなり。

打太刀　一文字の太刀の下段の構え、「獅子（「志ゝ」を直す）の洞入り」に構え、身をさがり右の足を先へなし、柄頭を右の膝頭のあたりへ押し当て、太刀先上がりに一文字に構ゆ。

使太刀の懸かるところを左の拳へかけて、その身なりを崩さず切るなり。

使太刀　（打太刀が）切るにしたがい左の足を踏み込み、腕をもじり、我が左の膝の外へ拳の出るように打太刀の鍔ぎわをとむるなり。

懸かる時、太刀先は打太刀の胸喉あたりへ行く程に詰めるなり。

詰め様は、我が太刀の我が身に沿うようにして、下を第一と用心してよし。

解

文中、腕をもじりとあるは、誤りなり。そのまま順に下ろすこと。

また、鍔脇をとむるとあるも、実は太刀先をとむるなり。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

打太刀　下段、膝車に構える。

使太刀　付け懸け来る。

打太刀　間のよき程にて使太刀の左肘を真直ぐに打つ。

使太刀　引揚げて左身になり、両膝をえまし、わが膝の外へ拳を出し詰める。

身位拍子積り、悪しければ詰められず当る。

○「**柳生の芸能**」**解説**

打太刀、下段膝車とは、打太刀、大股にして、至って低く構え、柄を膝に付けるほどにするを云う。

使太刀、付けかけ来るとは、少し青岸の様にし、太刀先を敵の拳に付け

出る。中段の少し低き構えなり。
間のよき程にて云々より終りまで、これは打太刀、使太刀の左肘を打つ時、使太刀、引き上げ外して右足を踏み出し打ってゆるめず、左足を踏み込み、左身になり、膝の外へ拳を出して撞くなり。これを詰めると云うなり。
本文、外して打つこと欠（？）文す。この詰めるとき、実は敵の前足のつま先を左足にてふまえ撞く勢いありと言い伝う。

○「月の抄と尾張柳生」解説

俗に「詰」を「つめる」と読む。外し打って、つめて撞く故に名づけたるなり。

今の使い方は、間の少し外より敵を撞かんと青岸の如くに太刀を平らにし、大略、肩通りに上げ、切っ先少し低く左拳少し高くして、敵の吭（のど）或いは顔の通りに当て、右足を少し入る。これを迎えと云う。打太刀、左拳を打つ。使太刀、そのまま打ち押さえ、左足を踏み込み詰めること、昔に同じ。

「大詰（おおづめ）」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

打太刀　中段
使太刀　上段
打太刀・使太刀　相かかりに進み行く。
打太刀　柄中かけてはすに打ち来たる。
使太刀　右肩の上に順に外し、左足を少し後の角へ開く。次は右足を踏み出して双手勝ちに横に勝つ。

江戸柳生古目録口伝書

使太刀　横一文字の上段、我が拳を打太刀の盾にして打太刀の顔へ太刀先を付けて懸かる。
打太刀　相構えにて使太刀の懸かるを見て、上より真直ぐに打つなり。
使太刀　（打太刀が）打つに従いて、すぐに上へ上げて打太刀の右の方へ座を飛かえて打太刀の両手の内へかけて打つなり。
古流には後へ外したるとあり。然れども深く切るものには危うき故に、当流は左へ外し、打太刀の太刀先を我が右へ外るゝように遣うなり。然り口（？）の仕かけに越す心持をもって懸かる味よし。打太刀も切り落とせば切りくみ悪し故に、中にて太刀先下りに切りとめる様に切るなり。

解

一文字の上段なれば、敵の顔に太刀先は付け様はなし。太刀の中墨を外さず進むことなり。
打太刀相構えにてとは、一文字中段のことなり、太刀先、顔に付く。
使太刀、進みかかる拳を上より斜め横に打つなり。
左へ外すは、斜め左あと、即、角をかけて外すものとす。
太刀を右肩に順に上げ打太刀の両手を順に切り、大いに詰める。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

使太刀・打太刀　上段にして相懸かゝる。
打太刀　真直ぐに正面を打つ。
使太刀　引抜けて打太刀の右の方の腕へ勝つ。
一重身になり右足を踏み込み左足を後、後ろへ開き、詰めるなり。
積り・位・心得等、悪しければ、抜けられず当たる。

○「柳生の芸能」解説

使太刀打太刀上段と云々、この書き様、和トのところと同じく誤りなり。打太刀は中段なり。また相がかりの下に打太刀の字が抜けたり。使太刀、引き抜いて打太刀の右腕へ勝つとは、敵の打つところを上げ外し、右の腕に勝つなり。この頃は全て手を上げ外すを、大詰の外しと云う。

一重身になり右足を踏み込み、左足を後、後へ開き詰めるなりとは、打つとき一調子にすることなり。打ってから後、また別に一重身になり、右足を踏み込み左足を後へ開き、詰めるにはあらず。かようにすれば調子二つになりて、敵、必ず変化す。誤るなかれ。詰めると云うは近く敵に寄りて迫ることなり。外し後れて打つときに必ず間遠くなるゆえ、踏み出し詰りて打つことなり。

斬釘の所に、両膝をえまし詰めると同じことなり。この頃の使い方は、肩の上に外してから右足を少し左へ踏み出し、左足を後の角へ開き、横に斜（はす）に打つものとす。

○「月の抄と尾張柳生」解説

既に前述の如く、「書、ことごとく信ずれば書なきにしかず、ただ信ずるものは師よりの実伝のみ」と思われたい。大詰の説明も反対の所あり。

「八重垣」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

打太刀　上段。太刀先を使太刀の左肘に付ける。青岸の構えの様に横に仕付くるなり。

使太刀　横雷刀より変化して右足を後の右へ引きながら、太刀をくねり、打太刀の太刀先三寸へ乗り付け、逆の中段となり、吾が拳を平らにして見する。

打太刀　魔の太刀にてこれを打つ。

使太刀　また魔の太刀にて抜けて腕へ勝つなり。

解　魔の太刀とは廻刀、まわし打ちのことなり。

江戸柳生古目録口伝書による使い方

打太刀　構えは青岸の上段なり。

使太刀　上段に頭（かしら）の上に拳のある様に振り上げ、太刀先を後ろの少し右の方へ提げて右の足を先へ出す。

打太刀　青岸にて詰め懸かる。

使太刀　打太刀の太刀半分へ上より打ちかけ、右の足を後へ開き、身を立て替えて打太刀の左の方へ飛び違え、手をもじりて霞の太刀の如くにして待つなり。

打太刀　身を崩さず、先から先へ踏み入れて、使太刀の三寸へ巻きかくるなり。

使太刀　その巻きかくるところをまた、霞たる太刀を上へ巻きかえし、また打太刀の右の方へ飛び違へ、足も身も立て替えて、右の足を先へ出し、打太刀の右の手首を打つなり。

解

一、打太刀、青岸やや平らめにして太刀先を使太刀の肘に付ける。

一、使太刀は上段、横雷刀に構える。

一、打太刀の太刀半分へ上より打ちかけるとは、打太刀の太刀先三寸につけることなり。

一、右の足、後へ引き云々とは、手をもじり、霞の如くとは逆の中段になることなり。

一、先から先へ踏み入れてとは、先々の意を以て使太刀の三寸（拳）へ、まき打ちに打つことなり。

討太刀目録（「柳生の芸能」）

使太刀　構え、頭上に切先を右にし、横雷刀の足少し踏み出し、直立ちて居る。

打太刀　青眼（本文は上段）、使太刀の左肘に（切先を）付ける。

使太刀　変化し、右足を角かけて引き開き、左の足も少し添え、太刀をくねり、打太刀の太刀上、切先に切り付けて、柄の内を平めに見する。

打太刀　魔の太刀を以て真直ぐに打つ。

使太刀　魔の太刀にて抜け、打太刀の右肩、腕へ勝つ。

位積悪しければ抜けられず当る。

○「柳生の芸能」解説

この形、横雷刀より筋交いに打ち、また筋交いに打つゆえ、名づくるなり。足、少し踏み出し直立ちて居るとは、右足を少し先にし直立ち居るなり。

打太刀、上段、使太刀の左肘に付けるとは、青岸の横の様に横にし、付けることなり。

使太刀、変化し右足を角かけ引き開き云々より終わりまで、これは右足を後ろの右へ引きながら太刀をくねり、敵の太刀先三寸へ乗り付け、逆の平め中段となり、我が拳を平らにし、見する。

打太刀、魔の太刀にて是を打つ。使太刀もまた魔の太刀にて抜け、腕へ勝つことなり。

○「月の抄と尾張柳生」解説

今、使う処は、使太刀、右足を後の右へ引き開き、左足を踏み出し、クネリ打ちに打太刀の拳を打って逆の中段となる。打太刀、拳を引き外して、魔の太刀にて使太刀の左拳を打つ。使太刀、左足を引き、雷刀に上げ外し、右足を出し頭を打つものとする。

「村雲（むらくも）」

流祖時代上泉子、石舟斉子（永禄九年より天正、慶長年間）の使い方

使太刀・打太刀共、下段。互いに文を切る。

使太刀　文を切りながら進み、間の外にて大きくから打ちをしてさけ（提げ?）、打太刀の左へ寄り仕掛け、右身にて胯を開き、右膝の通りに太刀を置きて逆に下げ、下段となる。

打太刀　付けて拳を打つ。

使太刀　抜けて、くねり打ちの如く、順に横に右腕に勝つなり。

江戸柳生古目録口伝書による使い方

打太刀・使太刀　たがいに一文字の中段の構えにて序の切合いをする。

使太刀　序切りの内より、欠く拍子にて、その身なりを直ぐに打太刀の左の方へ座を替え、右の足を先へ出し、太刀を地につけて、拳を我が膝通りに少し先へ出し、身を沈め後足を開き、待つなり。

打太刀　そのまま序切りをやめて使太刀の拳の出したる間を打つなり。

使太刀　（打太刀が）打つに従い、打太刀の右の方へ身足ともに立て替え、太刀は下よりくねる様にして打太刀の右の腕首を切るなり。拍子の取りにくき敵に勝つ太刀なり。（「解」は略）

討太刀目録（「柳生の芸能」）

打太刀・使太刀　互いに文の拍子を取り、下段なり。

使太刀　間にて一拍子仕懸け、打太刀の左の方へ変化して、角をかけ下段

になり両膝をえまし、後の箙（えびら）に懸かり、右膝の順に拳を置き、太刀を打太刀の中筋通りに出す。

打太刀　一尺ばかりの内へ付け掛け、出たる拳を打つ。

使太刀　抜けて打太刀の右腕へ勝つ。

身積り・位・拍子、悪しきは当たる。抜けること能わざるなり。

○「柳生の芸能」解説

この形、使うところ、村雲の如く定まりたる形なきを以て名づく。

使太刀、間にて一拍子を仕かけと云々、これは間にて大きくカラ打ちをして下げ、打太刀の左へ寄り、仕かけ、右身にて股を開き、右膝の通りに太刀を置きて、逆に下げたる下段なり。打太刀、付けて拳を打つ。使太刀、抜けてくねり打ちの如く、順に横に右腕へ勝つなり。

○「月の抄と尾張柳生」解説

右の九つは構えをして居る者に、また構えをして、先を仕掛け、仕損じて、二つ目を勝つ稽古、残心の習いなり。これ老父（宗矩）の教えなり。

天狗抄

「花車（かしゃ）」

江戸柳生古目録口伝書による使い方

使太刀　左の肩を打太刀の身通りを外さず脇構えの太刀先を上げて、打太刀の方へ少しさしかかる様にして左の足を先へなし、腕を伸ばし一重身に肩を打太刀の拳に比ぶる味わいにて構ゆるなり。

打太刀　上段の青岸にて太刀先を上げ三寸（拳）にて序切り、その内に使太刀の肩を初めの身なりにて打つなり。

使太刀　打つに従いて上よりすぐに打つ。

打太刀　打たれて上を用心して使太刀の太刀先を押ゆる様にする。

使太刀　身を立て替え右の足を踏み込み、左の膝を折り敷き、右の膝を立て、打太刀の柄の内、拳を打ちて合するなり。

解

これは高き霞の構えなり。刃、天を指す。高きを打つ太刀なり。

この勢法は、打太刀、肘に浅く打ち気たるを越して拳に勝つ。また（打太刀が）打ちきたるを、使太刀、合し折り敷くものなり。

この形、柳生十兵衛、仇討ちの小太郎なるものに、この一本のみを伝えしと云う説あり、さも有るべし。よく極め（「約め」を直す）尽くせるところある形なればなり。また、他にこれを新陰流カラ竹割りの太刀と云う。これ撥草は横に払えども霞太刀は竪（縦）に打つ故、この名あり。

打太刀目録

使太刀　払いの構えの少し直なるものなり。

打太刀　拳に付けかけ右（解説により「左」を直す）へ替り肘を打つ。

使太刀　打太刀の左へ廻り柄内へ勝つ。

打太刀　また太刀へ争うこと二つ三つ。

使太刀　相掛け、打太刀の左の方へ替り、魔の太刀にて合し込み、勝つ。

使う心悪しきか、位・勝ち口悪しきは当たる。あるいは合し込み近ければ、打太刀より裏を蹴る事これあるなり。

○「柳生の芸能」

口伝書に花車とあり、本文に名を載せざることは、奥の太刀の名を以て天狗抄の名と見せしめたるなりと言い伝う。余人これを見るとき添截乱

截を二本と思い、八箇を入れて天狗抄太刀数八とせん、これその為なり。
また且つ奥の太刀は目録を授けても未だ授けざれば、これを抜きても宜しけれども、さようにすれば、古来相伝の太刀目録に奥の太刀がもるるゆえ、奥の太刀の名を載せて天狗抄の名を略せるなり。
使太刀、払いの構えの少し直なるものなりとは、霞の太刀のことなり。
払いの構えは撥草のことにて、低く横を払う勢いゆえ、切先少し横にして低し。霞の太刀は高きを打つ勢いゆえ、少し直にして切先高く、刃、天を向く。
打太刀、拳に付けかけ左に変わり云々、は左の字、右の字の誤りなり。
また太刀に争うとは、浅く打ち懸かることなり。二つ三つとは、昔は強いて打つ数、定まらずと見えたり。
使太刀、相がけ、打太刀の左の方へ替わりと云々は、いま使う所と違う。
打太刀、三ツ目を打ち懸けるを、使太刀、逆に相懸け流し、敵の左へ替わり、魔の太刀にて合し、折り敷くなり。

○「**月の抄と尾張柳生**」**解説**

打太刀目録のうち、使太刀、払いの構えの少し直なるものとは、霞の太刀を指す。払いの構えは撥草のことにて、これは低く横に払う勢いゆえ、切先少し横にしてやや低し。霞の太刀は高きを打つ勢いゆえ、刃、天に向いて切先高し。

打太刀、拳に付け左へ変わりとは、左は右のことで、また太刀に争うとは、浅く打ちかけることである。二つ三つとは、昔は強いて打つ数、定まらず、打ても打たずとも自由に使いしものである。

使太刀、相架け打太刀の左の方へ替わるとは、使太刀、逆に相架け流し打太刀の左へ替わり、魔の太刀にて合し、折り敷くことである。

いま使うところは、使太刀、左の角に構え、打太刀、文を取り来たりて、浅く使太刀の肘へ打ちかく。

使太刀、左足を右へ踏み出し、身を移り肘を外して、上より打太刀の拳に勝ちし後、右足を大に右の角へ移し、左足をあつめ引き上げて直立ち、初めのごとく構ゆ。

打太刀、また浅く打つ。使太刀、また左足を出し、拳に勝つこと、初めのごとし。右足を左へ移し、引き上げ、場中にて直立ち構まゆること、前の如し。

打太刀、また浅く打つ。使太刀、勝つこと前の如し。そのまま引き上げ、逆の中段となり、位をなおす。打太刀も逆の中段より、順に使太刀の肩肘をかけて打つ。使太刀、そのまま真直ぐに拳を打ちて折り敷くものである。

「明身（あきみ）」

江戸柳生古目録口伝書による使い方

打太刀・使太刀　たがいに一文字の太刀の中段にて序を切りかける。

使太刀　打太刀の太刀半分程へ、その身のかゝりにて切りかけ、下まで切り落とす。

打太刀　打たれてそのまま使太刀の身通り真中を上より打つ。

使太刀　それに従って打太刀の左の方へ座を変えて、下より十文字と、拳を打つなり。

大方、九箇の和トに似たる太刀なり。下より切るは、打ちて引き取りたるがよし。切りとむれば、強き打ちには打ちしかるゝ心あるものなり。

解

その身のかゝりにて切りかけ云々は、やゝ斜めに順に切り落とすことな

り。

打太刀は打たれて云々は、使太刀、斜めに太刀かけて斜めに打ちきたるとき、雷刀に外し、一歩踏み込み首へ真直ぐへ打つ。

使太刀、筋を外し、付けのる心持をもって十文勝ち拳を打つなり。

打太刀目録

打太刀・使太刀　たがいに西岸にして文の拍子を取る。

使太刀　仕掛け来りて拍子を切り落し下り、両の箙（えびら）を開き位を替える。

打太刀　真直ぐに使太刀の頭を截る。

使太刀　方（かね）の積りの構えにて、ひっしと付け勝つなり。

位・拍子悪しきは付かず、当たる。

○「柳生の芸能」解説

口伝書に明身とあり、異名に和卜（かぼく）勝ちとあり。

互いに西岸にして云々、昔は使太刀・打太刀、共に西岸にして文を取る。

使太刀、仕かけ来て云々、これも昔は拍子を切り落し捨てたる位にて、少し足を間の内に入るなり。打太刀、真直ぐにと云々より終わりまで古今同じなり、和卜の勝ちなり。

○「月の抄と尾張柳生」解説

たがいに西岸にして云々とは、昔は使太刀、打太刀共に西岸にて文を切りしが、今は使太刀、打太刀共に直なる中段にて文を取ることである。

注意　文中「昔は」「今は」とあるは、昔とは江戸の使い方を云い、今とは尾張の使い方を指す。

使太刀、仕懸け来たりて云々、これも昔は拍子を切り落とし、胯を踏み開き、身を低くして待ちしが、今は拍子を切り落し、捨てたる位にて少しく右足を間の内へ入れるものとする。

打太刀、真直ぐに云々より終わりまで、古今同じ、和卜の勝ちである。

「善待（ぜんたい）」

江戸柳生古目録口伝書による使い方

打太刀・使太刀　たがいに中段の青岸なり。

使太刀　序を切りかけ、打太刀の太刀に乗りかけ、身位を少し沈みて、打太刀の両手の間、胸へ太刀先のなる様に切るなり。

打太刀　乗られて下より使太刀の後の拳を払い切りに切りて、後へ一足宛てくさる（さがる?）なり。

初めは打太刀の打ちを見て、打ち合いきわへなる(?)ときは急に打つべし。乗りかけてからは無理に打っても勝つと云う心持なり。然るにより て善待無明と云うなり。切りくみは左○（欠）に似たる太刀なり。

解

使太刀、中段の青岸にて序を切り待つ。打太刀、進み来たりて左拳を打つ。使太刀、打太刀の両拳に乗りかけて進む。また打つ。また乗りかけて詰める。

打太刀目録

打太刀・使太刀　たがいに文の拍子を取る。

打太刀　仕掛けて打つ。

使太刀　拍子に乗り付ける。

打太刀　また打つ。

使太刀　ひしびしと乗り付ける。

如何ほども斯くのごときなり。拍子、位悪しければ付かず。

○「柳生の芸能」解説

口伝書に善待とあり、異名、烏飛び、あるいは早足と言う。
たがいに文の拍子を取ると書き出して構えを言わざるは、前の形の西岸を受けて略するなり。
打太刀、仕かけて打つとは、使太刀の左拳を打つことなり。
使太刀、拍子に乗り付けるとは、拳を外して真直ぐに小さく打ち付け詰めることなり。
打太刀、また打つをヒシヒシと乗り付けるとは、打太刀、しりぞいて初めのごとく、また拳を打つ。使太刀も初めのごとく緩めず打ち詰めることなり。いかほどもかくの如きとは心持を言うなり、法三度打つことなり。
これ、古今変りなし、打つときは上筋にして拳を外し越し打つことなり。

○「月の抄と尾張柳生」解説

打太刀目録の内、たがいに文の拍子を取ると書き出して、構えを言わざるは、前の形の西岸を受けてのことである。打太刀、仕懸けて打つとは、打太刀進み来たりて、使太刀の左拳を打つことである。使太刀、拍子に乗るとは、拳を外して真直ぐに小さく打ち付け詰めることである。
打太刀また打つをヒシ〳〵と乗り付けるとは、打太刀、退いて初めの如くまた拳を打つ。使太刀、初めの如く緩めず打ち詰めることである。
打つとき上筋にして拳を外し、越し打つことである。

「手引（てびき）」

江戸柳生古目録口伝書による使い方

打太刀・使太刀　たがいに一文字の太刀、中段にて序を切る。
打太刀　使太刀の拳を斜めに打つ。
使太刀　上に外し、打太刀の双手を切り、打太刀の左の方へ同じ身なりにて座を替え、太刀先を地につけて、右の足を先へ出し、拳を膝頭の返りに差し出しておき、少し身を沈み、先の左膝に身をもたせ待つなり。
打太刀　序切りを引きとりて使太刀の両手の間へ、その身なりにて打ちかくる。
使太刀　それに従い右の足手ともに後へ引き、上へ越しかけて打太刀の腕拳をかけて打つなり。九箇の村雲に少し似たる太刀なり。
解　右の足手ともに後へ引くとは、打太刀の左に寄ることなり。

打太刀目録

打太刀　文の拍子を取り待つ。
使太刀　同じ拍子を取り、仕掛け来たり、大股に踏み開き、拍子を越して左の拳を勝ち、切り下げる。
打太刀　使太刀の拳腕を打つ。
使太刀　抜け越して、打太刀の右腕を打ち勝つなり。
位積もり悪しきは当たる。

○「柳生の芸能」解説

口伝書に手引とあり、異名、双手切り、また村雲勝ちとも言う。
打太刀、文の拍子と云々、昔は使太刀・打太刀ともに拍子取るなり。
大股に踏み開き拍子を越し左拳を勝ち切り下げるとは、大股に敵の左へ踏み開き文の拍子を越して、くねり打ちに敵の左拳を打って下がるなり。
先に浅く打ちかけるなり。ゆえに大股に身を敵の左へ開き、半開の如く右足は後の角へ開き、左足は前へ出し、半ば開き半ば向かって、くねり打ちに打つことなり。

打太刀、使太刀の拳腕を打つと云々、これは打太刀、使太刀のくねり打ちに打ち下げたるところの拳或いは腕を打つなり。
使太刀また、くねり打ちのごとく、我が左へ抜け越して、打太刀の右腕を引き打ちに勝つなり。

○**「月の抄と尾張柳生」解説**

打太刀、文の拍子と云々、昔は使太刀打太刀ともに拍子を取りしが、今は共に拍子を取らずして、ただ下げたるばかりとする。
大股に踏み開き拍子を越し左拳を勝ち切り下げるとは、大股に敵の左へ踏み開き、文の拍子を越し、クネリ打ちに打太刀の左拳を打って下ぐるなり。今の使い方とはかわる。先に浅く打ちかける故に、大股に身を打太刀の左へ開き、半開の如く右足は後の角へ開き、左足は前へ出し、半ば開き半ば向かって、クネリ打ちに打つことなり。
打太刀、使太刀の拳腕を打つ云々と言うは、打太刀、使太刀のクネリ打ちに打ち下げたるところの拳或いは腕を打つことなり。使太刀、またクネリ打ちの如く我が左へ抜け越して、打太刀の右腕を引き打ちに勝つなり。
今使うところは、使太刀、下げて往て、間の少し外より迎えをかけ、少し入る。迎えをかけるとは、下段より進むにしたがい上段順城郭、拳を見せて迎うること。打太刀、これを打つ。使太刀、抜け越し、右足を右へ開き、左足を少しく進め、打太刀の腕をクネリ打ちに打ち、下段逆青に拳を見せて迎う。打太刀、またその拳を打つ。使太刀、抜け越し、小さくクネリ打ちの如くに打太刀の右腕を打って、右足を出たる方へ引き、霞の太刀に構えるものとする。

「乱剣」

江戸柳生古目録口伝書による使い方

打太刀・使太刀　たがいに上段の青岸にて序を切りかける。
打太刀　進みきたり、使太刀の左拳を打つ。
使太刀　片手太刀にて上段に外し、打太刀の拳へ真直ぐに切りかける。
打太刀　打たんと太刀を上げる。
使太刀　打太刀の左の方へ、ひっさげたる片手太刀に左の手を添え、刀棒となりて詰める。
打太刀　右に開いて裏を打つ。
使太刀　くさり（さがり?）ながら廻刀して真直ぐに拳に勝つ。
打太刀　また上段に上げ、打たんとする。
使太刀　その刹那、刀棒にて詰める。
打太刀　また裏を打たんとする。
使太刀　起こりを刀棒切っ先にて押し切り、折り敷くなり。
打太刀　また同じ。

打太刀目録

打太刀・使太刀　互いに中段にて文の拍子を取る。
打太刀　拍子を取りながら仕かける。
使太刀　拍子を抜き、巻きかけ、右の足を引き、一重身の左太刀になり、打太刀の太刀の上へ載せ付ける。
打太刀　引越し打つ。
使太刀　下より柄中へ、すくい勝つ。
打太刀　使太刀の拳下を打つ。

使太刀　上より柄の内を打ち勝つ。

拍子位身積もり等悪しければ当たる。

○「**柳生の芸能**」**解説**

口伝書に乱剣とあり、異名、必勝勝ちと言う。打太刀目録には二人懸かりの後に出す。打太刀目録の誤りなり。

たがいに中段にて文の拍子取るとは、たがいに西岸にて文を取ることなり。昔は中段といえば、多くは西岸のことを言うなり。

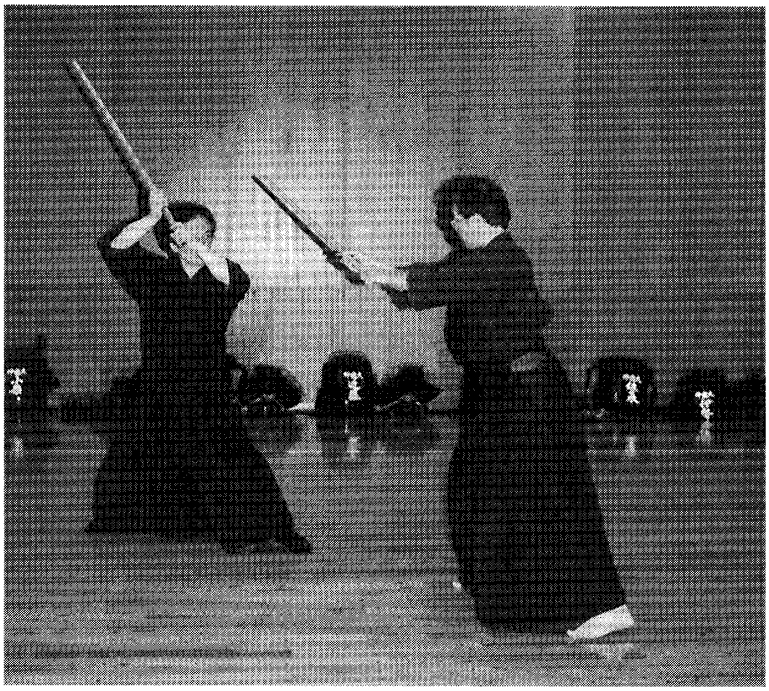
打太刀、拍子を取りながら仕かける。使太刀、拍子を抜き、巻きかけ、左の足と云々、この左の字、右の字の誤りなり。今の使い方と違う。これは、使太刀より打太刀の太刀先へ拍子を抜き巻きかけ、右足を後へ引き、単身、左太刀になりて、乗せ付るなり。打太刀、引き越し打つ。使太刀、下より柄の内へ、すくい勝つ。打太刀、また使太刀の拳下を打つ。使太刀、上より拳を打ち勝つなり。

○「**月の抄と尾張柳生**」**解説**

たがいに中段にて文の拍子を取るとは、実は西岸にて文を取ることである。

打太刀、拍子取りながら仕かける。使太刀、拍子を抜き巻きかけ左の足と云々、この左の字は実は右の足なり。今の使い方と異なる。これは使太刀より打太刀の太刀先へ拍子を抜き巻きかけ、右足を後へ引き、一重身、左太刀になりて載せ付けるなり。打太刀、引き越し打つ。使太刀、下より柄の内へすくい勝つ。打太刀また使太刀の拳下を打つ。使太刀、上より拳を打ち勝つものとする。

今使うところは使太刀、西岸に構え文を取り待つを、打太刀も西岸にて文をとり来たり、使太刀の左拳を打つ。使太刀、隻手太刀になり上へ上げ外し、クネリ打ちに太刀中を打つ。打太刀、雷刀に取り上ぐ。使太刀、その調子に付き、中取りしてかぶり深く詰り、切先を打太刀ののどへ当てる。打太刀、引いて脇腹を打つ。使太刀、緩めずその手を上より抑える。打太刀、また引て取上ぐ。使太刀また詰ってかぶり、切先をのどへ当てるものとする。



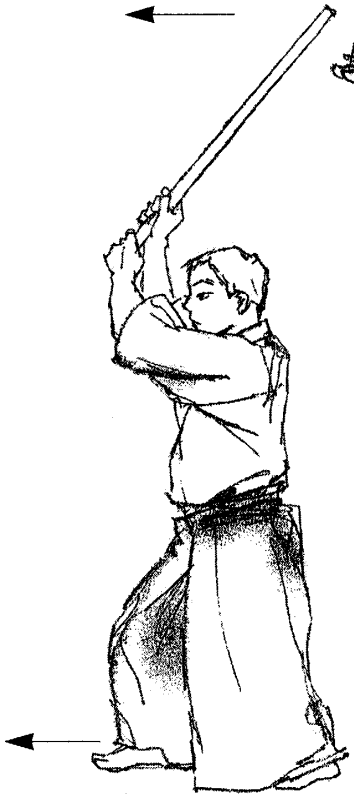
三学円の太刀「二の斬り（残心）」

資料編二

「一刀両段」（江戸遣い）

◎足元の矢印は次図への動きを示す
◎全ての動作において足の指先を上げるように心がける

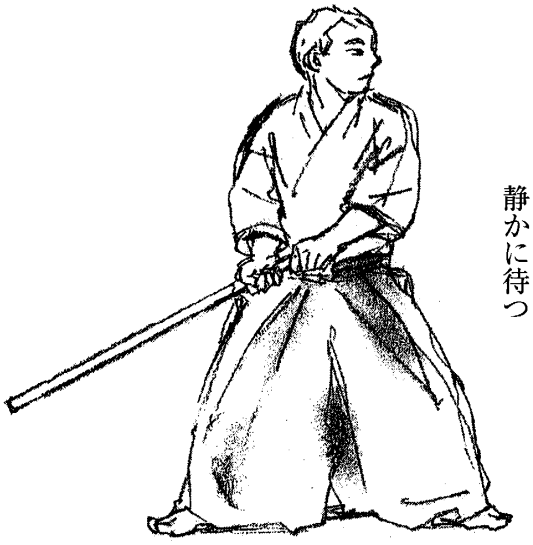
剣先を肘から肩の間に付けて進む



肩を斜めに打っていく

両膝をエマす

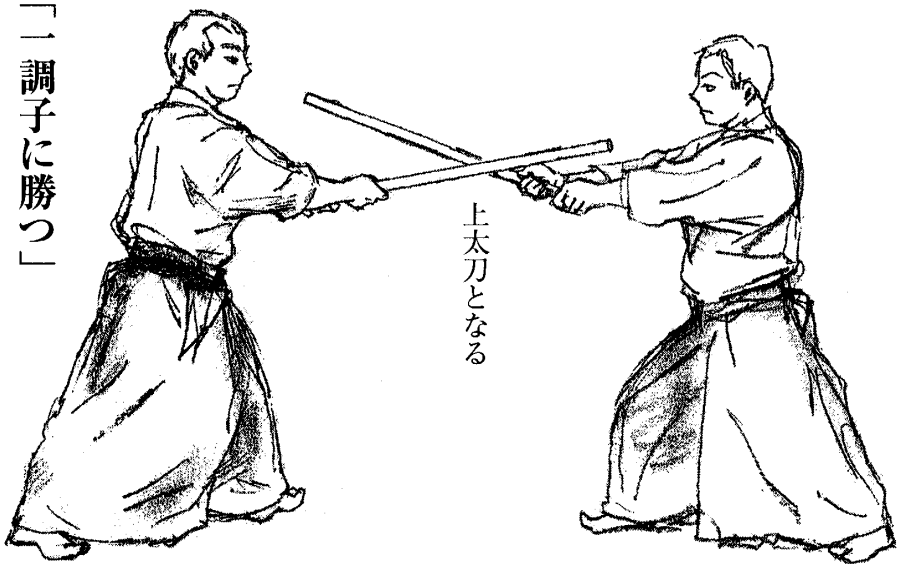
肩越しに見る



静かに待つ

「一調子に勝つ」

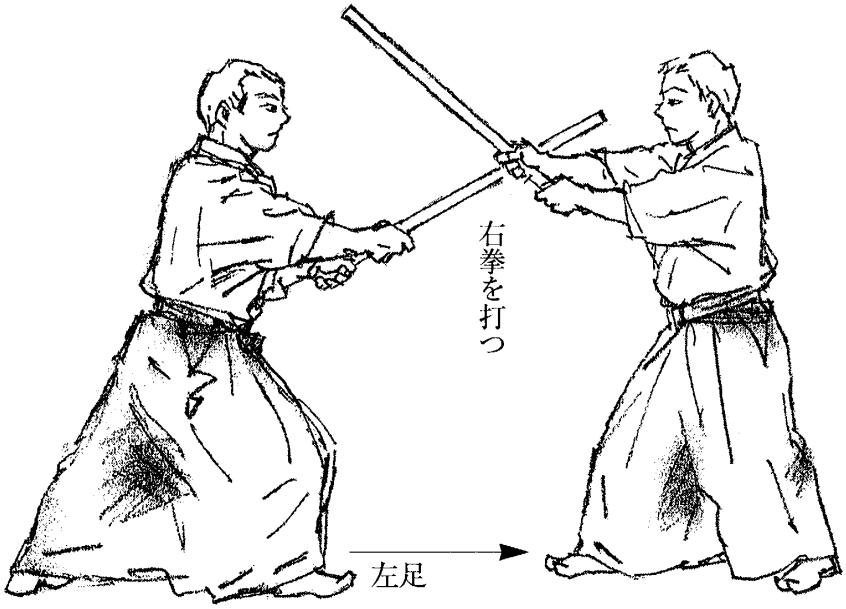
太刀を手でなく足腰で廻す
二の切り（残心）は省略

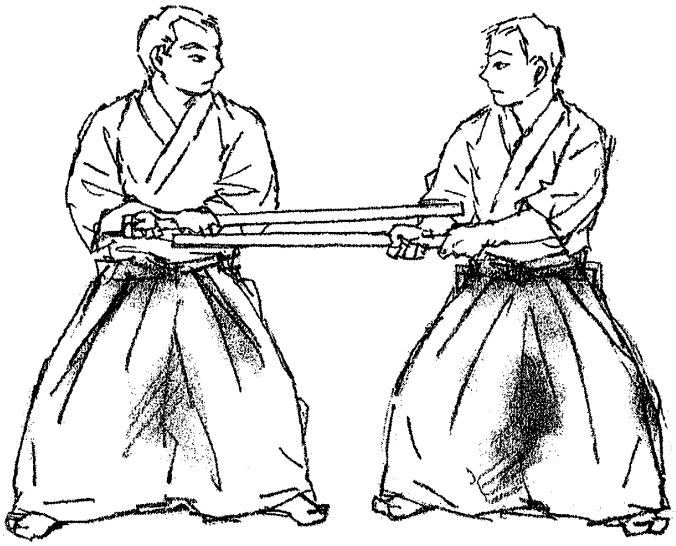


上太刀となる

「斬釘截鉄（ざんていせってつ）」江戸遣い

「斬釘の線」からの打ちを「正面」から見る





刃を右斜めに向け打太刀の手首を下に押さえながら、太刀の位置を変えないで横から左足で入身になり（膝をエマす）、剣先を打太刀の腹に付ける。

（ここまでが「打つ足」で、一調子に留まることなく行う）

二の切り（残心）は省略

（神奈川歯科大学教授）